

Oracle Portal

構成ガイド

リリース 3.0.9

2001 年 10 月

部品番号 : J04753-01

ORACLE®

Oracle Portal 構成ガイド, リリース 3.0.9

部品番号: J04753-01

原本名: Oracle9iAS Portal Configuration Guide

原本部品番号: A90096-01

原著者・協力者: Paul Encarnacion, Todd Vender, Susan Leveille, Susan Barton, Steve Buxton, Mark Clark, Rajiv Chopra, Demetris Christou, Pushkar Kapasi, Jeanne Kramer, William S. Lankenau, Eric Lee, Mark Loper, Sunil Marya, Frank Rovitto, Jerry Silver, Cheryl K. Smith, Rich Soule, Arun Arat Tharakkal, Dawn Tyler

Copyright © 1996, 2001, Oracle Corporation. All rights reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）の使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当プログラムのリバース・エンジニアリング等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

* オラクル社とは、**Oracle Corporation**（米国オラクル）または日本オラクル株式会社（日本オラクル）を指します。

危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションを用途として開発されておりません。オラクル社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、日本オラクル株式会社と開発元である **Oracle Corporation**（米国オラクル）およびその関連会社は一切責任を負いかねます。当プログラムを米国国防総省の米国政府機関に提供する際には、『**Restricted Rights**』と共に提供してください。この場合次の **Notice** が適用されます。

Restricted Rights Notice

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are "commercial computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs, including documentation, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are "restricted computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software - Restricted Rights (June, 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

目次

はじめに	ix
------------	----

1 要件の確認

1.1	システム要件	1-3
1.1.1	オペレーティング・システム	1-3
1.1.2	Oracle データベース	1-3
1.1.3	Oracle ホーム	1-4
1.1.4	Web ブラウザ	1-4
1.1.5	表領域の要件	1-4
1.1.6	init.ora の設定	1-5
1.1.7	端末の設定	1-5
1.1.8	interMedia Text の要件	1-6
1.1.9	UNIX シェルの設定	1-7

2 インストール後の情報と設定作業

2.1	Oracle Portal のデフォルト・スキーマ	2-2
2.2	Oracle Portal のデフォルト・アカウント	2-3
2.3	Oracle Portal のデフォルト・グループ	2-4
2.4	ブラウザでの Oracle Portal へのアクセス	2-5
2.4.1	インストールした Oracle Portal の完全 URL の簡略化	2-6
2.5	手動による Jserv の起動	2-7
2.6	Oracle Portal の言語サポートのインストール	2-7
2.6.1	言語サポートのインストール	2-8
2.6.2	BiDi 言語のグラフィック・サポートのインストール	2-10

2.7	Oracle Portal の削除	2-10
2.7.1	単一の Oracle Portal スキーマまたは Login Server の削除	2-11
2.8	自動登録の設定	2-12
2.9	Oracle Portal ベータ版の機能の有効化	2-14
2.10	証明書とは	2-15
2.10.1	署名 / 連鎖ファイルとは	2-16
2.10.2	証明書と HTTPS を使用するためのポートの保護	2-17
2.10.3	HTTPS を使用するための Oracle Portal の設定	2-18
2.10.4	httpd.conf への証明書エントリの追加	2-19
2.11	SSL (Secure Socket Layer) の有効化	2-21
2.11.1	Oracle Portal と Login Server での SSL の構成	2-21
2.11.2	Login Server の問合せパスの URL の設定	2-23
2.11.3	HTTPS モード用の有効な SSO 設定エントリの追加	2-24
2.11.4	Microsoft Internet Explorer を使用した HTTPS の設定	2-24
2.11.5	仮想ホストを使用した HTTPS の設定	2-25
2.12	Reports Security Portlet の設定	2-26

3 Oracle Portal の基本構成

3.1	スタンドアロン・ラップトップでの Oracle Portal の構成	3-2
3.2	統合サーバーとしての Oracle Portal の構成	3-4
3.3	従来の 3 層アーキテクチャの構成	3-5
3.3.1	別々の Oracle Portal と Login Server インスタンスの構成	3-6

4 Oracle Portal の分散型インストール

4.1	ノードとは	4-3
4.2	Oracle Portal の分散環境の利点	4-3
4.2.1	ノード間で共有されるポートレット・プロバイダ情報	4-3
4.2.2	スケーラブル・ソリューション	4-3
4.3	ノード要件	4-5
4.3.1	共通の Cookie ドメイン	4-5
4.3.2	Oracle HTTP サーバーの構成	4-5
4.3.3	共通の Cookie 名	4-6
4.3.4	共通の Login Server	4-6
4.3.5	対称型ノード登録	4-6
4.3.6	ポートレットの URL	4-7

4.4	Oracle Portal の分散環境の設定	4-7
4.4.1	手順 1: Oracle Portal ノードの作成	4-8
4.4.2	手順 2: 同一の Cookie ドメインの作成	4-8
4.4.3	手順 3: Oracle Portal DAD の編集	4-9
4.4.4	手順 4: 複数のノードと同一 Login Server との関連付け	4-11
4.4.5	手順 5: 管理者権限を持つ Login Server のユーザーの作成	4-13
4.4.6	手順 6: 各ノードの名前の検出	4-14
4.4.7	手順 7: ノード間でのノードの登録	4-14
4.4.8	手順 8: 各ノードのポートレット・リポジトリのリフレッシュ	4-16
4.4.9	手順 9: ノードの追加作成	4-16

5 Oracle9iAS の中間層とファイアウォールの設定

5.1	パートナ・アプリケーションとしての Oracle Portal	5-2
5.1.1	制御権のない既存の Login Server への Portal の関連付け	5-3
5.1.2	制御権のある既存の Login Server への Portal の関連付け	5-5
5.1.3	Oracle Internet Directory (OID) を使用して構成される Login Server	5-6
5.2	仮想ホストの設定	5-7
5.3	パラレル・ページ・エンジンの設定	5-9
5.3.1	パラレル・ページ・エンジンのパラメータの設定	5-9
5.4	ファイアウォールとロード・バランサの使用法	5-11
5.4.1	インターネットを介した逆プロキシ・サーバーの設定	5-11
5.4.2	Oracle HTTP サーバーの設定	5-14
5.4.3	ドメイン名の解決	5-16
5.5	ロード・バランシング・ルーターの設定	5-17
5.5.1	中間層とデータベースとの間へのファイアウォールの配置	5-18
5.6	Oracle HTTP サーバーの調整	5-19
5.6.1	MaxClient 値の設定	5-20

6 Oracle Portal コンテンツ領域の検索機能の設定

6.1	新しい検索機能	6-2
6.2	前提条件	6-2
6.2.1	UNIX での <i>interMedia Text</i>	6-3
6.3	Oracle Portal での検索	6-3
6.3.1	基本検索	6-4
6.3.2	拡張検索	6-5

6.3.3	<i>interMedia</i> Text 検索	6-6
6.3.4	<i>interMedia</i> Text 検索結果の表示	6-7
6.4	<i>interMedia</i> Text のパフォーマンス	6-7
6.4.1	問合せに関する考慮事項	6-7
6.4.2	索引付けに関する考慮事項	6-8
6.4.3	更新に関する考慮事項	6-9
6.5	<i>interMedia</i> Text 検索の設定	6-10
6.5.1	手順 1: グローバル・ページの設定	6-10
6.5.2	手順 2: <i>interMedia</i> Text 検索の有効化	6-11
6.5.3	手順 3: <i>interMedia</i> Text 索引の作成	6-13
6.5.4	手順 4: <i>interMedia</i> Text 索引の管理	6-15
6.6	<i>interMedia</i> テキスト索引の設定	6-17
6.7	<i>interMedia</i> Text 索引の削除	6-17
6.8	<i>interMedia</i> Text の環境設定	6-18
6.8.1	listener.ora	6-18
6.8.2	tnsnames.ora	6-19
6.9	多言語機能 (マルチレクサー)	6-20
6.10	Oracle Portal で作成される <i>interMedia</i> Text 関連のプロシージャ	6-20

7 リッチ・コンテンツが含まれる Oracle Portal のレポートとフォームの作成

7.1	<i>interMedia</i> オブジェクト・タイプ	7-2
7.2	Oracle Portal レポートのリッチ・コンテンツ	7-2
7.2.1	オブジェクト属性の表示	7-3
7.2.2	表示オプション	7-3
7.2.3	レポートの作成	7-4
7.2.4	QBE レポート - パラメータ入力フォーム	7-6
7.3	Oracle Portal フォームのリッチ・コンテンツ	7-7
7.3.1	フォームの作成	7-7
7.4	Oracle Portal ナビゲータを使用した表のブラウズ	7-9
7.5	現在わかっている問題	7-10

8 トラブルシューティング

8.1	システム要件の検証	8-2
8.1.1	インストール・ログの確認	8-2
8.2	問題の原因となっているコンポーネントの識別	8-2

8.2.1	Apache ログ・ファイルの場所	8-3
8.3	診断ツールを使用した接続問題のトラブルシューティング	8-3
8.3.1	診断ツールによって検出される問題	8-4
8.3.2	診断ツールによって検出されない問題	8-4
8.3.3	診断ツールの実行	8-5
8.3.4	診断レポートの例	8-6
8.4	構成制御ポイントとファイルの場所	8-7
8.4.1	Oracle Portal インストール・ディレクトリ名の変更	8-8
8.5	Oracle Portal のトラブルシューティング	8-8
8.5.1	インストールと構成上の問題	8-11
8.5.2	Oracle Portal へのログイン時に発生する問題	8-19
8.5.3	Oracle Portal の実行時に発生する問題	8-23
8.5.4	Oracle Portal の使用時に発生するその他の問題	8-29

A Oracle9i Application Server 構成ファイル

A.1	制御ポイントとファイルの場所	A-2
A.1.1	Oracle HTTP サーバー構成ファイル (httpd.conf)	A-2
A.1.2	JServ 構成ファイル (zone.properties)	A-3
A.1.3	Database Access Descriptor (DAD) 設定ファイル (wdbsvr.app)	A-3
A.1.4	Oracle データベース接続ファイル (tnsnames.ora)	A-5
A.1.5	Login Server の設定表	A-6
A.1.6	Login Server のパートナ・アプリケーション表	A-7
A.1.7	ローカルの HOSTS ファイル	A-8

B Oracle Portal のインストールと設定のスク립ト

B.1	概要	B-2
B.2	winstall スクリプトを使用した Oracle Portal の手動インストール	B-3
B.2.1	オンライン・ヘルプの手動インストール	B-9
B.3	linstall スクリプトを使用した Login Server の手動インストール	B-10
B.4	ssodatan スクリプトを使用した新しい Oracle Portal インスタンスと Login Server の設定	B-11
B.5	ssodatax スクリプトを使用した既存の Portal インスタンスの更新	B-14
B.6	Portal セッション Cookie の適用範囲の変更	B-17
B.7	セッション・クリーンアップ・ジョブの管理	B-18

索引

図目次

1-1	Oracle9i Application Server のサービスとコンポーネント	1-2
2-1	Login Server の「問合せパスの URL 接頭辞」フィールド	2-23
3-1	統合サーバー構成	3-4
3-2	従来の 3 層アーキテクチャ	3-5
3-3	Oracle Portal と Login Server が別々になっている 3 層アーキテクチャ	3-6
4-1	Oracle Portal の分散型インストール・トポロジー	4-2
4-2	異なるノードで作成されたポートレットを単一ページに表示した例	4-4
5-1	パートナ・アプリケーションとしての Oracle Portal	5-2
5-2	Oracle Internet Directory (OID) を使用して構成された Login Server	5-6
5-3	逆プロキシ・サーバーを使用したインターネット構成	5-11
5-4	逆プロキシ・サーバー構成の例	5-13
5-5	ロード・バランス・ルーターの構成	5-17
6-1	Oracle Portal の基本検索画面	6-5
6-2	Oracle Portal の拡張検索画面	6-6
6-3	グローバル・ページの設定 - プロキシ・サーバー	6-10
6-4	「サービス」ポートレット - <i>interMedia Text</i> のプロパティ	6-11
7-1	ナビゲータに表示されるアプリケーション・コンポーネントのリンク	7-4
7-2	Oracle Portal のレポート・ウィザード - 共通オプション	7-5
7-3	<i>interMedia</i> リッチ・コンテンツが含まれる Oracle Portal レポートの例	7-5
7-4	「ポータル・アクセス」タブ - 「ポータルに公開」	7-6
7-5	Oracle Portal フォーム - アイテム・レベル・オプション	7-8
7-6	<i>interMedia</i> リッチ・コンテンツが含まれる Oracle Portal フォームの例	7-8

表目次

2-1	作成されるデフォルトの Oracle Portal スキーマ	2-2
2-2	作成されるデフォルトの Oracle Portal アカウント	2-3
2-3	作成されるデフォルトの Oracle Portal グループ	2-4
2-4	Oracle Portal にアクセスするためにブラウザで入力する URL	2-5
2-5	サポートされている言語と略称	2-7
2-6	言語スクリプトのパラメータ (langinst)	2-9
2-7	自動登録パラメータの説明	2-13
2-8	証明書の種類	2-15
2-9	証明書ファイルとその場所	2-16
2-10	zone.properties ファイルの場所	2-17
2-11	Oracle HTTP サーバー構成ファイルの証明書エントリ	2-19
4-1	パートナ・アプリケーションの設定例	4-12
4-2	Login Server の新規ユーザーの作成例	4-13
4-3	ノード a からノード b への登録情報	4-14
4-4	分散環境用のノードの追加作成	4-16
5-1	パラレル・ページ・エンジン (PPE) のパラメータ	5-9
6-1	interMedia Text 検索のタイプ	6-4
6-2	作成された interMedia Text 索引	6-13
7-1	interMedia オブジェクト・タイプ	7-2
7-2	Oracle Portal のレポート・ウィザード	7-2
8-1	Apache ログ・ファイルの場所	8-3
8-2	診断ツールの diag のパラメータ	8-5
8-3	Oracle Portal のインストール・ディレクトリ構造	8-8
8-4	インストールと構成上の問題のリスト	8-8
8-5	Oracle Portal へのログイン時に発生する問題のリスト	8-9
8-6	Oracle Portal の実行時に発生する問題のリスト	8-9
8-7	Oracle Portal の使用時に発生するその他の問題のリスト	8-10
A-1	Oracle Portal の制御ポイントのリスト	A-2
A-2	Database Access Descriptor (DAD) の設定パラメータ	A-4
B-1	Oracle Portal のインストール・スクリプト	B-2
B-2	linstall スクリプトのパラメータ	B-10
B-3	ssodatan スクリプトのパラメータ	B-12
B-4	ssodatax スクリプトのパラメータ	B-15
B-5	ctxjsb パラメータ	B-20

はじめに

このガイドでは、Oracle9iAS Portal の設定方法について説明します。

注意： このガイドでは、Oracle9iAS Portal の呼称として Oracle Portal を使用します。

この章の内容：

- [対象読者](#)
- [マニュアルの構成](#)
- [マニュアルの表記規則](#)
- [マニュアル](#)

対象読者

このガイドは、Oracle Portal の設定および保守に携わるユーザーを対象としています。

マニュアルの構成

このガイドの構成は次のとおりです。

章	内容
第 1 章「要件の確認」	Oracle Portal のシステム要件について説明します。
第 2 章「インストール後の情報と設定作業」	ご使用のブラウザで Oracle Portal にアクセスする方法、ご使用のブラウザで Oracle Portal の言語をインストールしたり変更する方法、インストール時に作成されるデフォルトの Oracle Portal スキーマ、アカウントおよびグループの説明など、インストール後の一般的な情報を提供します。削除の方法も説明しています。
第 3 章「Oracle Portal の基本構成」	スタンドアロン・ラップトップ、統合サーバーおよび従来の 3 層構造を含め、Oracle Portal を使用して構成できる様々なトポロジーについて説明します。
第 4 章「Oracle Portal の分散型インストール」	分散環境で Oracle Portal を実行して、ポートレット・プロバイダをノード間で共有できるようにし、拡張性、可用性およびパフォーマンスを向上させる方法について説明します。
第 5 章「Oracle9iAS の中間層とファイアウォールの設定」	Oracle Portal リスナーから個別の Login Server リスナーを設定する方法について説明します。
第 6 章「Oracle Portal コンテンツ領域の検索機能の設定」	Oracle Portal を使用して作成したコンテンツ領域でテキスト検索を行うための <i>interMedia Text</i> の設定方法について説明します。
第 7 章「リッチ・コンテンツが含まれる Oracle Portal のレポートとフォームの作成」	グラフィック、オーディオ、イメージ、ビデオなどのリッチ・コンテンツを Oracle Portal のレポートやフォームに組み込む方法について説明します。
第 8 章「トラブルシューティング」	Oracle Portal のインストールや使用時に発生する可能性がある問題の解決方法について説明します。

章	内容
付録 A 「Oracle9i Application Server 構成ファイル」	Oracle9i Application Server と中間層にあるそのコンポーネントの接続や動作に影響を及ぼす可能性がある構成ファイル、およびその接続先のマシンについて説明します。
付録 B 「Oracle Portal のインストールと設定のスクリプト」	構成のカスタマイズに使用される各種スクリプトについて説明します。また、スタンドアロンで動作する Login Server などの追加コンポーネント、Oracle Portal の追加ノード、Oracle Portal への追加言語翻訳のロード、およびインポートとエクスポートの各ユーティリティについても説明します。

マニュアルの表記規則

このマニュアルで使用される表記規則は、次のとおりです。

表記規則	意味
太字	強調に使用されます。 また、ボタン名、ラベル、リンクなどのユーザー・インタフェース要素に使用されます。
クーリエ	ユーザーが入力するテキストを示します。 また、ファイル名およびディレクトリにも使用されます。
<ORACLE_HOME>	Oracle Portal コンポーネント用のファイルなど、Oracle9i Application Server のインストール・ファイルの場所を参照してください。

マニュアル

「Oracle Portal オンライン・ヘルプ」コンテンツ領域はオンライン・ヘルプ・システムで、ステップ式の詳細な説明とリファレンス情報、および Oracle Portal の紹介とトラブルシューティング情報を提供します。

このガイドでは、オンライン・ヘルプ・システムに含まれる様々な「トピック」を参照します。

注意：

オンライン・ヘルプ・システムでフルテキスト検索を実行するには、*interMedia Text* を設定する必要があります。詳細は、[第 6 章「Oracle Portal コンテンツ領域の検索機能の設定」](#)を参照してください。

Oracle Portal のマニュアル

次のマニュアル（英語）を参照することができます。これらは、次の場所にある Oracle Technology Network から利用できます。

<http://technet.oracle.com>

部品番号	タイトル	説明
A90095-01	リリース・ノート	製品またはマニュアルに関する最新の変更情報を提供します。
A90097-01	チュートリアル	Oracle Portal の基本事項を習得するためのレッスンを段階的に行います。
A90098-01	Oracle Portal ポータル構築ガイド	Oracle Portal の拡張機能の使用法を示す事例をいくつか紹介します。
	Oracle Portal Development Kit (PDK)	Oracle Portal の API セットに関する詳細情報と API の実装を示す多数の例を提供します。

要件の確認

Oracle Portal のインストール前に、この章に記述されているシステム要件を満たしていることを確認してください。

Oracle Portal の標準インストールの一環として、次のコンポーネントがインストールされます。

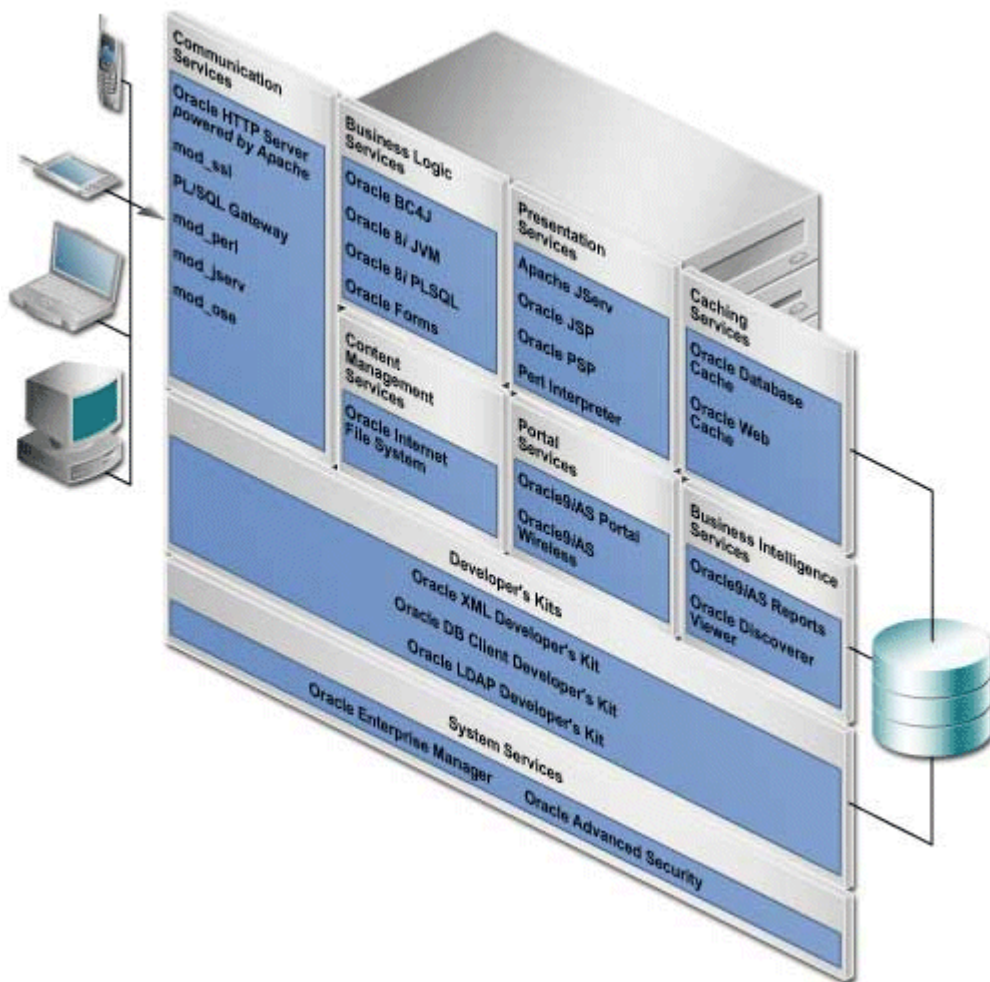
- Oracle Portal データベース・オブジェクト: イメージ、デモ、コンテンツ領域、共通サービス、ユーティリティ、必要なサポート・ファイル、ドキュメント、シングル・サインオン (SSO)
- Oracle9i Application Server Web サーバー: サブレット、Oracle PL/SQL ゲートウェイ (mod_plsql など)、Oracle HTTP サーバー

関連項目:

- Oracle9i Application Server のドキュメント・ライブラリに含まれている Oracle HTTP サーバーのマニュアル (Oracle HTTP モジュール (mod) および Oracle9i Application Server の全体的なアーキテクチャに関する詳細情報)
 - 該当するオペレーティングシステムの『Oracle9i Application Server インストール・ガイド』
-

次の図は、Oracle9i Application Server に同梱されている各種コンポーネントを示しています。Oracle Portal は、Portal Services の下にパッケージ化されています。

図 1-1 Oracle9i Application Server のサービスとコンポーネント



1.1 システム要件

Oracle Portal をインストールする前に、Oracle8i データベースおよび Oracle9i Application Server (Oracle HTTP サーバーを含む) を実行しておく必要があります。

Oracle Portal は、Oracle9i Application Server に同梱されているため、それと同じ Oracle ホームにインストールされます。つまり、Oracle8i データベースとは異なる Oracle ホームにインストールされます。

また、Oracle Portal のインストール前に、システムが次の要件を満たしていることを確認してください。最新の情報については、リリースノートを参照してください。

1.1.1 オペレーティング・システム

詳細は、『Oracle9i Application Server インストレーション・ガイド』を参照してください。

1.1.2 Oracle データベース

Oracle Portal は、次のデータベースにインストールできます。

- Oracle8i リリース 8.1.6.2.0 Enterprise Edition
- Oracle8i リリース 8.1.7 Standard Edition および Enterprise Edition

必要なデータベース・パッチの詳細は、『Oracle9iAS Portal リリース・ノート』を参照してください。

注意： Oracle 8.1.6.2 は必須です。Oracle Portal では、システム固有の動的 SQL、バルク収集、自律型トランザクション、ネストされた表やオブジェクトなど、Oracle8i の PL/SQL 機能を幅広く利用するためです。また、新しい機能の中には Java を介して公開されているものもいくつかあります。

Windows NT/2000 で Oracle Portal の *interMedia Text* を使用できるようにする場合は、Oracle 8.1.7 データベースが必要です。

また、ご使用のデータベースで次の条件が満たされていることを確認してから、Oracle Portal をインストールしてください。

- Oracle JServer オプション (Enterprise JavaBeans および CORBA Tools を含む)、Java Virtual Machine、および Oracle Java Tools がインストールされていること。
- データベースの SYS ユーザー・パスワードを持っていること。
- データベースが起動していること。

1.1.3 Oracle ホーム

Oracle9i Application Server とそのコンポーネントである Oracle Portal は、Oracle8i データベースとは異なる Oracle ホーム・ディレクトリにインストールする必要があります。

1.1.4 Web ブラウザ

- Netscape 4.0.8 および 4.72
- Microsoft Internet Explorer 4.0.1（サービス・パック 1）および 5.0.1

注意： ご使用のブラウザが推奨バージョンよりも以前のものである場合は、JavaScript エラーが発生する可能性があります。

1.1.5 表領域の要件

Oracle Portal は Oracle9i Application Server とともにインストールされるため、表領域の容量はすべての Oracle9iAS コンポーネントの全体として計算されます。表領域の要件については、ご使用のプラットフォームの『Oracle9i Application Server インストレーション・ガイド』を参照してください。

注意：

- Oracle Portal のインストール前に、表領域、表および索引のサイズを大きくして、インストールにかかる時間を短縮し、パフォーマンスを向上させることもできます。詳細は、[第 8 章「トラブルシューティング」](#)を参照してください。
 - Windows NT/2000 環境で FAT ファイル・システムを使用している場合は、デフォルト表領域の容量を倍にします（300MB など）。
 - インストール時に、Oracle Portal のスキーマとデータベース・オブジェクトのインストール先となるデータベースの表領域を選択するよう指示されます。Oracle Portal Configuration Assistant によって設定されているデフォルト表領域は、USERS です。
 - コンテンツ領域は Oracle Portal スキーマの一部であるため、コンテンツ領域を作成するたびに表領域を新たに割り当てないようにしてください。
-
-

1.1.6 init.ora の設定

Oracle Portal がインストールされている Oracle ホームの `init.ora` パラメータは、次のように設定します。

```
MAX_ENABLED_ROLES = 25
OPEN_CURSORS = 50
COMPATIBLE = 8.1.0
JAVA_POOL_SIZE = 20971520
SHARED_POOL_SIZE = 31457280
```

注意：

- 前述の `init.ora` のサンプルでは、Oracle8i データベースのリリース 8.1.0 以降と互換性があることを示す `COMPATIBLE` を除いて、必要最低限の値を指定しています。
 - Oracle HTTP サーバーにエラー番号 503 のエラーが発生している場合は、負荷に耐えられる数のセッションが、このデータベースに設定されていない可能性があります。`init.ora` ファイルに設定されているデータベース・プロセスの数を倍にしてみてください。
-
-

1.1.7 端末の設定

UNIX では、ご使用の端末を次のいずれかのタイプに設定する必要があります（`set TERM` コマンドを使用）。

```
3151 386 386s 386u 386x
ansi avx3
dec dgd2 dgd4
hft hftc hp iris ncd
sun sun5 tandm
vt100 vt220
wy150 wy50
xsun xsun5
```

1.1.8 *interMedia Text* の要件

Oracle Portal で *interMedia Text* 検索を行えるようにするには、次の要件が満たされていることを確認します。

- Oracle Universal Installer (OUI) と Database Configuration Assistant を実行して、*interMedia Text* オプションを備えた Oracle8i データベースをインストールし、設定します。Oracle8i データベースのインストールと設定を行って *interMedia Text* を使用できるようにする方法については、該当する Oracle8i のインストレーション・ガイドを参照してください。

注意： Windows NT/2000 で Oracle Portal の *interMedia Text* を使用可能にする場合は、次の要件が適用されます。

- Oracle Portal は、Oracle 8.1.7 データベースにインストールされている必要があります。
- 「Database Access Descriptor」 ページから接続プーリングを使用禁止にします。詳細は、Oracle9i Application Server のドキュメント・セットの一部として提供される『PL/SQL ゲートウェイの使用』を参照してください。

interMedia Text は、データベースと同じ Oracle ホームにインストールする必要があります。Oracle8i データベースの最小限のインストールしか行わない場合は、この機能はインストールされません。

- 『Oracle9i Application Server インストレーション・ガイド』の指示に従って、Oracle Portal をインストールしてください。
- データベースと Net8 リスナーを起動する前に、LD_LIBRARY_PATH を次のように設定します。

```
$LD_LIBRARY_PATH:$ORACLE_HOME/ctx/lib
```

関連項目：

- [第 6 章「Oracle Portal コンテンツ領域の検索機能の設定」](#)
 - 『Net8 管理者ガイド』（tnsnames.ora と listener.ora の各構成ファイルの作成に関する詳細情報）
-

インストール時に何らかの問題が発生した場合は、インストール・セッションのログを確認してください。このログには、インストール時に実行された操作と作成されたコンポーネントが記録されています。このログ・ファイルは次の場所にあります。

```
ORACLE_HOME>/assistants/opca/install.log
```

関連項目： [第8章「トラブルシューティング」](#)

1.1.9 UNIX シェルの設定

UNIX の場合は、Oracle Portal のインストールに `csh` または `ksh` を使用する必要があります。Oracle Portal Configuration Assistant で使用する Oracle の様々なユーティリティは、他のシェルでは正常に動作しない可能性があります。Oracle Portal Configuration Assistant では、サブシェルを起動して、SQL*Plus、SQL*Loader、インポート、loadjava などの様々なユーティリティを実行します。Oracle Portal をインストールする前に、シェルの他の Oracle ホームをソースにしないようにする必要があります。たとえば、デフォルトでシェルのソースが古い Oracle ホームになっている場合、Oracle Portal Configuration Assistant では、別の Oracle ホームをソースとするシェルを起動時に作成します。これは、ユーティリティにエラーが発生する原因になります。

インストール後の情報と設定作業

この章では、インストール後の Oracle Portal に関する情報と実行できる設定作業について説明します。

参照： Oracle9i Application Server を使用して Oracle Portal をインストールする方法については、『Oracle9i Application Server インストレーション・ガイド』を参照してください。

この章の内容：

- Oracle Portal のデフォルト・スキーマ
- Oracle Portal のデフォルト・アカウント
- Oracle Portal のデフォルト・グループ
- ブラウザでの Oracle Portal へのアクセス
- 手動による Jserv の起動
- Oracle Portal の言語サポートのインストール
- Oracle Portal の削除
- 自動登録の設定
- Oracle Portal ベータ版の機能の有効化
- 証明書とは
- SSL (Secure Socket Layer) の有効化
- Reports Security Portlet の設定

2.1 Oracle Portal のデフォルト・スキーマ

Oracle Portal は、主として Oracle8i データベースにインストールされ、一部のサポート用コンポーネントが Oracle9i Application Server の中間層にインストールされます。

Oracle Portal をデフォルト・モードでインストールした場合は、スキーマが 6 つ作成されます。デフォルトのベース・スキーマ名は portal30 であり、この名前はインストール時に変更できます。

重要： セキュリティ上の理由から、portal30、portal30_sso、および portal30_sso_ps スキーマのデフォルト・パスワードをすぐに変更することを強くお勧めします。これらのパスワードは、データベース管理者が「alter user <schema> identified by <password>」コマンドを使用して変更する必要があります。

portal30 または portal30_sso のパスワードを変更する際は、それぞれの DAD に応じてパスワードも更新する必要があります。ログイン・サーバーがポータル・インスタンスとは別のデータベース・インスタンス上にあるときに portal30_sso_ps のパスワードを変更する際は、ssodatax を再実行して、データベース・リンクの情報が更新されるよう新しいパスワードを指定する必要があります。

表 2-1 作成されるデフォルトの Oracle Portal スキーマ

スキーマ	説明
portal30	Oracle Portal の製品スキーマ。インストールされたポータル・データベース・オブジェクトが入ります。
portal30_public	ポータル・ユーザーが Oracle Portal の製品スキーマに入っているプロシージャを実行するときにマップするスキーマ。このスキーマ名は、ベース・スキーマ名の後ろに「_public」を付けたものです。
portal30_sso	Login Server の製品スキーマ。このスキーマの名前は、インストーラで変更できます。指定しない場合は、デフォルトでベース・スキーマ名の後ろに「_sso」を付けたものになります。
portal30_sso_ps	外部アプリケーションのパスワード・ストアへのアクセスに使用される、Login Server データベース・インスタンス上のスキーマ。このスキーマ名は、Login Server スキーマ名の後ろに「_ps」を付けたものです。Portal は、このスキーマを介して Login Server の外部アプリケーションのパスワード・ストアにアクセスします。Login Server と Portal が同じデータベース・インスタンス上にある場合は直接アクセスし、異なるデータベース・インスタンス上にある場合は dblink を介してアクセスします。

表 2-1 作成されるデフォルトの Oracle Portal スキーマ（続き）

スキーマ	説明
<i>portal30_sso_public</i>	ポータル・ユーザーが Login Server の製品スキーマに入っているプロシージャを実行するときにマップするスキーマ。このスキーマ名は、Login Server スキーマ名の後ろに「_public」を付けたものです。
<i>portal30_demo</i>	Oracle Portal のデモ・コードと一緒にインストールされるスキーマ。このスキーマの名前は、ベース・スキーマ名の後ろに「_demo」を付けたものです。

2.2 Oracle Portal のデフォルト・アカウント

Oracle Portal をインストールするたびに、デフォルトのログイン・アカウントが1組作成されます。この製品を portal30 というスキーマにインストールした場合は、次のようなデフォルト・アカウントが作成されます。

表 2-2 作成されるデフォルトの Oracle Portal アカウント

アカウント	説明
<i>portal30</i>	Oracle Portal で最上位の権限を持つデータベース管理者（DBA）向けに作成されるアカウント。
<i>portal30_admin</i>	ポータル管理者向けに作成されるアカウント。このアカウントは DBA アカウントに似ていますが、スキーマや他のデータベース・オブジェクトの作成や管理といったデータベース管理機能にアクセスする権限は付与されていません。
<i>public</i>	認証されていないセッションのパブリック・ユーザー向けに作成されるアカウント。これは、認証前にすべてのセッションに関連付けられるアカウントです。
<i>portal30_SSO</i>	Login Server アプリケーション用に作成されるアカウント。Login Server は Oracle Portal のインフラストラクチャ・コードを有効に再利用して実装されるため、その再利用の結果としてこのユーザー・アカウントが作成されます。
<i>portal30_sso_admin</i>	Login Server のインストールと並行して作成される管理用アカウント。Login Server の「総合管理者」権限がありますが、Portal の管理権限はありません。

注意： セキュリティ上の理由から、最初のログインの後でこれらのアカウントのパスワードをすべて変更してください。デフォルトでは、パスワードはユーザー名で設定されます。パスワードを変更するには、Login Server にログインし、該当するユーザー・アカウントを編集して、そのパスワードを変更します。

関連項目：「Oracle Portal オンライン・ヘルプ」の「Working with Users」フォルダのトピック

2.3 Oracle Portal のデフォルト・グループ

インストール時に次のグループが作成されます。

表 2-3 作成されるデフォルトの Oracle Portal グループ

グループ	説明
DBA	システム内で最上位の権限を持っているグループ。すべてのグローバル権限がこのグループに付与されます。このグループがインストールされるときは、そのメンバー（portal30 などの製品スキーマ名が付いたユーザー）は 1 人だけです。
PORTAL_ADMINISTRATORS	このグループにはほとんどのグローバル権限が付与されますが、ANY_SCHEMA/MANAGE と ANY_SHARED_COMPONENT/MANAGE というデータベース関連の権限は付与されません。このグループは、admin ユーザー、つまり portal30_admin から構成され、dba グループもその中に含まれます。
PORTAL_DEVELOPERS	このグループには、Oracle Portal のコンポーネントやアプリケーションを作成し管理する権限が付与されます。
PORTLET_PUBLISHERS	このグループには、ポートレットを公開する権限が付与されます。このグループのメンバーは、フォルダ、チャート、カレンダーなど、システム内のコンポーネントを作成できます。このグループは最初に portal_administrators グループから構成され、そのメンバーがこのグループに追加するユーザーやグループを決めることができます。
AUTHENTICATED_USERS	Oracle Portal にログインしたすべてのユーザーがこのグループに追加されます。これは、ログイン・ユーザーが権限のある操作を実行できるようにする便利なメカニズムです。指定した権限がこのグループに付与され、グループのメンバーを変更することはできません。
RW_ADMINISTRATOR	このグループは、登録されたレポート定義ファイル、サーバーおよびプリンタ・オブジェクトを作成、更新および削除できます。
RW_BASIC_USER	このグループは、実行する権限が付与されたレポートの実行のみできます。

表 2-3 作成されるデフォルトの Oracle Portal グループ (続き)

グループ	説明
RW_DEVELOPER	このグループは、RW_POWER_USER および RW_BASIC_USER グループの権限に加えて、システム環境を表示するコマンドを実行できます。テストを実行して詳細なエラー・メッセージを取得する必要のある開発者に、このグループを割り当てることができます。
RW_POWER_USER	このグループは、RW_BASIC_USER グループの権限に加えて、詳細なエラー・メッセージを表示することができます。

関連項目：「Oracle Portal オンライン・ヘルプ」の「Working with Users」フォルダのトピック

2.4 ブラウザでの Oracle Portal へのアクセス

Oracle Portal をインストールした後は、ご使用のブラウザで次の URL を入力してそれにアクセスします。

http://<hostname>:<portnumber>/pls/<dad>

表 2-4 に、Oracle Portal にアクセスするためにブラウザで入力する URL の定義を示します。

表 2-4 Oracle Portal にアクセスするためにブラウザで入力する URL

パラメータ	説明
hostname	Oracle Portal をインストールしてあるマシンを定義します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ ホスト名と絶対ドメイン名の両方を入力してください。たとえば、<i>host.domain.com</i> のように入力します。 ■ この名前は、次の場所にある <i>httpd.conf</i> という Apache 構成ファイルの <i>ServerName</i> パラメータとも一致している必要があります。 <ORACLE_HOME>/Apache/Apache/conf
portnumber	Oracle Portal のアクセス用に指定したポート番号を定義します。
pls	仮想パスを定義し、要求が PL/SQL プロシージャに対するものであることを指定します。PL/SQL プロシージャでは、その要求を PL/SQL ゲートウェイに経路変更するよう Oracle HTTP サーバーに警告します。

表 2-4 Oracle Portal にアクセスするためにブラウザで入力する URL

パラメータ	説明
dad	Oracle Portal のインストール用に指定した Database Access Descriptor (DAD) を定義します。DAD には、データベースへの接続方法に関する情報が入っています。

関連項目：

- 2.2 項「Oracle Portal のデフォルト・アカウント」
- Oracle9i Application Server のドキュメント・ライブラリに含まれている『PL/SQL ゲートウェイの使用』

2.4.1 インストールした Oracle Portal の完全 URL の簡略化

Apache Redirect ディレクティブを使用すると、Oracle Portal のインストールによって作成された完全 URL をより覚えやすい（わかりやすい）URL に簡略化できます。このようにすると、エンド・ユーザーは単純な URL を入力するだけで Oracle Portal にアクセスできます。

デフォルトでは、新たにインストールした Oracle Portal の URL は次のように入力する必要があります。

http://<hostname>:<portnumber>/pls/<dad>

この URL を次のように簡略化できます。

http://<hostname>/<redirectpath>

1. Oracle HTTP サーバーの構成ファイル http.conf を開きます。デフォルトでは、このファイルは次のディレクトリにあります。

<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/conf/

2. 次のようにリダイレクト・パスを入力します。

Redirect /<DADnamepath> http://<hostname>:<portnumber>/pls/<dad>

たとえば、次のようになります。

Redirect /portalhome http://mysite.oracle.com/pls/portal30

この例では、エンド・ユーザーは次の URL を入力するだけで、完全な URL にアクセスできます。

http://mysite.oracle.com/portalhome

たとえば、次のような URL にアクセスできます。

`http://mysite.oracle.com:80/pls/portal30`

このテクニックは、URL に付加されるどのような有効なパスにも適用できます。たとえば、「Oracle Portal オンライン・ヘルプ」コンテンツ領域を表示する場合は、次の URL を入力します。

`http://mysite.oracle.com/portalhome/url/folder/ONLINE_HELP`

関連項目：「Oracle Portal オンライン・ヘルプ」の「What are direct access URLs」トピック

2.5 手動による Jserv の起動

Oracle9i Application Server で手動による JServ の起動プロセスを使用する場合は、Oracle Portal のクラスのパスを CLASSPATH 変数に追加する必要があります。手動による JServ の起動プロセスは、jserv.properties ファイルの wrapper.classpath エントリを読み取りません。

2.6 Oracle Portal の言語サポートのインストール

ご使用のブラウザから、サポートされている 24 の言語で Oracle Portal のユーザー・インタフェースをインストールし、表示することができます。指定の言語サポートをインストールするには、wwwseedus.sql と langinst.csh のスクリプトを実行します。言語をインストールしておく、「Set Language」ポートレットを使用して、Oracle Portal で使用する言語を選択できます。

表 2-5 は、サポートされている言語と略称の一覧です。

表 2-5 サポートされている言語と略称

言語	略称	言語	略称
アラビア語	ar	オランダ語	nl
チェコ語	cs	ポーランド語	pl
ドイツ語	d	ポルトガル語	pt
デンマーク語	dk	ポルトガル語（ブラジル）	ptb
スペイン語	e	ルーマニア語	ro
ギリシア語	el	ロシア語	ru
フランス語	f	スウェーデン語	s

表 2-5 サポートされている言語と略称（続き）

言語	略称	言語	略称
ハンガリー語	hu	フィンランド語	sf
イタリア語	i	スロバキア語	sk
ヘブライ語	iw	タイ語	th
日本語	ja	トルコ語	tr
韓国語	ko	中国語（簡体字）	zhs
ノルウェー語	n	中国語（繁体字）	zht

2.6.1 言語サポートのインストール

Oracle Portal で指定の言語サポートをインストールするには、次の手順に従います。

- 1. コマンドライン・プロンプトを起動します。
- 2. <ORACLE_HOME>/portal30/admin/plsql/nlsres/ctl/us ディレクトリに変更します。
- 3. SQL*Plus を起動し、Oracle Portal がインストールされているデータベースにログインします。
- 4. SQL*Plus から、PORTAL30 スキーマで wwwseedus.sql スクリプトを実行します。
- 5. <ORACLE_HOME>/portal30/admin/plsql ディレクトリに変更します。
- 6. ご使用のオペレーティング・システムによって、次のどちらかのコマンドを入力します。

UNIX

```
langinst.csh <-s portal_schema> <-p portal_password> <-o sso_schema>  
<-d sso_password> <-c portal_connect_string> -l <language> -available
```

Windows NT/2000

```
langinst.cmd <-s portal_schema> <-p portal_password> <-o sso_schema>  
<-d sso_password> <-c portal_connect_string> -l <language> -available
```

例

```
langinst.csh -s portal30 -p portal30 -o portal30_sso -d portal30_sso -c orcl -l cs  
-available
```

表 2-6 は、langinst の言語スクリプトのパラメーター一覧です。

表 2-6 言語スクリプトのパラメータ (langinst)

パラメータ	説明
-s portal_schema	Oracle Portal データベース・オブジェクトのデータベース・スキーマ。デフォルトは、PORTAL30 です。
-p portal_password	Oracle Portal スキーマの Oracle データベース・パスワード。デフォルトは、<portal_schema> です。
-o sso_schema	Login Server オブジェクトの Oracle データベース・スキーマ。デフォルトは、<portal_schema>_SSO です。
-d sso_password	Login Server スキーマの Oracle データベース・パスワード。デフォルトは、<sso_schema> です。
-c connect_string	Oracle Portal スキーマがインストールされているデータベースの接続文字列。スキーマがリモート・データベースに格納されている場合にのみ、この接続文字列を指定します。
-l language	インストールする言語の略称。表 2-5「サポートされている言語と略称」を参照してください。
-available	タブが翻訳されることを保証します。これは必須です。

7. Oracle Portal で必要な言語ごとに手順 6 を繰り返します。
 8. ユーザーが任意の言語を選択できるようにするには、「Set Language」ポートレットをポータル・ページに追加します。このポートレットには、現在インストールされている言語がすべて表示されます。ユーザーは、ログイン時に任意の言語を選択できます。
- 通常、「Set Language」ポートレットはコンテンツ領域のホーム・ページに追加しますが、他のページに追加することもできます。ポートレットをページに追加する方法については、「Oracle Portal オンライン・ヘルプ」を参照してください。

注意：

- WebDB では、Oracle Portal の言語サポートはブラウザの言語設定を使用していました。「Set Language」ポートレットを使用すると、そのような問題は解消されます。
 - Login Server の言語は、Oracle Portal の言語とは別に設定します。Login Server では、インストールされている言語のリストがそのログイン・ページに自動的に表示されます。このため、「Set Language」ポートレットに設定した内容に関係なく、そのリストから Login Server に使用する言語を決めることができます。
-
-

2.6.2 BiDi 言語のグラフィック・サポートのインストール

アラビア語およびヘブライ語は、画面の左から右ではなく、右から左へ表示される言語です。これらの言語は、BiDi (Bidirectional、双方向) 言語とも呼ばれます。これらの言語を使用する場合は、特定の Oracle Portal メタデータを更新するスクリプトを実行して、必要なイメージの一部に対するグラフィック・サポートを正しく指定する必要があります。BiDi 言語のグラフィック・サポートをインストールするには、次の手順に従います。

1. 次のディレクトリに移動します。

```
<ORACLE_HOME>/portal30/admin/plsql/nlsres
```

2. Oracle Portal がインストールされているデータベースで、そのスキーマの適切なユーザー名とパスワードを使用して SQL*Plus にログインします。たとえば、次のようになります。

```
sqlplus portal30/portal30
```

3. 次のコマンドを入力して、BiDi 言語のグラフィック・サポートを正しくインストールします。

```
@imginst.sql
```

2.7 Oracle Portal の削除

ここでは、Oracle 製品を手動で削除するのではなく、Oracle Universal Installer を使用して Oracle 製品を削除する（つまり Oracle Universal Installer インベントリから削除する）方法について説明します。

関連項目： ご使用のオペレーティングシステムの『Oracle9i Application Server インストレーション・ガイド』

Oracle Portal を削除するには、次の手順に従います。

1. Oracle Universal Installer を起動します。
 - UNIX では、./runInstaller と入力します。
 - Windows NT/2000 では、「スタート」→「プログラム」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer」の順に選択します。

Oracle Universal Installer の「ようこそ」ウィンドウが表示されます。

2. 「製品の削除」をクリックします。

「インベントリ」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. 削除対象の製品が見つかるまで、インストールされている製品のツリーを拡張します。この場合は、「Oracle Portal」を選択します。

4. 削除対象の製品のボックスをチェックします。
5. 「削除」をクリックします。
「確認」ウィンドウが表示されます。
6. 「はい」をクリックして、選択した製品を削除します。

注意： 一部の製品を削除すると、他の製品が正しく機能しなくなる可能性があることを示すメッセージが表示される場合があります。

選択した製品がコンピュータから削除されます。「インベントリ」ダイアログ・ボックスが表示されますが、その中に削除された製品はありません。

7. 「閉じる」をクリックして、「インベントリ」ダイアログ・ボックスを閉じます。
8. 「終了」をクリックして、Oracle Universal Installer を終了します。

2.7.1 単一の Oracle Portal スキーマまたは Login Server の削除

単一の Oracle Portal スキーマまたは Login Server（あるいはその両方）の削除は、Oracle Portal Configuration Assistant から行います。

Oracle Portal スキーマまたは Login Server を削除するには、次の手順に従います。

1. Oracle Portal Configuration Assistant を起動します。

Windows NT/2000

「スタート」→「プログラム」→「Oracle ホーム」→「Oracle Portal Configuration Assistant」の順に選択します。

UNIX

\$OH/assistants/opca ディレクトリに移動し、launch.sh スクリプトを実行します。

2. 手順 1 の「インストール・オプション」ウィンドウが表示されます。
このオプションをクリックして、Oracle Portal または Login Server を削除します。
3. 残りの画面の指示に従って、この作業を完了します。

関連項目： 該当するオペレーティングシステムの『Oracle9i Application Server インストレーション・ガイド』

2.8 自動登録の設定

ユーザーがみずから「ログイン」ポर्टレットのリンクを介してアカウントを新たに作成できるようにする場合は、次のように自動登録機能をインストールします。

1. SQL*Plus を起動し、Login Server がインストールされているデータベースにログインします。
2. スキーマを作成します。このスキーマは、Login Server のユーザー管理オブジェクトにアクセスするために使用します。この作業では、このスキーマのことをユーザー管理アクセス・スキーマと呼びます。
3. ユーザー管理アクセス・スキーマで、`wwsso_api_user_admin` という Login Server SSO スキーマ・パッケージのシノニムを作成します。このシノニムは、`wwsso_api_user_admin` という名前にする必要があります。
4. Login Server SSO スキーマの `wwsso_api_user_admin` パッケージに対する「実行」権限をユーザー管理アクセス・スキーマに付与します。
5. Oracle Portal と Login Server が別々のデータベースにインストールされている場合は、次の手順に従います。
 - a. ユーザー管理アクセス・スキーマで、`wwctx_api_vpd` という Login Server SSO スキーマ・パッケージのシノニムを作成します。このシノニムは、`wwctx_api_vpd` という名前にする必要があります。
 - b. Login Server SSO スキーマの `wwctx_api_vpd` パッケージに対する「実行」権限をユーザー管理アクセス・スキーマに付与します。
 - c. Oracle Portal がインストールされているスキーマで、ユーザー管理アクセス・スキーマに接続するためのデータベース・リンクを作成します。
6. コマンドライン・プロンプトを起動します。
7. Oracle Portal がインストールされているディレクトリの `<ORACLE_HOME>/portal30/admin/plsql` ディレクトリに変更します。
8. 次のコマンドを入力します。

UNIX

```
selfreg.csh -s <portal_schema> -p <portal_password> -ua <sso_uadmin_schema> -c  
<portal_connect_string> -dblink <sso_uadmin_dblink>
```

Windows NT/2000

```
selfreg.cmd -s <portal_schema> -p <portal_password> -ua <sso_uadmin_schema> -c  
<portal_connect_string> -dblink <sso_uadmin_dblink>
```

表 2-7 自動登録パラメータの説明

パラメータ	説明
portal_schema	Oracle Portal がインストールされているデータベース・スキーマ。 デフォルトは、PORTAL30 です。
portal_password	上記スキーマのパスワード。デフォルトは、<portal_schema> です。
sso_uadmin_schema	手順 1 で作成したユーザー管理アクセス・データベース・スキーマ。 デフォルトは、<portal_schema>_SSO_UA です。 注意: dblink パラメータにデータベース・リンクを指定する場合は、このパラメータに値を指定する必要はありません。
portal_connect_string	Oracle Portal がインストールされているデータベースの接続文字列。 注意: 別のデータベースでこのスクリプトを実行している場合にのみ、接続文字列を指定する必要があります。
sso_uadmin_dblink	手順 5 の c で作成したデータベース・リンクの名前。 注意: Login Server が Oracle Portal とは異なるデータベース・インスタンスにインストールされている場合にのみ、データベース・リンクを指定する必要があります。このパラメータの値を指定しない場合は、ユーザー管理アクセス・スキーマが Oracle Portal と同じデータベース・インスタンスにあるものと見なされます。

例

```
selfreg.csh -s myportal -p myportal -ua myportal_sso_ua -c orcl -dblink uadmin_link
```

- 9. [Enter] キーまたは [Return] キーを押します。
- 10. 「サービス」ポータルレットで、「グローバル設定」をクリックします。デフォルトでは、「サービス」ポータルレットは Oracle Portal ホーム・ページの「管理」タブにあります。
- 11. ユーザーが自動登録機能を使用して自分のユーザー・アカウントを作成した直後に Oracle Portal にログインできるようにする場合は、「手動登録オプション」セクションで「すぐにログオンする」を選択します。

注意: このチェック・ボックスを選択しない場合は、そのユーザーを許可されたユーザーとして指定しない限り、そのユーザーはログインできません。

- 12. 自動登録機能をユーザーに公開するには、「ログイン」ポータルレットをカスタマイズして自動登録リンクを組み込みます。

参照：「Oracle Portal オンライン・ヘルプ」の「Customizing the Login Portlet」トピック

2.9 Oracle Portal ベータ版の機能の有効化

次の方法で、Oracle Portal の「グローバル設定」ページからベータ版の機能をオンまたはオフに切り替えることができます。

1. 「サービス」ポートレットで、「グローバル設定」をクリックします。デフォルトでは、「サービス」ポートレットは Oracle Portal ホーム・ページの「管理」タブにあります。
2. 「ベータ版の機能」セクションで、次の処理を行います。
 - a. 「問合せウィザードからのイメージ・チャート」を選択して、Oracle Portal アプリケーションの開発者がウィザードを使用して Java ベースのイメージ・チャートを作成できるようにします。これらのチャートを作成するためのウィザードには、「アプリケーション・ナビゲータ」からアクセスできます。
 - b. 「データ・コンポーネント」を選択して、Oracle Portal アプリケーションの開発者がスプレッドシートやその他のデータ入力表を作成できるようにします。開発者がアプリケーションを作成したら、そのアプリケーションに追加できるコンポーネントの 1 つとして「データ」を使用できます。

2.10 証明書とは

証明書とは暗号化ファイルのことであり、データが未許可のユーザーに読み取られる心配なくクライアントとサーバーとの間で機密データの受渡しができるようにします。Oracle Portal は、x.509 証明書標準に対応しています。これは、最大手の認証局が提供する種類の証明書です。

証明書は、40 ビットまたは 128 ビットの強度で暗号化できます。ビット数が大きいほど、証明書の安全性が高くなります。

表 2-8 は、証明書の主な種類の一覧です。

表 2-8 証明書の種類

証明書の種類	説明
グローバル・セキュア・サイト ID	この証明書は、ベリサイン社が提案する証明書の拡張機能です。この証明書は、SSL サーバーの認証に使用されます。グローバル・セキュア・サイト ID（以前のグローバル・サーバー ID）を使用すれば、世界のどこの会社でも、128 ビットの SSL 暗号を使用して顧客と通信できます。このテクノロジーの詳細は、次のサイトを参照してください。 http://digitalid.verisign.com/server/global/help/globalFAQ.htm
セキュア・サイト ID	128 ビットの証明書。これによって、ブラウザはクライアント側のブラウザが使用する最高の暗号レベルで動作します。このため、クライアント側のブラウザが 40 ビットの暗号を使用して動作している場合は、サーバーも同じレベルで動作します。クライアントが 128 ビットで動作している場合は、サーバーもそうなります。最近ではほとんどのブラウザが 128 ビットの暗号を使用して動作するので、一般にこのことは問題になりません。ただし、グローバル・セキュア・サイト ID ほど安全ではありません。
40 ビットの証明書	最低レベルのセキュリティを保証する証明書です。この場合、サーバーとそれに接続されているクライアントはすべて、40 ビットの暗号レベルで動作します。 注意： 認証局から試験的に証明書が送られてくる場合は、おそらくこの種の証明書になります。

これらの証明書は、様々な認証局から購入できます。Oracle Portal で現在サポートしている認証局は、Thawte 社、ベリサイン社、ネットスケープ社です。

注意： Oracle HTTP サーバーでは、一部の証明書に含まれている v3 の拡張機能の一部を認識できない場合があります。Oracle HTTP サーバーは、それらの拡張機能を見捨てて正常に機能します。

2.10.1 署名 / 連鎖ファイルとは

証明書を購入したプロバイダから、証明書の他に、固有の署名または連鎖ファイル（あるいはその両方）を取得する必要があります。これらのファイルは、プロバイダの Web サイトまたは顧客サービスから利用できます。

2.10.1.1 認証局ファイル（CA）

認証局（CA）ファイルは、購入した証明書ファイルの基本署名ファイルです。このファイルは、使用している証明書を検証します。受信された証明書が信用できるものであることを顧客に通知します。CA ファイルは、使用する証明書の種類ごとに必要です。

2.10.1.2 証明書連鎖ファイル

証明書連鎖ファイルは、使用している証明書を CA ファイルにリンクします。グローバル・サイト ID を使用している場合、または別のプロバイダから購入した他の種類の証明書を使用している場合は、これらのファイルのどちらかが必要となります。

2.10.1.3 構成ファイル

証明書には、いくつかのファイルが添付されています。これらのファイルを適切なディレクトリに格納してください。構成は自由に設定できますが、標準の構成は次のようになっています。

表 2-9 は、証明書ファイルとその場所の一覧です。

表 2-9 証明書ファイルとその場所

ファイル	ディレクトリの場所
証明書ファイル	<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/conf/ssl.crt/
認証局（CA）証明書ファイル	<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/conf/ssl.crt/
証明書連鎖ファイル（利用できる場合）	<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/conf/ssl.crt/
キー・ファイル	<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/conf/ssl.key

2.10.2 証明書と HTTPS を使用するためのポートの保護

HTTPS を使用する場合は、ポート用の証明書を使用してセキュリティを強化します。この設定を行うには、`zone.properties` ファイルを編集します。

表 2-10 は、`zone.properties` ファイルの場所の一覧です。

表 2-10 `zone.properties` ファイルの場所

オペレーティング・システム	場所
Windows NT/2000	<ORACLE_HOME>%Apache%Jserv%servlets%zone.properties
UNIX	<ORACLE_HOME>/Apache/Jserv/etc/zone.properties

次に、設定の方法を選択します。ポートが必要に応じて、または常に HTTPS を使用するように Oracle Portal を設定できます。

必要に応じてポートで HTTPS を使用

ブラウザおよび中間層が必要時のみ HTTPS を使用するように HTTPS を設定できます。HTTP は、中間層内での通信に使用されます。これにより、不要時の HTTPS のオーバーヘッドが節約されます。

まず、次の行を `zone.properties` ファイルに追加します。

```
servlet.page.initArgs=useScheme=http
```

これにより、HTTP を実行している中間層へのすべての要求に対して、パラレル・ページ・エンジンで HTTP を使用するよう指定されます。パラレル・ページ・エンジンでは、ポータルへのすべての要求に対して HTTP を使用します。

次に、次の行を `zone.properties` ファイルに追加します。

```
servlet.page.initArgs=usePort=80（または他の有効なポート）
```

これにより、ポート 80 を実行している中間層へのすべての要求に対して、パラレル・ページ・エンジンでポート 80 を使用するよう指定されます。ポート 433 で要求が発生した場合は、パラレル・ページ・エンジンではそのポートを無視し、かわりにポート 80 を使用します。

最後に、`wdbsvr.app` ファイルの DAD 設定で、次の内容を `cgi_env_list` パラメータに追加します。

```
cgi_env_list=REQUEST_PROTOCOL=HTTPS,SERVER_PORT=(https ポート)
```

これにより、保護されたポートを介したパラレル接続のオーバーヘッドを生じることなく、HTTPS のセキュリティが提供されます。

常にポートで HTTPS を使用

ポートで常に HTTPS を使用するように HTTPS を設定できます。どのポートが HTTPS で動作しているのかをパラレル・サーブレットで確認できるようにしておく必要があります。

次の行を `zone.properties` ファイルに追加します。

```
servlet.page.initArgs=httpsports=<port1>:<port2>:. . . :<portn>
```

このリストの各ポートは HTTPS プロトコルを使用して動作するため、そのポートの Oracle HTTP サーバーで証明書を作成しておく必要があります。

関連項目：

- [A.1.2 項「JServ 構成ファイル \(zone.properties\)」](#)
 - 「Oracle Portal オンライン・ヘルプ」の「Configuring the Login Server for LDAP user authentication」トピック
-

2.10.3 HTTPS を使用するための Oracle Portal の設定

この項では、Oracle Portal を HTTPS 用に設定する方法について説明します。Login Server のみを HTTPS 用に設定することも、Oracle Portal と Login Server の両方が HTTPS を使用するようにシステムを設定することもできます。

Apache `mod_ssl` のマニュアルには、サーバーが HTTPS ポートをサポートするように設定する方法が説明されています。サーバーが HTTPS ポートをサポートするように設定した後で、適切なプロトコルとポートを指定して `ssodatan` または `ssodatax` のスクリプトを実行します。たとえば、Login Server では HTTPS が使用され、Oracle Portal では HTTP が使用されるように設定する場合は、次のように `ssodatan` スクリプトを実行します。

```
ssodatan -w http://portal.acme.com/pls/portal30/ -l  
https://login.acme.com/pls/portal30_sso/ -s portal30 -o portal30_sso
```

関連項目：

[B.4 項「ssodatan スクリプトを使用した新しい Oracle Portal インスタンスと Login Server の設定」](#)

次の項では、Oracle Portal を HTTPS 用に設定するための特別な要件について説明します。

2.10.4 httpd.conf への証明書エントリの追加

Oracle HTTP サーバー構成ファイル `httpd.conf` には、証明書の構成など、Oracle HTTP サーバーの設定情報がすべて含まれています。次の設定行のパス位置を入力します。これらの設定行は、コメント・フォーム（#）にあらかじめ作成しておく必要があります。

表 2-11 は、Oracle HTTP サーバー構成ファイルの証明書エントリの一覧です。

表 2-11 Oracle HTTP サーバー構成ファイルの証明書エントリ

ファイル	説明
SSLCertificateFile	証明書ファイル（トライアルまたは購入した証明書のどちらか）のパス位置を入力します。
SSLCertificateKeyFile	証明書を復号化するためのキーが入っているキー・ファイルのパス位置を入力します。
SSLCertificateChainFile	プロバイダから受信した証明書連鎖ファイルのパス位置を入力します。
SSLCACertificateFile	プロバイダから受信した CA 証明書ファイルのパス位置を入力します。

注意： <Oracle Home> などの環境変数を使用して、これらの構成ファイルのパス位置を指定しないでください。絶対パスを使用してください。

次の項では、証明書の各タイプにあわせて、`httpd.conf` ファイルに必要な設定エントリを示します。これらの設定エントリは、ベリサイン社の証明書を設定するときに正常に使用されたものです。

その使用法は、インストールしている証明書のタイプによってわずかに異なります。たとえば、使用している証明書に連鎖ファイルが添付されている場合は、次に示すグローバル・サイト ID の構成に従います。証明書で CA 証明書ファイルのみが使用されている場合は、セキュア・サイト ID の構成を使用します。

2.10.4.1 グローバル・サイト ID

SSLCertificateFile	<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/conf/ssl.crt/<certificate file>
SSLCertificateKeyFile	<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/conf/ssl.key/<key file>
SSLCACertificateFile	<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/conf/ssl.crt/<certificate chain file>
SSLCertificateChainFile	<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/conf/ssl.crt/<CA Certificate file>

2.10.4.2 セキュア・サイト ID

SSLCertificateFile	<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/conf/ssl.crt/<certificate file>
SSLCertificateKeyFile	<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/conf/ssl.key/<key file>
SSLCACertificateFile	<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/conf/ssl.crt/<CA Certificate file>

2.10.4.3 40 ビットのサイト ID

SSLCertificateFile	<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/conf/ssl.crt/<certificate file>
SSLCertificateKeyFile	<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/conf/ssl.key/<key file>
SSLCACertificateFile	<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/conf/ssl.crt/<CA Certificate file>

注意： 連鎖ファイルと CA 証明書ファイルは、それらの設定エントリが逆転しているように見えます。これは意図的であり、Oracle Portal が正しく動作するために必要なことです。

関連項目： [A.1.1 項「Oracle HTTP サーバー構成ファイル \(httpd.conf\)」](#)

2.11 SSL (Secure Socket Layer) の有効化

ポータルセキュリティを強化する必要がある場合は、Oracle Portal と Login Server が HTTPS モードで実行されるように設定できます。最適なパフォーマンスを得るため、Oracle Portal が HTTP モードで実行され、Login Server が HTTPS モードで実行されるように設定を組み合わせることもできます。

SSL (Secure Socket Layer) は、SSL 上のプレーンな HTTP (HTTPS という) でブラウザと Web サーバーとの間の Web HTTP 通信を保護する役割を果たしています。SSL が Oracle HTTP サーバーで機能するようにするには、Apache Web サーバーに付いている `mod_ssl` パッケージを使用します。このパッケージでは、HTTP ではなく HTTPS という URL スキーマと個別のサーバー・ポートを使用します。

注意：

- Oracle Portal および Login Server で SSL (Secure Socket Layer) を有効または無効にするには、ポータル管理者である必要があります。
- サーバーでの SSL の有効化の詳細は、『Oracle9i Application Server インストレーション・ガイド』を参照してください。
- SSL の有効化と無効化の詳細は、次の場所にある `mod_ssl` への Apache インタフェースを参照してください。

<http://www.modssl.org>

2.11.1 Oracle Portal と Login Server での SSL の構成

Oracle Portal と Login Server の両方で SSL を構成するには、次の手順に従います。

1. 有効なサーバー証明書を取得します。Oracle9i Application Server に付属の証明書は、Oracle Portal では機能しません。
2. 次の場所から証明書要求を生成します。

```
cd <ORACLE_HOME>\Apache\open_ssl\bin
```

ここでの `<ORACLE_HOME>` は、Oracle9i Application Server 製品の場所を表します。

3. `openssl.cnf` ファイルを編集し、次の行を探します。

```
RANDFILE = $ENV:HOME/.rnd
```

4. 上記の行の前に `HOME = .` を追加します。次のようになります。

```
HOME = .
RANDFILE = $ENV:HOME/.rnd
```

5. 次のコマンドを実行します。

```
openssl md5 * > rand.dat
openssl genrsa -rand rand.dat -des3 1024 > key.pem
openssl req -new -key key.pem -out csr.pem -config openssl.cnf=
```

6. 証明書要求を生成する最後のコマンドで、「Common Name」を要求されたら、ドメインを含むサーバー名を指定します。たとえば、次のようになります。
abc.oracle.com。

この操作により、key.pem および csr.pem ファイルが作成されます。csr.pem ファイルを認証局に送り、証明書を取得します。たとえば、ベリサイン社のトライアル証明書の場合は、次の手順に従います。

- a. <http://www.verisign.com> に移動し、「Secure Your Website」をクリックしてトライアル証明書を要求します。
- b. フォーム・フィールドで、「CSR」フィールドを探します。この手順の前の方で生成された csr.pem ファイルの内容をコピーしてペーストします。
- c. ベリサイン社から、詳細な説明の付いたトライアル証明書 (portalcert.crt とします) が添付された電子メールが送られてきます。手順の中で、ベリサイン社のルート・トライアル CA を取得する方法が説明されています。指示に従って、証明書をブラウザにインポートします。
- d. ブラウザから、Oracle HTTP サーバーの Apache リスナーに後でインストールできるファイルとして証明書をエクスポートします。
- e. 証明書を「Base64 Encoded X509」形式で保存します。このファイルに trialcacert.crt という名前を付けます。

Internet Explorer からのエクスポート

「ツール」、「インターネット・オプション」、「コンテンツ」、「証明書」、「信頼されたルート証明機関」の順に移動し、発行元を選択して、「エクスポート」をクリックします。

Netscape からのエクスポート

証明書のエクスポートに関する Netscape のマニュアルを参照してください。

Windows NT の場合

次のようにして、key.pem からパスワードを削除します。

```
copy key.pem key.pem-orig
openssl rsa -in key.pem-orig -out key.pem
```

7. 証明書を次の該当する場所にコピーします。

```
copy portalcert.crt to Apache\Apache\conf\ssl.crt
copy trialcacert.crt to Apache\Apache\conf\ssl.crt
copy key.pem to Apache\Apache\conf\ssl.key
copy key.pem-orig to Apache\Apache\conf\ssl.key
```

2.11.2 Login Server の問合せパスの URL の設定

Oracle Portal では、UTL_HTTP パッケージを使用して、データベースから HTTP コールを介して特定の情報にアクセスするための Login Server の URL 接頭辞を管理しています。これらのコールは、HTTPS ではなく HTTP を介して行う必要があります。

このため、Oracle Portal と Login Server が HTTPS を使用するように設定されている場合、これらのインタフェースをサポートするには、Login Server で HTTP ポートにもアクセスする必要があります。このインタフェースを介して行われるコールは、次の理由で欠かすことができません。

- 外部アプリケーションのリストを取得して、「外部アプリケーション」ポートレットをカスタマイズできるようにします。
- シングル・サインオン・ユーザー名を外部アプリケーション・ユーザー名にマップします。
- インタフェースを呈示して、ユーザーが存在するかどうかを確認します。

この URL 接頭辞 (Login Server の問合せパスの URL と呼ばれる) を設定するには、次の手順に従います。

1. ポータル管理者として Oracle Portal にログインします。
2. 「管理」タブをクリックします。
3. 「サービス」ポートレットの「グローバル設定」をクリックします。
4. Login Server のセクションが表示されるまで下にスクロールし、「問合せパスの URL 接頭辞」を編集します。このフィールドを Login Server の HTTP URL に設定します。

図 2-1 Login Server の「問合せパスの URL 接頭辞」フィールド

Login Server の設定

下のフィールドには、Oracle Portal が Login Server に対して通知する識別情報が表示されます。これらの値を更新する場合は、「?

アプリケーションID:	1325
ログインURL:	http://jpsun.jp.oracle.com:7777/pls/ssodad/portal30_sso.wwsso_app_admin.ls_login
Cookieバージョン:	v1.1
問合せパスのURL接頭辞	http://jpsun.jp.oracle.com:7777/pls/ssoda

デフォルトでは、ssodatan または ssodatax のスクリプトの実行時に Login Server に指定したものと同一接頭辞となります。ただし、これらのスクリプトで HTTPS プロトコルを指定した場合は、HTTP プロトコルを使用するようにこのパラメータを手動で更新します。

関連項目：

- [B.4 項「ssodatan スクリプトを使用した新しい Oracle Portal インスタンスと Login Server の設定」](#)
 - [B.5 項「ssodatax スクリプトを使用した既存の Portal インスタンスの更新」](#)
 - [4.4.4 項「手順 4: 複数のノードと同一 Login Server との関連付け」](#)
-
-

2.11.3 HTTPS モード用の有効な SSO 設定エントリの追加

SSL を使用している場合、デフォルトのポートは 443 です。3.0.8 より前のバージョンの Oracle Portal を使用している場合は、有効な設定エントリを 2 つ作成し、さらに Login Server で対応するパートナー設定エントリを 2 つ作成する必要があります。エントリの 1 つには :443 ポートを指定し、もう 1 つのエントリではそのポートを除外します。

もう 1 つのエントリを追加するには、まず「Login Server の管理」ユーザー・インタフェースを使用して Login Server 側のパートナー・エントリを追加するという基本手順に従い、次に ssodatax スクリプトを使用して、Oracle Portal 側の設定エントリを追加します。

Oracle Portal のバージョン 3.0.8 以降を使用している場合、必要なエントリは 1 つです。それは URL から :443 を除外したものです。

注意： この手順は、Netscape のブラウザをサポートする場合のみ必要です。Microsoft Internet Explorer では、この手順は必要ありません。

2.11.4 Microsoft Internet Explorer を使用した HTTPS の設定

Oracle HTTP サーバー構成ファイル httpd.conf で、次の行をコメント化して、Microsoft Internet Explorer のブラウザが HTTPS モードで機能できるようにします。

```
SetEnvIf User-Agent ".*MSIE.*" nokeepalive ssl-unclean-shutdown
```

2.11.5 仮想ホストを使用した HTTPS の設定

仮想ホストの設定は、次のどちらかの方法で行います。

- IP アドレスを介して (123.1.3.2 など)
- IP 名を介して (server.oracle.com など)

IP 名を使用すると、いくつかの別名によって同じ IP アドレスが使用されます。この場合は、Apache (または仮想名アドレスをサポートしているブラウザ) が HTTP 要求の「ホスト」フィールドを調べて、エミュレートする仮想アドレスを決めます。

ただし、SSL を使用すると、IP 名は暗号化されます。この場合は問題が発生します。復号キーは仮想名ごとに異なるので、どの復号キーを使用するかをソフトウェアが認識できないためです。サポートされている個々の仮想アドレスが 1000 個あるとした場合、ソフトウェアではこのメッセージのデコードに使用するキーを判別するのに平均して 500 個の異なるキーを試すことになります。これは、パフォーマンス上の理由のみをとっても実用的ではありません。

注意：

- 仮想ホストが HTTPS を使用するように設定するのはさらに難しいことです。SSL 暗号化によって、SSL 以外のモードで行われるのと同様の方法で仮想ホストを解決できないためです。
 - 対処方法はいくつかあります。仮想名をホーム・ページなどの保護する必要がないページのみで使用するというのも 1 つの方法です。
-
-

2.11.5.1 SSL 保護ページ

- まず仮想ホストごとに IP アドレスを 1 つ取得し、次に複数の IP アドレスを処理できる TCP/IP カードを仮想ホストごとに 1 つずつ取得します。
- 仮想ホストごとにポート番号が異なる IP アドレスを 1 つ使用します。
- IP アドレスは 1 つしか使用しませんが、ディレクトリは仮想ホストごとに 1 つずつ異なるものを使用します (https://ssladdress.com/virtualname1/<page desired> など)。

2.12 Reports Security Portlet の設定

Reports Security Portlet は、Oracle Portal のインストールの一部としてインストールされます。インストールされている Oracle9i Application Server のバージョンによっては、Reports Security Portlet が表示されないこともあります。Reports Security Portlet を表示するには、次の手順に従います。

1. ポータル管理者として Oracle Portal にログインします。
2. 「管理」タブをクリックします。
3. 「ページの編集」をクリックします。
4. 「Oracle Reports Security」を選択します。
5. 「表示」をクリックします。
6. 「閉じる」をクリックします。

Reports Security Portlet が「管理」タブに表示されます。

Oracle Portal の基本構成

Oracle Portal アーキテクチャは、実に様々なトポロジーや設定オプションに対応しています。Oracle Portal の構成方法を決める要素は、目的、そのローカル・ネットワーク環境、予想される負荷、およびユーザーによるアクセス方法です。

この章の内容：

- [スタンドアロン・ラップトップでの Oracle Portal の構成](#)
- [統合サーバーとしての Oracle Portal の構成](#)
- [従来の 3 層アーキテクチャの構成](#)
 - [別々の Oracle Portal と Login Server インスタンスの構成](#)

3.1 スタンドアロン・ラップトップでの Oracle Portal の構成

スタンドアロン・ラップトップ構成は、非常にコンパクトで移植性の高いインストールを必要とする場合に最適です。たとえば、ネットワーク接続を行わないで Oracle Portal のデモを実施する場合やホスト名を頻繁に変更する場合に、この構成を使用します。

この構成では、ブラウザ、Oracle9i Application Server の中間層、および Login Server や Oracle Portal のオブジェクトが含まれている Oracle8i データベースは、すべて 1 台のラップトップ・コンピュータに格納されます。この構成を設定するには、次の手順に従います。

1. 該当のオペレーティング・システムの『Oracle9i Application Server インストール・ガイド』の指示に従って、Oracle Portal が組み込まれている Oracle9i Application Server をインストールします。

注意： ホスト名を尋ねるプロンプトが表示されたら、「localhost」と入力してください。

2. ローカルの TCP/IP ホスト・ファイル HOSTS を編集して、ローカル・ホストのエントリが 1 つだけ存在するようにします。たとえば、次のようになります。

```
127.0.0.1 localhost
```

注意： TCP/IP をインストールして、通信先の各コンピュータのリモート・ホスト名とその IP アドレスを入力すると、HOSTS ファイルが作成されます。このホストには有効な DNS 名を 1 つだけ指定してください。ホスト・ファイルの編集方法がよくわからない場合は、ネットワーク管理者に問い合せてください。

3. Oracle HTTP サーバーファイル httpd.conf で、ServerName エントリがローカル・ホストとして指定されていることを確認します。たとえば、次のように <hostname> を localhost に置き換えます。

```
ServerName localhost
```

注意： このファイルは、Oracle9i Application Server がインストールされている Oracle ホームにあります。

```
<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/conf/httpd.conf
```

関連項目： [A.1.1 項「Oracle HTTP サーバー構成ファイル \(httpd.conf\)」](#)

4. 次のように `ssodatan` スクリプトを実行して、新たにインストールした Oracle Portal を Login Server に関連付けます。

- a. コマンドライン・プロンプトを起動します。
- b. Oracle Portal がインストールされている
<ORACLE_HOME>/portal30/admin/plsql/ ディレクトリに変更します。
- c. 次のコマンドを入力します。

```
ssodatan <-w portal_url> <-l login_server_url> <-s portal_schema>
<-p portal_password> <-o sso_schema> <-d sso_password> <-e pstore_schema>
<-c portal_connect_string>
```

例

```
ssodatan -w http://localhost/pls/portal/ -l http://localhost/pls/portal_sso/
-s portal30 -p portal30 -o portal30_sso -c orcl
```

参照： パラメータの説明については、[B.4 項「ssodatan スクリプトを使用した新しい Oracle Portal インスタンスと Login Server の設定」](#)を参照してください。

注意： この例では、ORACLE_HOME 環境変数が Oracle9i Application Server のホームに設定され、接続文字列 `orcl` が Oracle Portal と Login Server の各スキーマが入っているデータベースを指しています。デフォルトの Oracle Portal スキーマは `portal30` と見なされ、Login Server スキーマは `portal30_sso` と見なされます。

パラメータの説明については、[表 B-3「ssodatan スクリプトのパラメータ」](#)を参照してください。

5. ブラウザの URL アドレス・フィールドに次の URL を入力して、Oracle Portal にアクセスします。

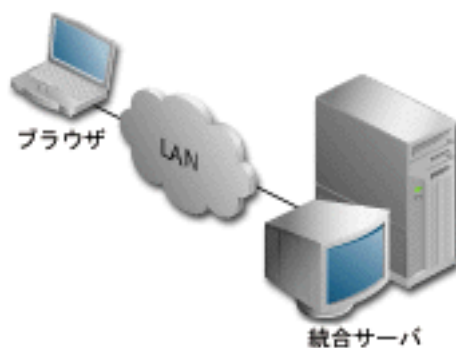
`http://localhost/pls/portal30/`

参照： [2.4 項「ブラウザでの Oracle Portal へのアクセス」](#)

3.2 統合サーバーとしての Oracle Portal の構成

スタンドアロン・ラップトップ構成はラップトップ・コンピュータを使用するユーザーしか利用できませんが、統合サーバー構成では、許可されたユーザーであれば誰でもブラウザを使用して、LAN を介してリモートから Oracle Portal にアクセスできます。

図 3-1 統合サーバー構成



1. 該当のオペレーティング・システムの『Oracle9i Application Server インストール・ガイド』の指示に従って、Oracle Portal が組み込まれている Oracle9i Application Server をインストールします。

注意： ホスト名を尋ねるプロンプトが表示されたら、Oracle Portal がインストールされているサーバーの完全修飾ドメイン名を入力します。後で参照できるように、この名前を書き留めます。

2. Oracle HTTP サーバーファイル httpd.conf で、ServerName エントリに、Oracle Portal がインストールされているサーバーの完全修飾ドメイン名が指定されていることを確認します。たとえば、次のようになります。

```
ServerName portal.acme.com
```

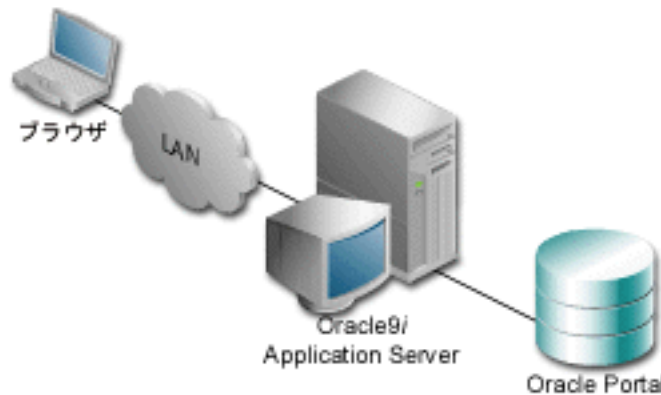
3. ブラウザの URL アドレス・フィールドに次の URL を入力して、Oracle Portal にアクセスします。

```
http://portal.acme.com/pls/portal30/
```

3.3 従来の3層アーキテクチャの構成

Oracle HTTP サーバーやサーブレット・エンジンが組み込まれている Oracle9i Application Server の中間層を、Oracle Portal とは異なるマシンにインストールする場合は、従来の3層アーキテクチャが使用されます。詳細は、ドキュメント・ライブラリに入っている『Oracle9i Application Server 概要』を参照してください。

図 3-2 従来の3層アーキテクチャ



このアーキテクチャは、次の例外を除いて、統合サーバー構成と同じ方法で設定されます。

1. 該当のオペレーティング・システムの『Oracle9i Application Server インストール・ガイド』の指示に従って、Oracle Portal が組み込まれている Oracle9i Application Server をインストールします。Login Server は、Oracle Portal のインストールの一環として別のスキーマにインストールされます。デフォルトの Oracle Portal スキーマは portal130 と見なされ、Login Server スキーマは portal130_sso と見なされます。

Oracle9i Application Server の中間層は、別のマシンにインストールされます。

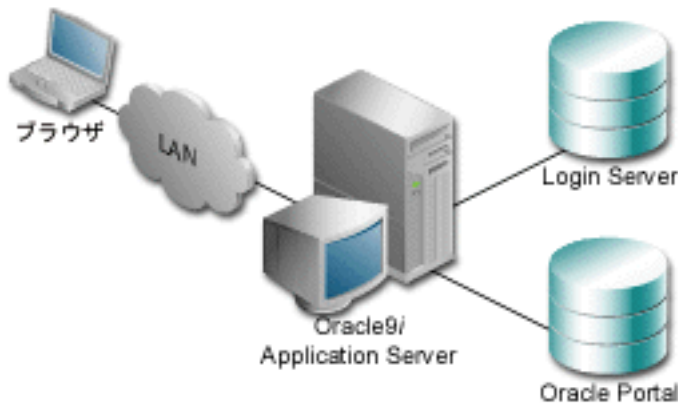
2. Oracle Portal のインストール時に、接続文字列を尋ねるプロンプトが表示されたら、Oracle9i Application Server の中間層とは異なるホストのデータベース・インスタンスを識別するためのデータベース接続文字列を入力する必要があります。
3. Database Access Descriptor (DAD) 設定ページで、Oracle Portal DAD と Login Server DAD の両方の接続文字列が同じであることを確認します。

注意： DAD 設定ページにアクセスするには、「サービス」ポートレットの「リスナー・ゲートウェイ設定」をクリックします。

3.3.1 別々の Oracle Portal と Login Server インスタンスの構成

この構成は、集中型の Login Server にアクセスするパートナ・アプリケーションを多数作成してシングル・サインオンを活用する場合に使用できます。この場合、Oracle Portal と Login Server は別々のデータベース・インスタンスに格納されます。

図 3-3 Oracle Portal と Login Server が別々になっている 3 層アーキテクチャ



この構成では Login Server と Oracle Portal に対して別々のインスタンスを使用するため、インストール手順をわずかに変える必要があります。中間層にある Oracle9i Application Server の Oracle Universal Installer を実行すると、アプリケーション・サーバーがインストールされ、ソース・ファイルやスクリプトがすべてロードされて、このようなより複雑なトポロジーを構成することができます。

次に、このような構成の設定方法の 1 つを示します。

1. 該当のオペレーティング・システムの『Oracle9i Application Server インストレーション・ガイド』の指示に従って、中間層にある Oracle9i Application Server のインストーラを実行します。

接続文字列には、Oracle Portal のホストを指すホスト名を指定します。

インストール時に、PL/SQL ゲートウェイなどの中間層のソフトウェアが、Oracle9i Application Server ホストの次の Oracle ホームに格納されます。

```
<ORACLE_HOME>/portal30/admin/plsql
```

ここでの <ORACLE_HOME> は、Oracle9i Application Server の場所です。

2. Login Server ホストの接続文字列が Oracle9i Application Server の
<ORACLE_HOME>/network/admin/tnsnames.ora ファイルに定義されていることを確認します。
3. Oracle9i Application Server から、Login Server データベース・インスタンスへの接続文字列を指定することにより、<ORACLE_HOME>/portal30/admin/plsql にある linstall スクリプトを実行して、スタンドアロンの Login Server を Login Server ホストにインストールします。
4. Oracle Portal のノードを Login Server に関連付けます。
 - a. DAD にアクセスして、Login Server にログインします。たとえば、次のようになります。

http://server.company.com/pls/portal30_sso/
 - b. Oracle Portal にログインし、それをパートナ・アプリケーションとして追加します。ホーム URL は、次のようになります。

http://server.company.com/pls/portal30/portal30.home

成功 URL は、次のようになります。

http://server.company.com/pls/portal30/portal30.wwsec_app_priv.process_signon
 - c. 「適用」をクリックします。
 - d. これで、新たに追加された Oracle Portal パートナ・アプリケーションのサイト ID、サイト・トークンおよび暗号化キーが作成されます。これらの値を使用して、Oracle Portal で ssodatax スクリプトを実行します。
5. Oracle9i Application Server の <ORACLE_HOME>/portal30/admin/plsql の場所から、ssodatax スクリプトを実行します。

構文

```
ssodatax <-i portal_site_id> <-t portal_site_token> <-k encryption_key>
<-w portal_url> <-l login_server_url> <-s portal_schema><-p portal_password>
<-v cookie_version> <-o sso_schema> <-e pstore_schema> <-r pstore_password>
<-b pstore_dblink> <-c connect_string> <-n ps_connect_string>
```

手順 4 で取得したサイト ID、サイト・トークンおよび暗号化キーを指定します。その他のパラメータについては、次のように入力します。

例

```
ssodatax -i 1234 -t A1B2C3 -k X9Y8Z7 -w  
http://server.oracle.com:3000/pls/portal30/ -l  
http://server.oracle.com:3000/pls/portal30_sso/ -s portal30 -v v1.1  
-o portal30_sso -c orcl
```

参照： パラメータの説明については、[B.5 項「ssodatax スクリプトを使用した既存の Portal インスタンスの更新」](#)を参照してください。

接続文字列（-c パラメータ）には、Oracle Portal データベース接続用の TNS エントリを入力します。

ssodatax を実行すると、指定したデータベース接続の情報のみが更新されます。また、-w パラメータの URL 接頭辞に指定したホストまたはポートが有効な設定表に格納されているものと一致しない限り、その表に入っている情報は消去されません。この場合、新たに追加された情報が前の値に上書きされます。

この章では、Oracle Portal の基本構成について説明しました。複数のデータベース・プロバイダまたは複数のコンテンツ領域があり、それぞれが異なる Oracle Portal ノードに格納されているようなトポロジーでは、Oracle Portal の分散構成を検討して、これらを 1 つの Oracle Portal インスタンスにまとめるようにしてください。これについては、[第 4 章「Oracle Portal の分散型インストール」](#)で取り上げられています。

Oracle Portal の分散型インストール

Oracle Portal の分散構成では、集中型の Login Server が 1 つと Oracle Portal ノードが 2 つ以上必要となり、それらのノードはすべてシングル・サインオン認証のために同一の Login Server にアクセスします。また、各 Portal ノードは別々のデータベース・インスタンスにあります。

このような環境では、すべてのノード間でポートレット・プロバイダ情報を共有できたり、拡張性、可用性、およびシステムのスループットを向上させるなどの利点が数多くあります。

この章の内容：

- ノードとは
- Oracle Portal の分散環境の利点
- ノード要件
- Oracle Portal の分散環境の設定

関連項目：

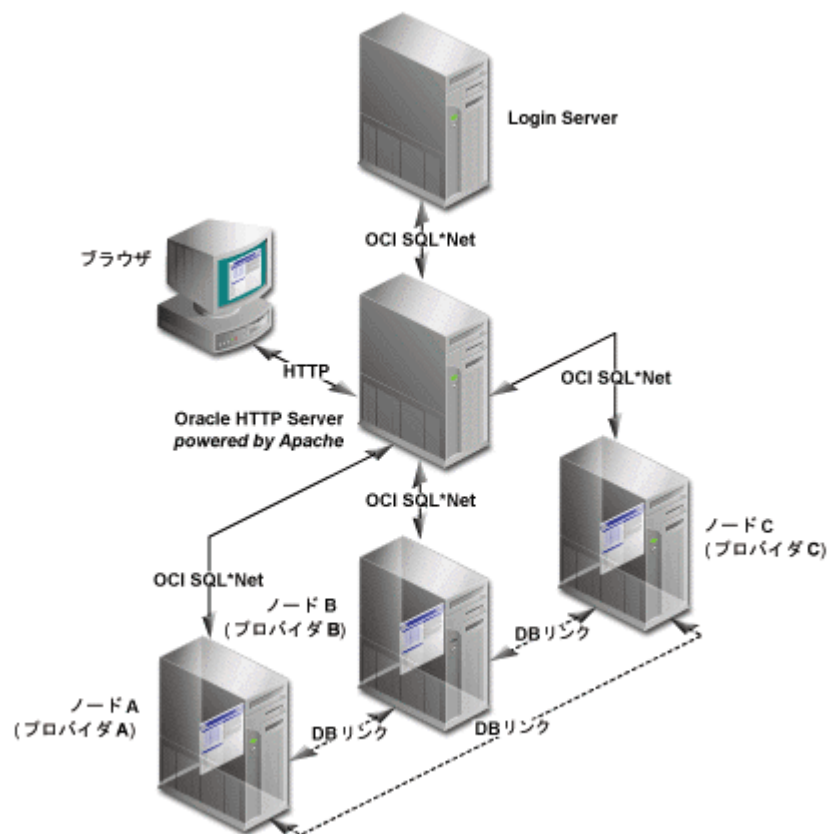
Oracle Technology Network

(<http://technet.oracle.com/products/iportal>) にある次の資料が利用できます。

- Building Scalable and Performant Portal Solutions Using Oracle Portal
 - Page Generation and Assembly Scalability in Oracle9iAS Portal
-

図 4-1 は、Oracle Portal の分散環境を示しています。ノード間や、各ノードと Login Server を備えた Oracle HTTP サーバーとの間に存在する通信チャネルを示しています。

図 4-1 Oracle Portal の分散型インストール・トポロジー



4.1 ノードとは

分散環境とは、Oracle Portal を数ヶ所にインストールして、マルチノード環境を作成することを意味します。各ノードは、個別のデータベース・インスタンスに格納されている完全な Oracle Portal のインストール先であり、分散方式で動作するように設定されています。システム内の各ノードは、他のノードとは無関係に動作する場合もあれば、他のノードと連携して動作する場合もあります。

現在表示しているページを含むノードは、ローカル・ノードと見なされます。他のインストール先は、すべてリモート・ノードと見なされます。ただし、Oracle Portal のページには、ローカル・ノードまたはリモート・ノードのどちらで作成されたポートレットも入れることができます。

ノードの登録とは、ノードを互いに関連付けて、それらのノード間で情報を共有できるようにすることを意味します。ノードの登録は、この章の後の方に説明されている設定手順に従って行います。

4.2 Oracle Portal の分散環境の利点

Oracle Portal の分散環境、つまりマルチノード環境には、単一ノード環境と比べて次のような利点があります。

4.2.1 ノード間で共有されるポートレット・プロバイダ情報

Oracle Portal の分散環境では、ノード間でプロバイダ情報を共有できます。ノードの登録時に、プロバイダの登録も行われます。プロバイダをリモート・ノードで登録すると、そのプロバイダのポートレットがそのノードのポートレット・リポジトリに格納されるため、リモート・ノードにあるポートレットを使用してページを作成できるようになります。分散環境では、プロバイダ情報を共有できる他に、それによってプロバイダをグループ化できます。

4.2.2 スケーラブル・ソリューション

プロバイダの登録が行われると、プロバイダのレジストリ情報がリモート・ノードでレプリケートされます。レプリケートされるのはプロバイダのレジストリ情報のみであり、実際のプロバイダ実装はレプリケートされません。プロバイダ実装パッケージは、そのプロバイダのホスト・ノードにしかありません。

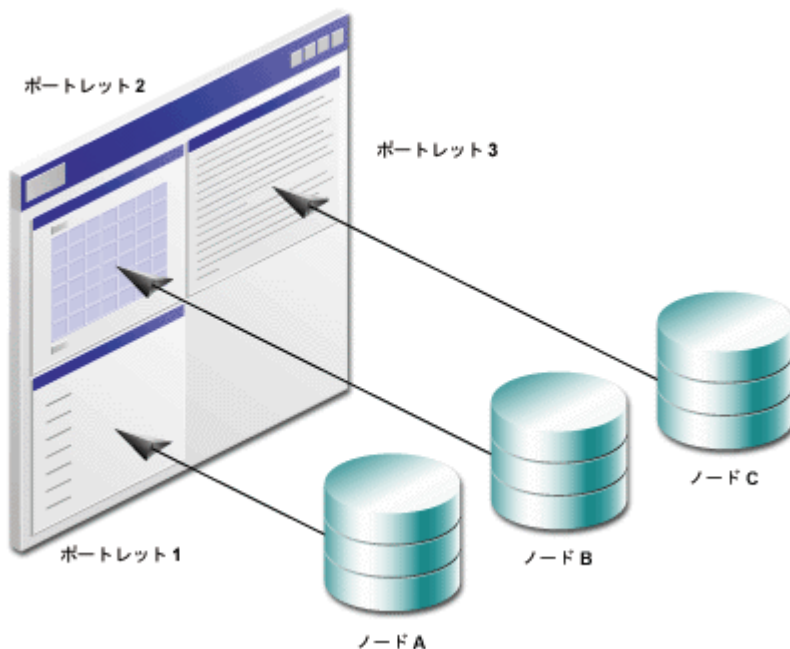
ページは、分散環境に加わっている不特定多数のノードのポートレットから構成される場合があります。そのようなページを描画すると、それらのポートレットが各ポートレット・プロバイダのホスト・ノード（プロバイダ実装パッケージが格納されているノード）で実行されます。

たとえば、スケーラブルな環境で実装できる次のシナリオについて考えてみます。

ノード a にあるポートレット 1 とノード b にあるポートレット 2 から構成されるページを描画すると、ポートレット 1 がノード a で実行され、ポートレット 2 がノード b で実行されます。

図 4-2 は、異なるノードで作成されたポートレットを単一ページに表示した例です。

図 4-2 異なるノードで作成されたポートレットを単一ページに表示した例



このようなシナリオを実施すると、ページの描画がいくつかのデータベース・インスタンス間で分散されるため、複数のマシンにアクセスしながら、パフォーマンスやシステムのスループットを向上させることができます。それぞれのデータベース上のポートレットの実行は、並行して行われます。

分散環境では、可用性も高くなります。あるノードが故障した場合は、その他のノードが、故障したノードに格納されているポートレット以外のポートレットを最大限に利用して処理を継続します。

4.3 ノード要件

Oracle Portal の分散アーキテクチャを設定するためには、次のノード要件を満たす必要があります。

- [4.3.1 項「共通の Cookie ドメイン」](#)
- [4.3.2 項「Oracle HTTP サーバーの構成」](#)
- [4.3.3 項「共通の Cookie 名」](#)
- [4.3.4 項「共通の Login Server」](#)
- [4.3.5 項「対称型ノード登録」](#)
- [4.3.6 項「ポートレットの URL」](#)

4.3.1 共通の Cookie ドメイン

Oracle Portal セッション Cookie の Cookie ドメインは、Oracle Portal 分散環境に加わっているすべてのノードに共通している必要があります。このため、あるノードで Cookie ドメインを変更した場合は、他のすべてのノードでも変更する必要があります。そうしないと、ユーザーの環境内にある Oracle Portal ノードが分散方式で正常に動作しなくなります。

Cookie の適用範囲は、その範囲をより大きなドメインに広げるよう指定しない限り、それらを作成したホストになります。デフォルトでは、Oracle Portal セッション Cookie の適用範囲は、それらを生成したサーバーのルート・パスになります。詳細は、[A.1.5 項「Login Server の設定表」](#)を参照してください。

参照： [4.4.1 項「手順 1: Oracle Portal ノードの作成」](#)

4.3.2 Oracle HTTP サーバーの構成

あるノードに格納されているポートレット・プロバイダは、ネットワーク内にある他のいずれかのノードによってアクセスされることがあるため、それに備えて通信経路が確立されています。Oracle HTTP サーバーは、通信経路を確立したり、各ノードのポートレットを表示したりする役割を果たしています。

分散環境で次のどちらかのシナリオを選択します。

- 複数の Oracle HTTP サーバーを、ノードごとに 1 つずつ実行しておきます。
- Oracle HTTP サーバーを 1 つだけ実行しておき、どのノードからもアクセスできるようにします。

ブラウザ間の通信時は、各ポートレット実行要求に対して Oracle Portal セッション Cookie が送信されます。また、Cookie ドメインは <host.domain:port> から構成されます。

複数の Oracle HTTP サーバーの使用時は、結果的に異なる `<host.domain:port>` が作成されます。Login Server と同じ Cookie ドメインを指定できるノードは1つだけです。したがって、この場合は、ユーザーがポートレットの URL をクリックしてノードにアクセスしようとしても、ブラウザから Oracle Portal セッション Cookie が送信されません。

この問題を解決するには、共通の Cookie ドメイン名が必要となります。これを行うには、分散環境のすべてのノードで `ctxckupd.sql` スクリプトを実行します。

参照： [4.4.2 項「手順 2: 同一の Cookie ドメインの作成」](#)

4.3.3 共通の Cookie 名

Oracle Portal の分散環境では、各 Oracle HTTP サーバーで、その分散システムに加わっているポータル・ノードごとに Database Access Descriptor (DAD) 設定を作成しておく必要があります。また、DAD 設定の「セッション Cookie 名」フィールドは、すべてのノードで同じにする必要があります。

参照： [4.4.3 項「手順 3: Oracle Portal DAD の編集」](#)

4.3.4 共通の Login Server

Oracle Portal の分散環境に加わっているノードはすべて、同じ Login Server を使用する必要があります。そうしないと、Oracle Portal の分散環境に加わるために登録されるノードが他のノードと同じ Login Server を使用していない場合にランタイム・エラーが発生する可能性があります。この場合は、シングル・サインオン (SSO) を介して Oracle Portal ノードにログインできないため、そのノードのポートレットにもアクセスできません。

参照： [4.4.4 項「手順 4: 複数のノードと同一 Login Server との関連付け」](#)

4.3.5 対称型ノード登録

分散アーキテクチャに含まれているノードは、すべてそれらの間で対称的に登録する必要があります。たとえば、Oracle Portal の分散環境が 3 つのノード (a、b、c) から構成される場合は、必ず次のような登録を行います。

- ノード a は、b と c で登録されます。
- ノード b は、a と c で登録されます。
- ノード c は、a と b で登録されます。

参照： [4.4.7 項「手順 7: ノード間でのノードの登録」](#)

4.3.6 ポートレットの URL

Oracle Portal Development Kit (PDK) を使用して専用のカスタム・ポートレットを作成している場合、Oracle Portal の分散環境で実行されることになるポートレットには絶対 URL (相対 URL ではなく) を使用します。

参照： Oracle Technology Network

(<http://technet.oracle.com/products/iportal>) にある Oracle Portal Development Kit:

「Portal Development Kit (PDK)」リンクをクリックすると、最新の PDK ソフトウェアとドキュメントにアクセスできます。

4.4 Oracle Portal の分散環境の設定

この項の手順を実行するには、ノードと Login Server に対する次の適切な権限を持っている必要があります。

- Login Server に対する「総合管理者」権限 (Login Server の設定を変更するため)
- Oracle Portal の「管理者」権限 (Oracle Portal ホーム・ページの「管理」タブにアクセスするため)

参照： 「Oracle Portal オンライン・ヘルプ」コンテンツ領域の次のヘルプ・トピック：「What is the Login Server and Single Sign-On?」および「How does security work?」

この項では、Oracle Portal の分散環境を設定するための処理について説明します。次の例を実施するために、環境はノード a とノード b という 2 つのノードで構成されています。

分散環境の設定手順は次のとおりです。

- 4.4.1 項「手順 1: Oracle Portal ノードの作成」
- 4.4.2 項「手順 2: 同一の Cookie ドメインの作成」
- 4.4.3 項「手順 3: Oracle Portal DAD の編集」
- 4.4.4 項「手順 4: 複数のノードと同一 Login Server との関連付け」
- 4.4.5 項「手順 5: 管理者権限を持つ Login Server のユーザーの作成」
- 4.4.6 項「手順 6: 各ノードの名前の検出」
- 4.4.7 項「手順 7: ノード間でのノードの登録」
- 4.4.8 項「手順 8: 各ノードのポートレット・リポジトリのリフレッシュ」

- 4.4.9 項「手順 9: ノードの追加作成」

4.4.1 手順 1: Oracle Portal ノードの作成

前述のとおり、ノードとは Oracle Portal のインストール先のことです。Oracle Portal の分散環境を設定するには、Oracle Portal のインストール先が最低でも 2 か所必要で、一方はノード a 用、もう一方はノード b 用となります。

ノードを作成するには、該当のオペレーティング・システムの『Oracle9i Application Server インストール・ガイド』の指示に従って Oracle Portal をインストールします。

最初のノードを作成した後は、関連付けられた Login Server スキーマを使用しないで追加のノードを作成できます。-nosso パラメータを指定すると、Oracle Portal スキーマのみが作成されます。詳細は、[B.2 項「winstall スクリプトを使用した Oracle Portal の手動インストール」](#)を参照してください。

分散環境に加えるノードごとに、Oracle Portal のインストールを行う必要があります。

注意： Oracle Portal の分散機能は同一データベースに格納されている複数のノードには対応していないため、必ず 2 つのノードを 2 つの異なるデータベースに作成するようにしてください。

4.4.2 手順 2: 同一の Cookie ドメインの作成

注意： この手順が適用されるのは、Oracle Portal の分散環境で複数の Oracle HTTP サーバーを実行している場合に限られます。Oracle HTTP サーバーを 1 つしか実行していない場合は、この手順を省略してください。

ノードごとに異なる <host.domain:port> 構成が作成されるという問題を解決するには、Oracle Portal の分散環境に加わっているすべてのノードで同一の Cookie ドメインを作成して、ブラウザから Oracle Portal セッション Cookie が正常に送信されるようにする必要があります。具体的には、Oracle Portal の分散環境に含まれているすべてのノードで ctxckupd.sql スクリプトを実行します。

すべてのノードで同一の Cookie ドメインを作成するには、次の手順に従います。

1. 作成したノードがあるコンピュータで Oracle HTTP サーバーを実行している場合は、コマンド・プロンプトから次のコマンドを入力して、そのサーバーを停止します。

```
<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/bin/apachectl stop
```

注意： Windows NT/2000 では、「コントロール パネル」の「サービス」から HTTP サーバーを停止します。

- 作成したノードがインストールされているデータベースで、適切なユーザー名とパスワードを使用して SQL*Plus にログインします。たとえば、次のようになります。

```
sqlplus nodea/nodea
```

- 次のコマンドを入力します。

```
@ctxckupd.sql
```

- プロンプトが表示されたら、必要に応じてセッション Cookie のドメイン名を入力します。

注意： すべてのリモート・ノードで同一の Cookie ドメイン名を入力する必要があるため、この名前を記録しておいてください。

- Oracle Portal の分散環境に含まれている他のすべてのリモート・ノードについても同様に、前述の手順を繰り返します。

参照： [B.6 項「Portal セッション Cookie の適用範囲の変更」](#)

4.4.3 手順 3: Oracle Portal DAD の編集

Oracle Portal の分散環境では、各ノードの Oracle HTTP サーバーごとに個別の Database Access Descriptor (DAD) を作成する必要があります。また、DAD 設定の「セッション Cookie 名」フィールドは、すべてのノードで同じにする必要があります。


インストール時に、ノードごとに DAD が 1 つ作成されます。この手順では、各ノードの DAD を編集し、すべてのノードで共通の Cookie 名を指定する必要があります。

注意： Oracle Portal の分散環境では、Login Server のインストールは必ず 1 度だけにしてください。


4.4.3.1 DAD 設定ページへのアクセス

DAD は、Oracle Portal の Database Access Descriptor 設定ページから作成されます。このページには、次の方法でアクセスできます。

「サービス」ポートレットで、「リスナー・ゲートウェイ設定」をクリックします。デフォルトでは、「サービス」ポートレットは Oracle Portal ホーム・ページの「管理」タブにあります。

- a. 「ゲートウェイ Database Access Descriptor 設定」をクリックします。
- b. 「Database Access Descriptors の編集 / 削除」セクションで、ノードの DAD エントリの横にある  をクリックします。DAD 設定ページが表示されます。

ご使用のブラウザで、次のように入力します。

- a. `http://<hostname.domain>:<port>/pls/admin_/dadentries.htm`
- b. 「Database Access Descriptors の編集 / 削除」セクションで、ノードの DAD エントリの横にある  をクリックします。DAD 設定ページが表示されます。

4.4.3.2 構成

分散環境に含まれている Oracle Portal ノードに同一の Cookie 名を指定するには、次の手順に従います。

1. 該当するノードの Database Access Descriptor 設定ページから、ノード a の DAD を編集します。

「セッション Cookie 名」フィールドに名前を入力します。たとえば、次のようになります。

```
dist_portal_session_cookie
```

2. 該当するノードの Database Access Descriptor 設定ページから、ノード b の DAD を編集します。「セッション Cookie 名」フィールドで、ノード a に入力したのと同じ Cookie 名を入力します。たとえば、次のようになります。

```
dist_portal_session_cookie
```

注意： セッション Cookie が分散環境の両方（すべて）の DAD（Login Server を除く）で同一になっていることが重要です。この Cookie は、シングル・サインオン時にセッションの確立と認証を行うために Oracle Portal のセキュリティ・サブシステムによって使用されます。

3. Login Server の Database Access Descriptor 設定ページから、ノード a の Login Server の DAD を編集します。Login Server の DAD 名の後ろには、_SSO が付けられます。

「セッション Cookie 名」フィールドに、ノード a とノード b に指定した名前とは異なる Cookie 名を入力します。

```
dist_portal_sso_session_cookie
```

注意： Login Server では専用の Cookie が使用されるため、セッション Cookie に異なる名前を使用することが重要です。Oracle Portal の名前と同じ名前を使用した場合は、Login Server によって Oracle Portal のセッション Cookie が上書きされ、Oracle Portal の認証エラーが発生します。

4.4.4 手順 4: 複数のノードと同一 Login Server との関連付け

重要： この手順を実行すると、Oracle Portal の分散環境に含まれているすべてのノードが必ず同一の Login Server を共有するようになります。Oracle Universal Installer (OUI) を使用して Oracle Portal をインストールするときは、各ノードが専用の Login Server とともにインストールされます。このため、複数のノードをインストールするときは、デフォルトにより同一の Login Server は共有されません。

例を実施するために、ノード a とノード b に同一の Login Server を共有させる必要があります。

そうでない場合、分散環境の他のノードと同じ Login Server を共有していないノードは、何らかの分散機能を実行したときに失敗します。

1. ノード a をノード a の Login Server と関連付けます。

注意： デフォルトでは、OUI によって最初のノードがインストールされ、適切な Login Server に関連付けられます。デフォルトの Login Server の関連付けを編集しない場合は、この手順を省略しても構いません。

- a. コマンドライン・プロンプトを起動します。
- b. ノード a の Oracle Portal がインストールされている
<ORACLE_HOME>/portal30/admin/plsql/ ディレクトリに変更します。
- c. ssodatan スクリプトを実行して、その Login Server にノード a を関連付けます。

参照： パラメータの説明については、[B.4 項「ssodatan スクリプトを使用した新しい Oracle Portal インスタンスと Login Server の設定」](#)を参照してください。

- d. ノード a が単一ノード環境で機能する場合は、必要に応じてスクリプトのパラメータを入力します。

- 2. ノード b をパートナ・アプリケーションとして、ノード a の Login Server に登録します。
 - a. 「サービス」ポートレットで、「Login Server の管理」をクリックします。デフォルトでは、「サービス」ポートレットは Oracle Portal ホーム・ページの「管理」タブにあります。
 - b. 「パートナ・アプリケーションの管理」をクリックします。
 - c. 「パートナ・アプリケーションの追加」をクリックします。
 - d. 「パートナ・アプリケーション」ページで次の情報を入力します。

表 4-1 パートナ・アプリケーションの設定例

フィールド	入力例
名前	Oracle Portal 注意： これによって、ノード b がパートナ・アプリケーションとして登録されます。
ホーム URL	http://OraclePortalsvr.us.oracle.com:<port>/pls/ <node b>/<node b>.home
成功 URL	http://OraclePortalsvr.us.oracle.com:<port>/pls/ <node b>/<node b>.wwsec_app_priv.process_signon

注意： DAD 名の <node b> は、小文字で指定してください。

- 3. 「適用」をクリックします。
「パートナ・アプリケーションの編集」ページが表示されます。
- 4. 「パートナ・アプリケーションの編集」ページで、表示されている情報の中から、次の手順でスクリプトを実行するのに必要な情報のみを正確にコピー（カットアンドペースト）します。たとえば、次のようになります。
 - ID: 1323
 - トークン: G06U7W36
 - 暗号化キー: a21255e6b139ca34
- 5. ノード b をノード a の Login Server と関連付けます。
 - a. コマンドライン・プロンプトを起動します。
 - b. ノード a の Oracle Portal がインストールされている
<ORACLE_HOME>/portal30/admin/plsql/ ディレクトリに変更します。

- c. `ssodatax` スクリプトを実行して、特定の Login Server にノードを関連付けます。

参照： パラメータの説明については、[B.5 項「ssodatax スクリプトを使用した既存の Portal インスタンスの更新」](#)を参照してください。

- d. 必要に応じて、スクリプトのパラメータを入力します。たとえば、パートナ・アプリケーションをノード a の Login Server に登録するための例で生成された情報（手順 4 に記述されている）を使用してみます。この例では、ノード b は「w816dev5」というデータベースにインストールされ、ノード a は「w816dev6」というデータベースにインストールされているとします。

```
ssodatax -i 1323 -t G06U7W36 -k a21255e6b139ca34 -w
http://OraclePortalsvr.us.oracle.com:5000/pls/<node b>/ -l
http://OraclePortalsvr.us.oracle.com:5000/pls/<node_A_SSO>/ -s node_B -v
v1.0 -o node_A_SSO -c w816dev5
```

この手順が完了しました。ノード a とノード b は、同一の Login Server に関連付けられています。

4.4.5 手順 5: 管理者権限を持つ Login Server のユーザーの作成

この手順では、ノード b に対するすべての管理者権限を持つ Login Server のユーザーを作成する必要があります。このユーザーは、ノード b のスキーマ所有者である必要があります。

1. 「サービス」ポートレットで、「Login Server の管理」をクリックします。デフォルトでは、「サービス」ポートレットは Oracle Portal ホーム・ページの「管理」タブにあります。
2. 「ユーザーの管理」をクリックします。
3. 「新規ユーザーの作成」をクリックします。
4. 必要に応じて、設定情報を入力します。

表 4-2 Login Server の新規ユーザーの作成例

パラメータ	入力例
ユーザー名	<schema_of_node_b>
パスワード	<schema_of_node_b>
パスワードの確認	<schema_of_node_b>

5. 「作成」をクリックします。
Login Server の新規ユーザーが作成されます。

関連項目：「Oracle Portal オンライン・ヘルプ」の「What is a Login Server administrator?」トピック および「Assigning a Login Server administrator」トピック

4.4.6 手順 6: 各ノードの名前の検出

ノードを登録する場合は、そのノードの名前が必要となります。

- 1. Oracle Portal で、必要に応じてユーザー名とパスワードを入力してノード a にログインします。
- 2. 「ノード」ポートレットで、「ローカル・ノードの編集」をクリックします。デフォルトでは、「ノード」ポートレットは Oracle Portal ホーム・ページの「管理」タブにあります。
- 3. 「ローカル・ノード」の名前を書き留めます。
- 4. 開いているブラウザ・ウィンドウをすべて閉じます。

注意： ブラウザ・ウィンドウをすべて閉じてからノード b にアクセスする必要があります。ノード a によって作成された Oracle Portal セッション Cookie が期限切れになり、適切なノード（ノード b）で認証が行われるようにするためです。

- 5. 新しいブラウザ・ウィンドウを開き、ノード b にログインして前述のノード a の手順を繰り返します。

4.4.7 手順 7: ノード間でのノードの登録

- 1. ノード b にアクセスしているときに、ノード a をノード b に登録します。
 - a. 「ノード」ポートレットで、「リモート・ノードの追加」をクリックします。デフォルトでは、「ノード」ポートレットは Oracle Portal ホーム・ページの「管理」タブにあります。
 - b. この設定ページで、必要に応じてノード a に関する設定情報を入力します。

表 4-3 ノード a からノード b への登録情報

フィールド	入力例
リモート・ノード名	4.4.6 項「手順 6: 各ノードの名前の検出」で書き留めておいたリモート・ノード（ノード a）の名前。
Oracle Portal データベース・ユーザー	ノード a のスキーマ所有者。

表 4-3 ノード a からノード b への登録情報（続き）

フィールド	入力例
Oracle Portal データベース・パスワード	ノード a のスキーマ・パスワード。
データベース・リンク名	このフィールドは空白にしておいてください。 データベース・リンクがこのページに追加されるときに、デフォルト名が使用されます。デフォルト名はこのページに表示されないことに注意してください。
TNS 名	ノード a がインストールされているデータベースの TNS 名の別名（接続文字列）。 例: w816dev6
リモート Oracle Portal DAD	4.4.3 項「手順 3: Oracle Portal DAD の編集」 で作成されたノード a の DAD。
リモート・リスナー URL	Oracle HTTP サーバーがインストールされているマシン名。 例: OraclePortalsvr.company.com
リモート・リスナー・ポート	そのノードに対して Oracle HTTP サーバーが実行されているポート。 例: 5000

2. 「OK」をクリックします。
3. ブラウザ・ウィンドウをすべて終了します。

注意： ブラウザ・ウィンドウをすべて閉じてからノード a にアクセスする必要があります。ノード b によって作成された Oracle Portal セッション Cookie が期限切れになり、適切なノード（ノード a）で認証が行われるようにするためです。

4. 前述の手順を繰り返して、ノード b をノード a に登録します。

この手順が正しく完了すると、Oracle Portal のノードは分散環境で動作するよう完全に設定されます。

4.4.8 手順 8: 各ノードのポートレット・リポジトリのリフレッシュ

Oracle Portal の分散環境用に設定された各ノードのプロバイダは、他のノードでも使用できます。ただし、リモート・ノードで作成されたプロバイダやポートレットを表示するためには、各ノードでポートレット・リポジトリをリフレッシュする必要があります。

ポートレット・リポジトリをリフレッシュするには、次の手順に従います。

- 1. 「Oracle Portal ナビゲータ」で、「コンテンツ領域」タブをクリックします。
- 2. 「名前」列で、「ポートレット・リポジトリ」をクリックします。
「Portlet Repository」コンテンツ領域が表示されます。
- 3. このページの右上にある「更新」をクリックします。

注意： そのノードに登録されているすべてのプロバイダに対してポートレット・リポジトリがリフレッシュされるため、この操作が完了するまで数分間かかる場合があります。

この手順が完了すると、分散ポートレットがポートレット・リポジトリに表示されます。ローカルでない（つまりリモート）プロバイダは、その名前によって簡単に識別できます。そのプロバイダが属しているノードの名前が接頭辞として付いているためです。

これで、分散ポートレットが「ポートレットの追加」ページに表示され、ページの作成時に使用することができます。

- 4. Oracle Portal の分散環境に含まれているノードごとに、前述のステップを繰り返します。

4.4.9 手順 9: ノードの追加作成

常にノードを新規作成して、Oracle Portal の分散環境に加えることができます。たとえば、ノード c を登録するには、次の手順を表示された順序で行います。

表 4-4 分散環境用のノードの追加作成

手順	詳細情報の参照先
1. ノード a やノード b のデータベースとは異なるデータベースにノード c を作成します。	4.4.1 項「手順 1: Oracle Portal ノードの作成」
2. ノード c の DAD を作成します。	4.4.3 項「手順 3: Oracle Portal DAD の編集」

表 4-4 分散環境用のノードの追加作成（続き）

手順	詳細情報の参照先
3. ノード a やノード b で使用される Login Server にノード c を関連付けます。	4.4.4 項「手順 4: 複数のノードと同一 Login Server との関連付け」
4. Login Server に対してノード c のユーザーを作成します。	4.4.5 項「手順 5: 管理者権限を持つ Login Server のユーザーの作成」
5. ノード c をノード a で登録します。	4.4.7 項「手順 7: ノード間でのノードの登録」
6. ノード c をノード b で登録します。	4.4.7 項「手順 7: ノード間でのノードの登録」
7. ノード a をノード c で登録します。	4.4.7 項「手順 7: ノード間でのノードの登録」
8. ノード b をノード c で登録します。	4.4.7 項「手順 7: ノード間でのノードの登録」
9. a、b、c の各ノードでポートレット・リポジトリをリフレッシュします。	4.4.8 項「手順 8: 各ノードのポートレット・リポジトリのリフレッシュ」

ノードの登録は、対称的に行う必要があります。また、新しいノード（この場合はノード c）を既存のノード（ノード a またはノード b のどちらか）で登録してから、既存のノードを新しいノードで登録することが重要です。これは、分散環境の他のノードによって使用される Cookie の暗号化キーを保持するために必要なことです。

Oracle9iAS の中間層とファイアウォールの設定

Oracle Portal を企業に導入する場合は、一般に Login Server 機能进行处理する Oracle HTTP サーバー・リスナーと、Oracle Portal 機能进行处理する Oracle HTTP サーバー・リスナーを別々に用意します。パフォーマンス上の理由と接続プーリングのために、Login Server を個別のリスナー上に構成して、それを認証サービス専用にすることもできます。

構造上、Login Server は中央認証サービスとなるように設計されています。したがって、企業内にはパートナ・アプリケーションがいくつか存在し、各種ホストで動作します。その際、これらのパートナ・アプリケーションは集中型の Login Server を共有するように設定されます。

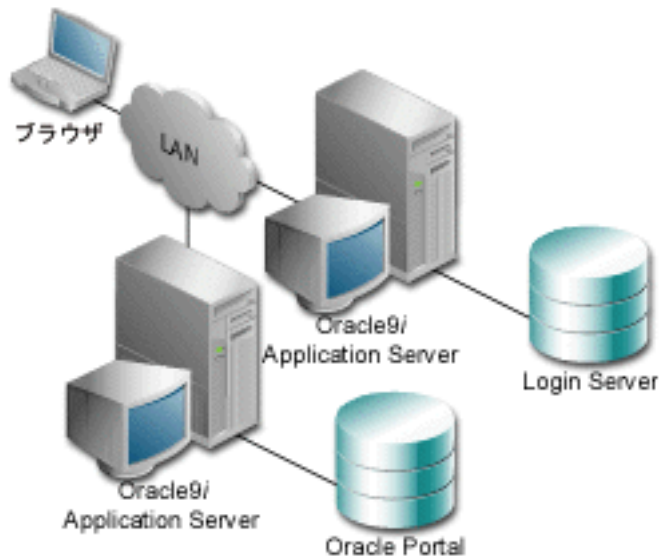
この章の内容：

- [パートナ・アプリケーションとしての Oracle Portal](#)
- [仮想ホストの設定](#)
- [ファイアウォールとロード・バランサの使用法](#)
- [ロード・バランシング・ルーターの設定](#)
- [Oracle HTTP サーバーの調整](#)

5.1 パートナ・アプリケーションとしての Oracle Portal

Oracle Portal は、Login Server のパートナ・アプリケーションです。次の図に、そのような構成を示します。Oracle Portal には、Login Server とは別のリスナーが用意されています。

図 5-1 パートナ・アプリケーションとしての Oracle Portal



Oracle Portal は、作業環境、拡張性または操作性の各要素によって、次の方法でパートナ・アプリケーションとして設定できます。

- Oracle Portal を既存の Login Server（その制御権を持っていない可能性がある）に関連付ける。
- Oracle Portal を新規インストールとして設定する。
- Oracle Portal と Login Server が別々の中間層サーバーから処理されるようにする。

5.1.1 制御権のない既存の Login Server への Portal の関連付け

Login Server に対する管理権限を持っていない場合（たとえば、Login Server が IT 部門で管理されている場合）は、次の方法で Oracle Portal ノードを関連付けます。

1. Oracle Portal を Login Server に関連付ける必要があることを IT 部門に通知します。次の情報を IT 部門に送ります。
 - アプリケーションの名前（任意）
 - ホーム・ページの URL
 - 成功 URL
 - 連絡先情報 - 名前および電子メール・アドレス

注意： 成功 URL は、ログインが成功した後でブラウザがリダイレクトされる Web ページを指します。これは、Login Server からのユーザー識別情報を処理するプロシージャに対応している必要があります。Oracle Portal の成功 URL は、Oracle Portal のスキーマに格納されている `wwsec_app_priv.process_signon` プロシージャへの完全 URL である必要があります。たとえば、次のようになります。

```
http://server.domain.com:5000/pls/DAD/portal.wwsec_app_priv.process_signon
```

2. IT 部門では、この情報に基づいて、その Oracle Portal のために Login Server でパートナ・アプリケーションのエントリを新たに作成し、次の情報を戻します。
 - サイト ID
 - サイト・トークン
 - 暗号化キー
3. Oracle Portal を Login Server に関連付けます。ssodatx スクリプトを実行し、前述の入力情報を入力してください。このスクリプトを実行するには、次の情報を入手しておく必要があります。
 - サイト ID
 - サイト・トークン
 - 暗号化キー
 - Login Server の URL 接頭辞
 - Login Server のスキーマ名

構文

```
ssodatax <-i portal_site_id> <-t portal_site_token> <-k encryption_key> <-w  
portal_url> <-l login_server_url> <-s portal_schema> <-p portal_password> <-v  
cookie_version> <-o sso_schema> <-e pstore_schema> <-r pstore_password> <-b  
pstore_dblink> <-c connect_string> <-n ps_connect_string>
```

関連項目： 構文とパラメータについては、[B.5 項「ssodatax スクリプトを使用した既存の Portal インスタンスの更新」](#)を参照してください。

例 (Windows NT/2000)

```
ssodatax.cmd -i 1234 -t A1B2C3 -k X9Y8Z7 -w  
http://webdbsvr.us.oracle.com:3000/pls/portal30/ -l  
http://webdbsvr.us.oracle.com:3000/pls/portal30_sso/ -s portal30 -p portal30 -v v1.1  
-o portal30_sso -e portal30_sso_ps -r portal30_sso_ps -b portal30_dblink -c orcl -n  
orcl01
```

ssodatax スクリプトを実行すると、Oracle Portal が Login Server に関連付けられ、Oracle Portal と Login Server の URL 接頭辞（それぞれ ssodatax の -w と -l の各パラメータ）に異なるホスト名を指定してあれば、それぞれが別々のリスナーで実行されます。

注意： Login Server が異なるデータベース・インスタンスにある場合は、Login Server の外部アプリケーションのパスワード・ストアにアクセスするための、ポータルで使用するスキーマのスキーマ名、パスワードおよび接続文字列を Login Server 管理者から取得する必要があります。ポータルでは、このリンクを作成して外部アプリケーション・プロバイダをサポートする必要があります。外部アプリケーション・プロバイダは、マップされたユーザーのパスワードにアクセスしてシングル・サインオンを提供する必要があります。これらのパラメータは、それぞれ -e、-r および -n パラメータの ssodatax スクリプトに渡されます。また、-b パラメータを使用してデータベース・リンクに名前を付けることもできます。

5.1.2 制御権のある既存の Login Server への Portal の関連付け

Login Server に対するすべての管理権限を持っている場合は、Oracle Portal と Login Server が同一のデータベース・インスタンスに格納されていれば、ssodatan スクリプトを使用して、Oracle Portal と Login Server との関連付けを行うことができます。

データベース・インスタンスが異なるインスタンスにある場合は、Oracle Portal で次の手順をすべて実行してから、Login Server でも同様に実行します。

次に、これらの手順の概要を示します。

1. 次の linstall スクリプトを実行して、スタンドアロンの Login Server をインストールします。

```
linstall <-o sso_schema> <-i pstore_password> <-s login_server_url> <-r random_seed>
<-p sys_password> <-u default_tablespace> <-t temporary_tablespace>
<-d document_tablespace> <-l logging_tablespace> <-c connect_string>
```

関連項目： 構文とパラメータについては、[B.3 項「linstall スクリプトを使用した Login Server の手動インストール」](#)を参照してください。

2. Oracle Portal ホーム・ページで、「管理」タブをクリックします。
3. 「サービス」ポートレットで、「Login Server の管理」をクリックします。
4. 「パートナ・アプリケーションの管理」をクリックします。
5. 「パートナ・アプリケーションの追加」をクリックします。
6. 「パートナ・アプリケーションへのログイン」セクションで、パートナ・アプリケーションの名前、そのアプリケーションのホーム・ページへの URL、成功 URL を入力します。
7. 「ログイン可能期間」セクションで、ユーザーが Login Server を介してこのアプリケーションにログインできる日数を入力します。「終了日」フィールドを空白にしておくと、ユーザーは永久にそのアプリケーションにログインできます。「アプリケーション管理者」セクションで、このアプリケーションの連絡先または管理者の電子メール・アドレスなどの情報を入力します。
8. 「OK」をクリックします。新しいパートナ・アプリケーションが、「パートナ・アプリケーション」ページの「パートナ・アプリケーションの編集 / 削除」リストに表示されます。
9. ssodatax スクリプトを実行し、Oracle Portal について前の手順で作成された入力情報を入力します。

関連項目： 構文とパラメータについては、[B.5 項「ssodatax スクリプトを使用した既存の Portal インスタンスの更新」](#)を参照してください。

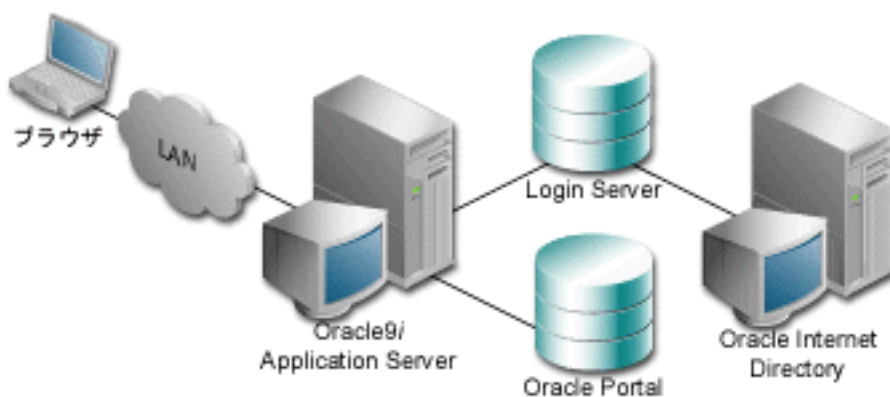
ssodatax スクリプトを実行すると、Oracle Portal が Login Server に関連付けられます。Oracle Portal と Login Server の URL 接頭辞（それぞれ ssodatax の -w と -l の各パラメータ）に異なるホスト名を指定した場合は、それぞれが別々のリスナーで実行されます。

10. Login Server について、手順 2 ～ 10 を繰り返します。

5.1.3 Oracle Internet Directory (OID) を使用して構成される Login Server

前述のどの構成でも、Oracle Internet Directory をユーザーのリポジトリとして使用することができます。

図 5-2 Oracle Internet Directory (OID) を使用して構成された Login Server



このアーキテクチャでは、Login Server はローカルの表と照らし合わせてユーザーの資格証明を認証するのではなく、LDAP ディレクトリ (OID) と照らし合わせてユーザーの資格証明を認証します。Login Server は、設定済みの LDAP ディレクトリに LDAP API コールを出し、そのディレクトリと照らし合わせて資格証明を認証します。

このような構成では、Login Server はそれが格納されているデータベース・インスタンスと LDAP ディレクトリとの間に LDAP プロトコル通信を確立できる必要があります。

したがって、LDAP ディレクトリ、Login Server およびファイアウォールの配置によっては、Login Server のデータベース・スキーマが格納されているマシンで LDAP プロトコルを使用して LDAP サーバーにアクセスできる必要があることに注意してください。LDAP 通信のデフォルト・ポートはポート 389 ですが、このポートの設定は変更可能です。

関連項目：

- <http://technet.oracle.com/products/iportal> にある「Configuring Oracle9iAS Portal for LDAP Authentication」
 - Oracle9i Application Server のドキュメント・ライブラリに入っている『Oracle9iAS Single Sign-On 管理者ガイド』
-

5.2 仮想ホストの設定

Oracle9i Application Server HTTP サーバーは、仮想ホストの構成をサポートしています。この構成では、1 台のマシンとポートでいくつかの仮想ホストを表現できます。仮想ホストを構成するには、Oracle Portal と Oracle HTTP サーバーの両方でこれを設定する必要があります。

ここで示す例では、<http://www.abc.com> および <http://www.xyz.com> という Oracle Portal にアクセスするものとします。また、Login Server の URL は <http://www.login.com> とします。

仮想ホストを設定する手順は、次のとおりです。

1. <ORACLE_HOME>/Apache/Apache/conf で、Oracle HTTP サーバーの構成ファイル `httpd.conf` を開いて編集します。このファイルの Virtual Hosts セクションの内容が次のようになっていることを確認します。

```
### Section 3: Virtual Hosts
NameVirtualHost 127.0.0.1
```

```
<VirtualHost 127.0.0.1>
    ServerName www.abc.com
</VirtualHost>
```

```
<VirtualHost 127.0.0.1>
    ServerName www.xyz.com
</VirtualHost>
```

```
<VirtualHost 127.0.0.1>
    ServerName www.login.com
</VirtualHost>
```

関連項目： [A.1.1 項「Oracle HTTP サーバー構成ファイル \(httpd.conf\)」](#)

この例では、ローカル・マシンを表す IP アドレス 127.0.0.1 を使用しています。これは、任意の有効な IP アドレスを使用できます。

ServerName エントリには、有効なドメイン名を指定する必要があります。ローカルのラップトップ・コンピュータで Oracle Portal を設定する場合は、ローカルの HOSTS ファイルに適切なエントリを作成します。

```
# Copyright (c) 1993-1995 Microsoft Corp.
#
# This is a sample HOSTS file used by Microsoft TCP/IP
# for Windows NT.
#
127.0.0.1 localhost
127.0.0.1 www.abc.com
127.0.0.1 www.xyz.com
127.0.0.1 www.login.com
```

関連項目： [3.1 項「スタンドアロン・ラップトップでの Oracle Portal の構成」](#)

2. Login Server でシングル・サインオンが正常に動作するようにするには、URL に同じホスト名が指定されているパートナ・アプリケーションによって必ず Login Server が参照される必要があります。これは、Cookie がそれらを生成したホストのみに返されるからです。このため、前述の例では、Login Server は必ず `http://www.login.com` として参照される必要があります。

したがって、`www.abc.com`、`www.xyz.com`、`www.login.com` をパートナ・アプリケーションとして登録する必要があります。

- a. Login Server に対するすべての権限を持つ管理者として、直接 Login Server にログインします。
- b. `www.abc.com` 用のパートナ・アプリケーションのエントリを追加します。
- c. `www.xyz.com` 用のパートナ・アプリケーションのエントリを追加します。
- d. Login Server の `www.login.com` 用のパートナ・アプリケーションのエントリを追加します。
- e. `ssodatax` スクリプトを実行して、これらのエントリ・ポイントごとに Oracle Portal に設定エントリを作成します。

各パートナ・アプリケーションに対して `ssodatax` スクリプトを実行すると、それらの別名が正しく設定されます。

関連項目： [B.5 項「ssodatax スクリプトを使用した既存の Portal インスタンスの更新」](#)

5.3 パラレル・ページ・エンジンの設定

Oracle Portal のアーキテクチャは、どのブラウザからでも接続できる 3 層アーキテクチャを基に設計されています。この柔軟性のあるアーキテクチャによって、各コンポーネント（ブラウザ、Oracle HTTP サーバー・リスナー、Oracle8i データベースおよび Oracle Portal）を必要に応じて個別にアップグレードすることができます。

5.3.1 パラレル・ページ・エンジンのパラメータの設定

Oracle Portal からページを要求する際、その要求はブラウザから Oracle HTTP サーバー・リスナーに送られます。返されるページは、各種のポートレットから構成されます。ポートレットとは、特定のデータ・ソースのデータを含むポータル・ページ上の領域のことです。

パラレル・ページ・エンジンは、ポータル・リポジトリからページのメタデータを取得し、ページ上にポートレットを集める役割を果たします。次のオプションのパラメータのどれかを `zone.properties` ファイルに追加して、パラレル・ページ・エンジンのパフォーマンスを向上させることができます。

関連項目： [A.1.2 項「JServ 構成ファイル \(zone.properties\)」](#)

表 5-1 パラレル・ページ・エンジン (PPE) のパラメータ

パラメータ	説明
<code>logpath=<PATH></code>	実行時のメッセージの記録場所をパラレル・ページ・エンジンに指示します。デフォルトでは、JServ のログ・パスです。
<code>logmode=<debug></code>	パラレル・ページ・エンジンがデバッグ・モードで実行できるようにします。この値を設定しない場合は、パラレル・ページ・エンジンは通常モードで実行されます。
<code>showError=<TRUE/FALSE></code>	Oracle Portal ユーザー・インタフェースでのエラー・メッセージの表示と非表示を切り替えます。デフォルトは、TRUE です。
<code>poolSize=<some number></code>	ページの実行に使用するパラレル・フェッチャの合計数を定義します。デフォルトは、25 です。
<code>stall=<duration in sec></code>	要求が完了するまでのフェッチャの最大待機時間（秒）を指定します。デフォルトは、120 秒です。
<code>requesttime=<duration in sec></code>	個々の要求が応答するまでのフェッチャの最大待機時間（秒）を指定します。要求の応答が開始されたら、フェッチャは <code>stall</code> によって指定された時間まで、残りのデータを待ちます。デフォルトは、40 秒です。

表 5-1 パラレル・ページ・エンジン (PPE) のパラメータ (続き)

パラメータ	説明
httpsports=<port1>:<port2>: ...<portn>	HTTPS 用に設定するポートを指定します。
prefix=<PLSQL prefix like /pls>	PL/SQL 接頭辞のパスの値を格納します。デフォルトは、 /pls です。
offlinePath=</path/offlinef ile>	保守の間 Oracle Portal をオフラインにできるようにしま す。オフライン・ファイルの内容は、すべてのページ要求 に送られます。
proxyHost=<hostname>	プロキシ・サーバーを経由する必要がある要求に使用する ホストを定義します。
proxyPort=<proxyPort>	プロキシ・サーバーを経由する必要がある要求に使用する ポートを指定します。
proxyIgnore=<domain1>&<doma in2>&. . .<domainn>	プロキシ設定のために無視するドメインを指定します。 HTTP 1.1 標準に準拠するため、ドメインは「.」で始まる 必要があります。たとえば、.oracle.com は有効ですが、 oracle.com は無効です。
useScheme=<http / https>	この行で指定するプロトコルを使用するよう、パラレル・ ページ・エンジンに指示します。
usePort=<port number>	すべての要求に対して常に指定されたポート番号を使用す るよう、パラレル・ページ・エンジンに指示します。
cacheBuffer	キャッシュされたページを中間層から返すために使用する メモリー・バッファのサイズを指定します。この値には、 ページ全体の実際のバイト・サイズにできるだけ近い値を 設定します。設定した値が小さすぎると、ディスクに対し て複数の読取りが実行されます。(これは非効率な場合 があります。) デフォルトは、32768 バイトです。

関連項目： <http://technet.oracle.com/products/iportal> にあ
る「Page Generation and Assembly Scalability in Oracle9iAS Portal」

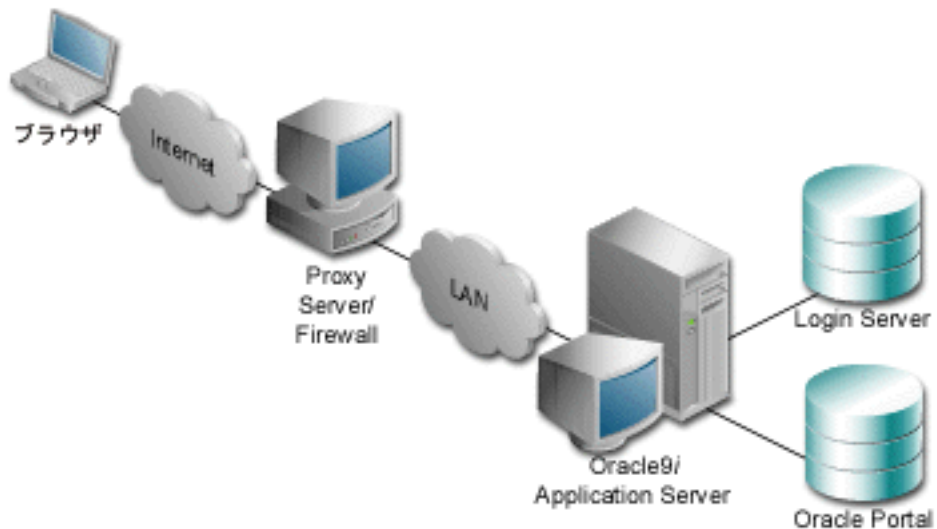
5.4 ファイアウォールとロード・バランサの使用法

インターネットを介してアクセスされるように Oracle Portal を配置すると、一般にファイアウォール、逆プロキシ、サーバー・ファームなど、構成が複雑になりかねない他のネットワーク・デバイスがいくつか加わります。

5.4.1 インターネットを介した逆プロキシ・サーバーの設定

逆プロキシ・サーバーとは、ファイアウォール・アーキテクチャの一部として使用されるホスト処理の 1 つであり、プロキシを提供することによって内部のホストを外部とアクセスできるホストから切り離します。外部からの要求は、このプロキシを通して内部のサービスにアクセスします。一般に、このようなプロキシ・サーバーは、デュアルホーム・ホストの形式を取ります。つまり、ネットワーク・インタフェース・カードを 2 つ備えたホストのことです。一方のインタフェースで外部のネットワークに接続し、もう一方のインタフェースで内部のネットワーク、つまりファイアウォールの非武装地帯 (DMZ) に接続します。

図 5-3 逆プロキシ・サーバーを使用したインターネット構成



このアーキテクチャでは、ブラウザはサーバーにアクセスするときに、プロキシ・サーバーによって公開されているホスト名を使用します。その後、プロキシ・サーバーはファイアウォール内の実際のホストに要求を転送します。実際のホストには、別のホスト名が付けられている場合があります。

この例では、次のことを前提としています。

- 公開されているアドレスは、`www.myportal.com` です。
- ファイアウォールの内部では、Oracle9i Application Server の中間層のサーバー名は、実際には `server.company.com` です。
- 外部では、このサーバーはデフォルトのポート 80 を使用してアドレス指定されます。しかし、内部では、`server.company.com` はポート 7777 でリスニングしています。

注意： この構成は、Oracle Portal バージョン 3.0.7 以降がインストールしてある場合にのみ有効です。3.0.7 より前の Oracle Portal では、Oracle HTTP サーバー構成によって指定された `ServerName` は使用されていませんでした。かわりに、HTTP 要求のホスト値が使用されていました。このため、自己参照型 URL の生成を制御できませんでした。

このアーキテクチャで Oracle Portal を設定するには、次の手順に従います。

1. Oracle9i Application Server の中間層がポート 7777 でリスニングできるようにする一方で、ポート 80 を使用していることをそのサーバーにアサートするような構成設定を定義します。
2. 内部ホスト名を受け入れるための VirtualHost エントリを作成しますが、その後で `ServerName` ディレクティブを使用して、外部で表示できるホスト名をアサートします。その結果、Oracle Portal のページに描画された自己参照型 URL がそのブラウザで有効になります。
3. 内部の中間層サーバーで HOSTS ファイルを編集して、前の手順でアサートされた `ServerNames` の IP アドレスを定義します。その結果、Oracle Portal によって作成されるホスト名がそれらの IP アドレスによって解決され、HTTP コールがループバックしてポートレットの内容が取り出せるようになります。

関連項目： [A.1.7 項「ローカルの HOSTS ファイル」](#)

4. 適宜、外部に公開されているサーバー名 (`www.myportal.com` など) を使用して、`ssodatan` または `ssodatax` のスクリプトを実行します。

関連項目：

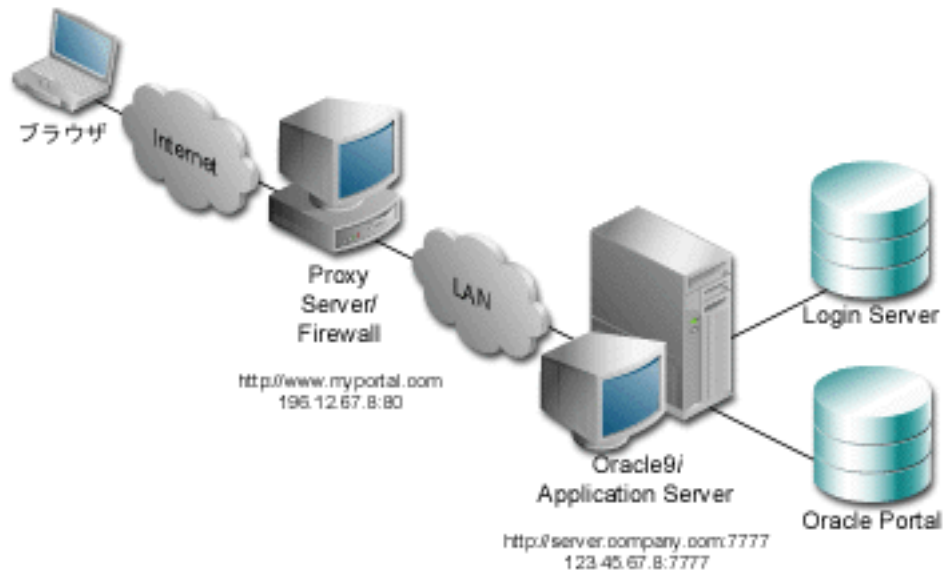
- [B.4 項「ssodatan スクリプトを使用した新しい Oracle Portal インスタンスと Login Server の設定」](#)
 - [B.5 項「ssodatax スクリプトを使用した既存の Portal インスタンスの更新」](#)
-

5. IP アドレス 196.12.67.8 を使用して、インターネット上のドメイン・ネーム・サーバーに `www.myportal.com` ドメイン名を登録します。

注意： この例で使用された IP アドレスは、説明のためのみに使用されたものなので、有効な IP アドレスであるとは限りません。

次の図は、前述の例で使用されたサーバー名とポートを示しています。

図 5-4 逆プロキシ・サーバー構成の例



5.4.2 Oracle HTTP サーバーの設定

Oracle HTTP サーバー構成ファイル `httpd.conf` にディレクティブをいくつか追加して、前述の動作を指定します。逆プロキシ・サーバーは、ポート `7777` を介して `server.company.com` という内部の中間層サーバーにアクセスします。

Oracle HTTP サーバーは、PL/SQL ゲートウェイ (`mod_plsql`) と `mod_jserv` をコールするときに、`www.myportal.com` を `ServerName` として渡し、さらにポート `80` を渡します。Oracle Portal コードによって作成される URL には、`www.myportal.com` とポート `80` が使用されます。

ディレクティブ「`useCanonicalName on`」は、指定された `ServerName` を使用するよう Apache に指示します。そうでない場合は、要求の `Host` フィールドに指定された名前を渡します。

`server.company.com` にある Oracle9i Application Server 構成の `httpd.conf` ファイルの関連セクションは、次に示すとおりです。

```
### Section 2: 'Main' server configuration
...
Port 80
Listen 7777
Listen 80

ServerName www.myportal.com
...
UseCanonicalName On
...
### Section 3: Virtual Hosts
#
# VirtualHost: If you want to maintain multiple domains/hostnames on
# your machine you can setup VirtualHost containers for them.
#
# If you want to use name-based virtual hosts you need to define at
# least one IP address (and port number) for them.
#

# This section is mandatory for URLs that are generated by
# the PL/SQL packages of the Oracle Portal
# These entries dictate that the server should listen on port
# 7777, but will assert that it is using port 80, so that
# self-referential URLs generated specify www.myportal.com:80
# This will create URLs that are valid for the browser since
# the browser does not directly see the host server.company.com.
NameVirtualHost 123.45.67.8:7777

<VirtualHost server.company.com:7777>
ServerName www.myportal.com
Port 80
```



```
</VirtualHost>
```

```
# Since the previous virtual host entry will cause all links  
# generated by the Oracle Portal to use port 80, the server.company.com  
# server needs to listen on 80 as well since the Parallel Page  
# Engine will make connection requests to Port 80 to request the  
# portlets.
```

```
NameVirtualHost 123.45.67.8:80
```

```
<VirtualHost server.company.com:80>  
ServerName www.myportal.com  
Port 80  
</VirtualHost>
```

公開されたアドレス `www.myportal.com` に対して複数の別名をサポートする必要がある場合は、必要に応じてディレクティブを追加します。たとえば、そのサーバーを `www.portal.com` という名前でもアクセスできるようにする場合は、内部サーバーで仮想ホストのエントリを追加定義する必要があります。その結果、逆プロキシはそれぞれの対応する公開ホスト名から、適切な公開名をアサートできる関連する内部ホストの別名に要求を送信します。

この例では、`VirtualHost` セクションは次のようになります。

```
NameVirtualHost 123.45.67.8:7777
```

```
<VirtualHost server.company.com:7777>  
ServerName www.myportal.com  
Port 80  
</VirtualHost>
```

```
<VirtualHost server2.company.com:7777>  
ServerName www.portal.com  
Port 80  
</VirtualHost>
```

```
NameVirtualHost 123.45.67.8:80
```

```
<VirtualHost server.company.com:80>  
ServerName www.myportal.com  
Port 80  
</VirtualHost>
```

```
<VirtualHost server2.company.com:80>  
ServerName www.portal.com  
Port 80  
</VirtualHost>
```

5.4.3 ドメイン名の解決

ローカルの HOSTS ファイルを使用すると、内部ネットワークでは通常表示できないドメイン名を簡単に解決できます。たとえば、`server.company.com` という Oracle9i Application Server ホストはそれ自体に要求を送りますが、それが要求している URL は `www.myportal.com` を指しています。このため、そのマシンのローカルな HOSTS ファイルにホストのエントリを作成して、ファイアウォール内でこの名前が解決されるようにする必要があります。この例の HOSTS ファイルのエントリには、次の行を追加する必要があります。

```
# This is a sample HOSTS file used by Microsoft TCP/IP
# for Windows NT.
#
127.0.0.1    localhost
123.45.67.8  www.myportal.com
```

ローカルの HOSTS ファイルにこれらのエントリを追加しない場合は、Oracle9i Application Server ホストが、逆プロキシ (`www.myportal.com`) を介してインターネットに要求を送り、インターネットからそれを戻すプロキシ・サーバーを認識するように設定する必要があります。ただし、パフォーマンスが低下する可能性があるため、このような設定は行わないようにしてください。

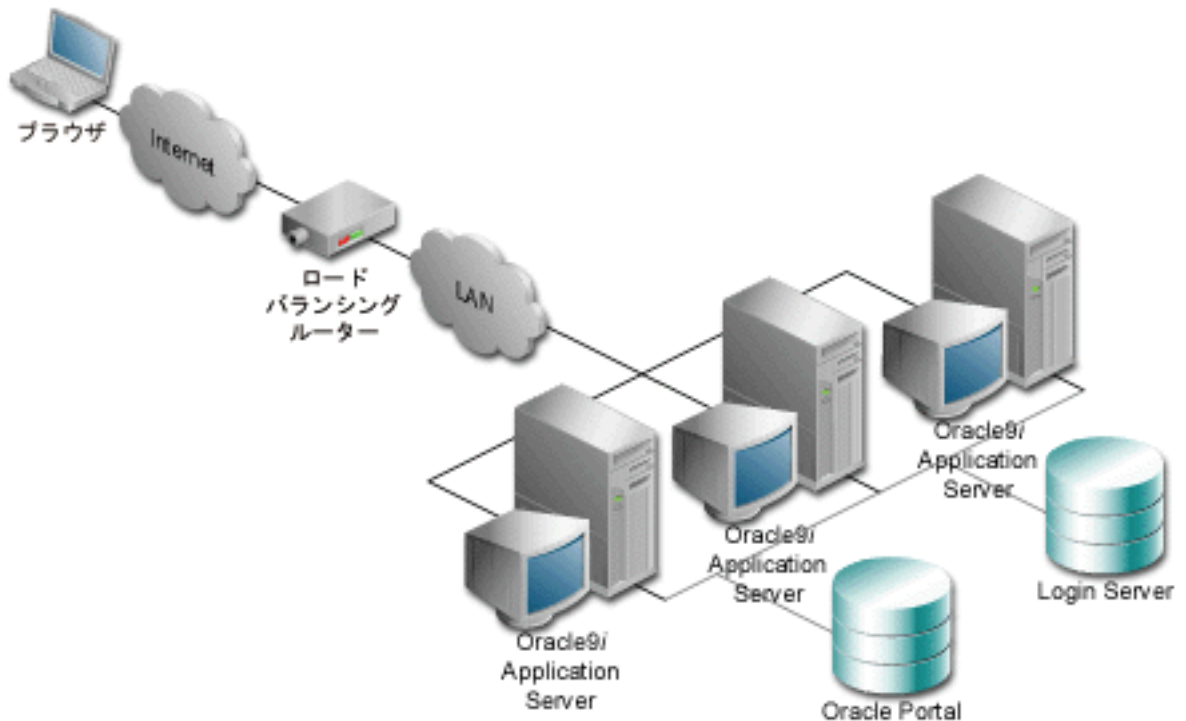
注意： HP などの一部のプラットフォームでは、IP 名のマッピング用のソースに適用される検索順序を指示するファイルがあります。そのようなファイルがプラットフォームにある場合、前述の例を機能させるためには、IP マッピングについてチェックされるローカルの HOSTS ファイルが DNS サーバーの前に指定されていることを確認してください。

5.5 ロード・バランシング・ルーターの設定

ロード・バランシング・ルーター (LBR) の目的は、クライアントのブラウザに公開アドレスを 1 つだけ提供し、LBR によって行われる要求の配信に基づいて、実際に要求を処理する Web サーバーの一群を提供することです。LBR そのものは、非常に高速のネットワーク・デバイスであり、Web ページ要求を膨大な数の物理サーバーに分散できます。

Oracle9i Application Server の中間層のサーバーを複数インストールして負荷の高い処理を行う場合は、次の図に示すように Oracle Portal を構成できます。

図 5-5 ロード・バランス・ルーターの構成



この例では、それらの各サーバーが Login Server または Oracle Portal のどちらの要求も処理できることを示しています。中間層の各サーバーには、それらのデータベースごとに DAD エントリを作成しておく必要があります。これを達成する良い方法は、DAD の構成情報が入っているファイル・システムを中間層のサーバー間で共有させることです。この方法によって、それらのサーバーはいくつかのキャッシュ・ファイルを共有できます。

この構成で考慮すべき重要な点として、次のことがあげられます。

- インターネットの DNS は、`www.myportal.com` という名前を LBR 上の外部 IP アドレスにマップします。
- LBR では、`www.myportal.com` への要求のロード・バランシングを `svr1.company.com`、`svr2.company.com` および `svr3.company.com` に対して実行し、それらの IP アドレスに要求をアドレス指定します。ただし、HTTP 要求の `Host:` フィールドには `www.myportal.com` が指定されたままです。
- 中間層の各ホストは、`www.myportal.com` への要求を受け入れ、それらの `httpd.conf` ファイルでその名前を `ServerName` としてアサートします。したがって、`svr1`、`svr2` などの名前には関連性がありません。
- `svr1`、`svr2`、`svr3` のローカルの `HOSTS` ファイルには `www.myportal.com` というエントリがあり、それぞれ独自の IP アドレスを指しています。
- LBR でポートのマッピングを行わない場合は、内部サーバーが LBR と同じポートを使用するように設定する必要があります。
- 最適なキャッシュ使用率は、キャッシュ・ファイルを書き込むための共有ファイル・システムをマウントすることによって確認できます。中間層のサーバーにキャッシュ・ディレクトリを共有させない場合でも、キャッシングは機能しますが、ヒット率は低下します。

5.5.1 中間層とデータベースとの間へのファイアウォールの配置

アプリケーション・サーバーと、Oracle Portal がインストールされているデータベースとの間に SQL*Net プロキシを備えたファイアウォールを置くことはかなり一般的なことです。ただし、Oracle Portal のアーキテクチャでは、データベースから中間層のサーバーへの HTTP 接続が必須であることを忘れないようにしてください。たとえば、Oracle Portal が Login Server に HTTP 要求を出して、外部アプリケーションのリストを入手するときが必要となります。あるいは、Oracle Portal のリポジトリが、場合によってはイントラネット用のファイアウォールの外側にある Web プロバイダなどの特定のプロバイダに HTTP 要求を出すときにも必要です。ファイアウォールをどこに導入し、どのトラフィックがそこを通過できるようにするかを計画するときは、この通信経路を念頭に置いてください。

HTTP トラフィックが使用中のポートを中継し、中間層と Oracle Portal コードが格納されているデータベースとの間に設定されたファイアウォールを通過できるようにする必要があります。

同様に、Login Server が LDAP 認証用に設定されている場合は、LDAP トラフィックが LDAP サーバーに着信できるようにする必要があります。LDAP コールは、Login Server のデータベース・インスタンスから作成されます。

関連項目： [5.5.1 項「中間層とデータベースとの間へのファイアウォールの配置」](#)

5.6 Oracle HTTP サーバーの調整

Oracle HTTP サーバー・リスナーを設定することにした場合でも、Apache リスナーによって同時に処理できる要求のおおよその数を設定して、パフォーマンスを最適化することができます。

特に UNIX では、Apache はプロセス・ベースであるため、プロセスごとに、それを要求した各 DAD に対してデータベース接続を開く必要があります。その結果、要求の数がかなり多くなる可能性があり、処理できるセッション数を超えた場合に、クライアントがロックアウトされることがあります。ただし、値を必要以上に大きく設定すると、リソースが消費されます。

次に、その使用例を説明します。

1. Oracle Portal DAD からのどのサービス要求でも、ネットワーク接続が 1 つとセッションが 2 つが必要です (2 つのセッションは同じ物理接続を使用します)。

最初のセッションは `portal30` 用であり、2 番目のセッションは `portal30_public` 用です。

2. Oracle Portal にログインする場合は、Login Server DAD (SSO DAD) の接続を開く必要があります。これには、ネットワーク接続が 1 つとセッションが 2 つが必要です。

この場合、最初のセッションは `portal30_sso` 用となり、2 番目のセッションは `portal30_sso_public` 用となります。

3. 同時に処理される要求の最大数を決める Apache 構成の設定は、`MaxClients` です。デフォルトは 150 です。

各ユーザーが Oracle Portal にログインし、作業している場合は、前述の使用例 (1) と (2) により、プロセスごとにセッションが 4 つ必要になります。このような使用例では、セッションの合計数が次のように計算されます。

$$150 * 4 = 600$$

600 のセッションと約 300 のデータベース接続 (1 つの接続につき 2 つのセッション) が必要となります。

5.6.1 MaxClient 値の設定

ログインの頻度は一般に Oracle Portal のアクセス頻度よりも低いため、別々の Oracle HTTP サーバー・リスナーで Login Server を設定するのが理にかなっています。目標は、MaxClients の設定をポータル・システムのニーズに影響しない程度に合理的な値に調整することです。

Oracle Portal では、データベース接続のプールを管理する Apache mod_plsql を幅広く利用します。MaxClient パラメータは、mod_plsql によってプールされるデータベース接続の数に直接関連する Apache プロセスの数を調整します。

注意： 詳細は、Oracle9i Application Server のドキュメント・セットの一部として提供される『PL/SQL ゲートウェイの使用』を参照してください。

1. Login Server のリスナーでは、MaxClients パラメータに設定する近似値を一度決めた後は、次の場所にある Apache 構成ファイル httpd.conf でこれを適切な値に編集してください。

```
<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/conf/
```

MaxClients の設定を調整して、Apache リスナーで Apache によって処理される要求の数を制御します。これによって、確立されるセッションの最大数が最終的に制御されます。

2. Oracle Portal リスナーでは、Login Server のニーズと Oracle Portal のニーズに従って、それらが相互に影響し合わないよう MaxClients パラメータを個別に調整できます。このパラメータは、確立されるセッションの数に直接対応しており、Apache リスナーが Portal リスナーで処理できる最大負荷に相当します。

httpd.conf ファイルの MaxClients セクションは、次のようになります。

```
# Limit on total number of servers running, i.e., limit on the number
# of clients who can simultaneously connect --- if this limit is ever
# reached, clients will be LOCKED OUT, so it should NOT BE SET TOO LOW.
# It is intended mainly as a brake to keep a runaway server from taking
# the system with it as it spirals down...
#
MaxClients 150
```

注意：

- 個別に調整する場合は、Oracle Portal と Login Server 用の別々のリスナーがあります。前者はポータル・データベースのリソース（セッション）を制御し、後者は Login Server データベースのリソースを制御します。
 - データベースによって許可されるセッションと接続の数は、Oracle8i データベースの `init.ora` で設定された値によって制限されます。詳細は、Oracle8i データベースのドキュメント・ライブラリを参照してください。
-

Oracle Portal コンテンツ領域の検索機能の設定

この章では、Oracle Portal コンテンツ領域に組み込みの *interMedia Text* 検索機能の設定方法について説明します。

この章の内容：

- [新しい検索機能](#)
- [前提条件](#)
- [Oracle Portal での検索](#)
- [interMedia Text のパフォーマンス](#)
- [interMedia Text 検索の設定](#)
- [interMedia テキスト索引の設定](#)
- [interMedia Text 索引の削除](#)
- [interMedia Text の環境設定](#)
- [多言語機能（マルチレクサー）](#)
- [Oracle Portal で作成される interMedia Text 関連のプロシージャ](#)

関連項目：

- *interMedia Text* のマニュアルについては、Oracle8i データベースのドキュメント・ライブラリを参照してください。
- *interMedia Text* の技術論文、研修用の教材、サンプル・コードなどについては、次のサイトを参照してください。（英文）

<http://technet.oracle.com/products/text/>

6.1 新しい検索機能

Oracle Portal のこのリリースには、次の検索用新機能が含まれています。

- 検索結果がポートレットに表示されるようになりました。ポートレットは、どのポータル・ページにも追加できます（デフォルトの検索結果のページが用意されています）。ポートレットをカスタマイズして、各リストに表示される情報を制御することができます。
- ポータル管理者は、デフォルトの拡張検索ページをカスタム・ページに置き換えることもできます。カスタム・ページは、拡張検索リンクをクリックすることでいつでも呼び出すことができます。

これらの新機能を利用するには、「サービス」ポートレットの「検索設定」をクリックします。デフォルトでは、「サービス」ポートレットは Oracle Portal ホーム・ページの「管理」タブにあります。

6.2 前提条件

interMedia Text を設定し、*interMedia Text* 索引の作成、変更、更新、削除を行うには、Oracle Portal 管理者としてログインしている必要があります。

Oracle Portal で *interMedia Text* を使用する前に、次の作業を行ってください。

- Oracle Universal Installer (OUI) と Database Configuration Assistant を実行して、*interMedia Text* オプションを備えた Oracle8i データベースをインストールし、設定します。Oracle8i データベースのインストールと設定を行って *interMedia Text* を使用できるようにする方法については、Oracle8i のインストール・マニュアルを参照してください。

重要： Windows NT/2000 で Oracle Portal の *interMedia Text* を使用可能にする場合は、次の要件が適用されます。

- Oracle Portal は、Oracle 8.1.7 データベースにインストールされている必要があります。
 - 「Database Access Descriptor」ページから接続プーリングを使用禁止にします。詳細は、Oracle9i Application Server のドキュメント・セットの一部として提供される『PL/SQL ゲートウェイの使用』を参照してください。
-

- 該当するオペレーティング・システムの『Oracle9i Application Server インストール・ガイド』の指示に従って、Oracle Portal をインストールします。
- 「コンテンツ領域の作成マネージャ」を使用して、Oracle Portal コンテンツ領域を作成します。「Oracle Portal オンライン・ヘルプ」の「Creating a content area」トピックを参照してください。

- このデータベースが既存の ConText サイトであった場合は、必ず `text_enable` を `init.ora` ファイルから削除してください。このファイルが今後 Oracle8i で使用されることはなく、このファイルがあると Oracle8i は正常に動作しません。「cannot find package DR_REWRITE」というエラーが表示される場合があります。

関連項目： 完全なシステム要件については、[第 1 章「要件の確認」](#)を参照してください。

6.2.1 UNIX での *interMedia* Text

interMedia Text 機能を有効にするには、Oracle8i データベースと Net8 リスナーを起動する前に、次の UNIX 環境変数を設定します。

Korn シェル (ksh)

```
LD_LIBRARY_PATH=$LD_LIBRARY_PATH:$ORACLE_HOME/ctx/lib
export LD_LIBRARY_PATH
```

C シェル (csh)

```
setenv LD_LIBRARY_PATH ${LD_LIBRARY_PATH}:${ORACLE_HOME}/ctx/lib
```

6.3 Oracle Portal での検索

Oracle Portal コンテンツ領域を検索するときに知っておくべき重要な点として、次のことがあげられます。

- Oracle Portal での *interMedia* Text 検索は、コンテンツ領域のみに利用できます。Oracle Portal のページに対する検索は「Oracle Portal ナビゲータ」から行われ、アプリケーション（およびコンテンツ領域）に対する検索は Oracle Portal の「検索」ポートレットを使用して行われます。「Oracle Portal オンライン・ヘルプ」の「Adding search capabilities on your page」トピックを参照してください。
- Oracle Portal で検索を有効にすると、Oracle Portal のインストール時に作成されたコンテンツ領域がすべて検索可能となります。一方のコンテンツ領域で検索を有効にし、もう一方のコンテンツ領域で無効にすることはできません。ただし、検索結果は、検索が実行されるコンテンツ領域に制限されます。
- Oracle Portal のコンテンツ領域での検索には、使用する検索のタイプによって 2 つのレベルと 2 つのモードがあります。検索のタイプには、基本検索、拡張検索、*interMedia* Text 検索があります。次の表に、それらの違いがまとめられています。

表 6-1 *interMedia Text* 検索のタイプ

	基本検索	拡張検索
使用方法	ナビゲーション・バーの「検索」フィールドから	「拡張検索」画面から
<i>interMedia Text</i> が無効の場合	<ul style="list-style-type: none">■ アイテムの表示名、説明、キーワードなど、アイテムの属性に対して検索を行います。■ 自動的にワイルドカードを使用します。 <p>例：「sing」に対して検索を行うと、sing、single、tossing などが検索結果として表示されます。</p>	
<i>interMedia Text</i> が有効の場合	<ul style="list-style-type: none">■ アイテムの表示名、説明、キーワードなど、アイテムの属性に対して検索を行います。■ 文書や URL の内容で検索を行います。■ STEM 検索を使用します。 <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none">■ 「distinguish」に対して検索を行うと、distinguish、distinguished、distinguishes などが検索結果として表示されます。■ 「sing」に対して検索を行うと、sing、sang、sung などが検索結果として表示されます。	

6.3.1 基本検索

このタイプの検索では、アイテムの表示名、説明、キーワードなどのアイテム属性を検索して指定の語を見つけだす他に、フォルダ、カテゴリ、パースペクティブの表示名や説明も検索されます。*interMedia Text* が有効になっている場合は、文書や URL の内容でも基本検索が行われます。検索結果のページには、これらの条件を満たすアイテムがすべて表示されます。

一般に、「検索」フィールドは次に示すようなナビゲーション・バーに表示され、エンド・ユーザーはここから基本検索を行うことができます。

図 6-1 Oracle Portal の基本検索画面




関連項目：「Oracle Portal オンライン・ヘルプ」の「Performing a basic search」、「Setting up the search feature」および「Editing navigation bars」の各トピック

6.3.2 拡張検索

拡張検索（常に有効になっている）を使用すると、次のような検索ができます。

- 指定された語のいずれかを含むコンテンツを検索できます。
- 現在作業しているコンテンツ領域以外のコンテンツ領域全体で、あるいはすべてのコンテンツ領域にわたって検索できます。
- 検索対象を特定のフォルダ、カテゴリ、パースペクティブ、アイテム・タイプ、属性に制限できます。
- *interMedia Text* が有効になっている場合は、近似、Soundex、ファジー検索も行われます。

図 6-2 Oracle Portal の拡張検索画面



演算子

検索

すべてを含む

basic

実行

リセット

検索方法のヒント: [検索のヒント](#).
単純な検索で使用 [基本検索](#).

検索

コンテンツ領域

コンテンツ領域のサンプル

フォルダ

☐ ☒ サブフォルダを含める

制限

言語

English

カテゴリ

すべて

パースペクティブ

すべて

戻りのみ

タイプ

☒ すべて

☐ フォルダ

☐ アイテム・タイプ

すべてのアイテム・タイプ

属性の検索

一致

☒ すべて ☐ 任意

属性名	演算子	値
	<input type="checkbox"/> 内容	
	<input type="checkbox"/> 内容	
	<input type="checkbox"/> 内容	
	<input type="checkbox"/> 内容	

他の属性

関連項目：「Oracle Portal オンライン・ヘルプ」の「Performing an Advanced Search」トピック

6.3.3 interMedia Text 検索

前述のとおり、Oracle Portal には *interMedia Text* の索引付けに対応する検索機能が組み込まれています。繰り返しになりますが、Oracle Portal で検索を有効にすると、Oracle Portal のインストール時に作成されたコンテンツ領域がすべて検索の対象となります。一方のコンテンツ領域で検索を有効にし、もう一方のコンテンツ領域で無効にすることはできません。ただし、検索結果は、検索が実行されるコンテンツ領域に制限されます。この検索は、PDF、PowerPoint、Word などの文書の内容のみでなく、URL のページ、テキスト、HTML のコンテンツに対しても行われます。

interMedia Text が有効になっていない場合、エンド・ユーザーは常にコンテンツ領域で基本検索または拡張検索を行うことができます。

6.3.4 *interMedia Text* 検索結果の表示

「検索設定」ページ（[図 6-4](#) を参照）からテーマと要旨を使用可能にした場合は、検索によって検索結果から返される文書のテーマと要旨にアクセスできます。次のような表示ができます。

- そのファイルの HTML バージョンを表示します。
- そのファイルの HTML バージョンを表示し、Oracle Portal 管理者が設定した色またはフォントで検索文字列を強調します。
- 主要なテーマをチャートで表示します（文書のテーマ分析）。
- ファイルの内容に関する概要を表示します（要旨）。

関連項目： [6.5.2 項「手順 2: *interMedia Text* 検索の有効化」](#)

6.4 *interMedia Text* のパフォーマンス

interMedia Text のパフォーマンスは、次の問合せ、索引付けおよび更新に関する考慮事項の影響を受ける場合があります。

6.4.1 問合せに関する考慮事項

データのサイズが問合せに及ぼす影響

テキスト索引が ROWID を提供する速度は、実際のデータ・サイズの影響は受けませんが、単語のリストを保持するトークン表のサイズ、および単語が表示される行に関する情報の影響を受けます。テキスト問合せの速度は、このトークン表から取り出す必要のある行数、および各行の長さに関係します。

このため、大きなドキュメント・セットでの、数の少ない単語の検索速度は、小さなドキュメント・セットでの一般的な単語（または、一般的でない多数の単語）の検索速度とほぼ同じです。

データのソース・タイプが問合せに及ぼす影響

文書の形式（たとえば、プレーン ASCII テキスト、HTML または Microsoft Word）は、問合せの速度には影響しません。文書は、問合せのときではなく、索引付けのときにプレーン・テキストにフィルタリングします。

データが「クリーン」であるかどうかによって違いが生じます。スペルチェックをして公開用に整理したテキストは、トークン表を膨張させるスペルミスや省略形を含む電子メールなどの変則的なテキストより、全体的な用語範囲が（したがって、トークン表のサイズが）ずっと小さくなる傾向があります。

6.4.2 索引付けに関する考慮事項

索引付けに要する時間

テキストの索引付けは、リソースを消費する処理です。明らかに、索引付けの速度は関係するハードウェアの処理能力に依存しますが、ワークステーション・クラスの NT マシン（約 400MHz の CPU、128MB のメモリー）で 1 時間あたり 50MB、マルチ CPU、マルチギガバイトの大規模サーバー・マシンで 1 時間あたり 1GB 以上の速度が期待できます。後者の数字は、パーティション表でパラレルの索引付けを使用することを前提としています（8.1.6 の新しいオプション）。

ほとんどの現実のシステムでは、文書の表に完全な索引付けをするには、数時間、場合によっては数日かかります。

索引付け処理の進行状況を追跡する方法

`ctx_output.start_log <filename>` コマンドを使用して、索引付け処理の出力を記録できます。通常、`<filename>` は `$ORACLE_HOME/ctx` に書き込まれますが、`ctx_adm.set_parameter` の `log_directory` パラメータを使用してディレクトリを変更できます。

この方法を使用しなくても、粗削りな方法ですが、`DRxxxK` 表の行数を数えることができます。この表には、索引の付いた行ごとに 1 つの行があります。ただし、これらの行は、索引付け処理によって索引付けメモリーが使い果されたときにのみコミットされ、データベースへのフラッシュを行います。索引付けが完了するまでこれが起こらないようにすることもできます。

索引付けに必要なディスク容量のオーバーヘッド

オーバーヘッド（`DR$` 索引表に必要な空き容量）は、元のテキスト・ボリュームの 25 パーセントから 100 パーセントまで様々です。一般に、テキストの合計容量が大きいほどオーバーヘッドは小さくなりますが、小さいレコードが多数ある場合は、大きいレコードが少数ある場合よりオーバーヘッドが大きくなります。また、「クリーン」なデータ（公開されたテキストなど）は、電子メールや議事録などの「乱雑な」データよりオーバーヘッドが少なくて済みます。これは、乱雑なデータには、スペルミスや省略形などによる、特異な単語が含まれていることが多いからです。

一般に、テーマ索引はテキスト索引よりずっと小さいものです。通常、テーマ索引のみの作成に必要な記憶域はごくわずかですが、テキスト索引のみの作成では結合された索引の容量はあまり節約されません。ただし、速度はかなり速くなる可能性があります。

データ形式が索引付けに及ぼす影響

索引付けのオーバーヘッドを調べると、書式付き文書（Microsoft Word ファイル）のオーバーヘッドはずっと少ないことがわかります。これは、そのような文書は、その中に含まれる実際のテキストと比較すれば非常に大きい傾向があるためです。

したがって、たとえば、1GB の Word 文書に必要な索引容量は 50MB のみですが、1GB のプレーン・テキストでは 500MB 必要です。これは、後者の場合は 10 倍のプレーン・テキストがあるためです。

索引付けに要する時間を割り出すのは困難です。索引付けするテキストの量が減少すれば明らかに効果がありますが、この効果と文書をフィルタリングするコストとの間で平衡を取る必要があります。一般に、これらの効果とコストはおおむね相殺されます。したがって、1GB の書式付き文書の索引付けに要する時間は、少し長い場合がありますが、1GB のプレーン・テキストの索引付けに要する時間とほぼ同じです。

6.4.3 更新に関する考慮事項

新規または更新されたレコードの索引付けの回数

索引付けは何回行う必要があるでしょうか。索引付けをやり直す回数が少ないほど（コマンド `ALTER INDEX indexname REBUILD ONLINE PARAMETERS ('SYNC')` を使用）、索引の断片化は少なくなり、最適化の必要も少なくなります。ただし、これは、データが徐々に古くなり、ユーザーにとって役に立たなくなる可能性があることを意味しています。

多くのシステムでは、夜間に索引付けを処理することができます。これは、1 日経過していないデータは検索できないことを意味します。システムによっては、1 時間、10 分または 5 分ごとの更新を行うものもあります。

注意： Context サーバー (ctxsrv) は、今後は使用しないでください。かわりに、`drbgdml.sql` を使用してください。

索引の断片化が進んだときの対処方法

最善の方法は、一部の問合せのタイミングを調整し、索引の最適化を実行し、同じ問合せのタイミングを調整することです。毎回データベースを再起動して `SGA` を消去する必要があります。問合せの速度が大幅に向上する場合は、最適化が効果的だと言えます。

より厳密な方法としては、`DRxxxI` 表にある各用語の行数を数える方法があります。

```
SELECT AVG(COUNT(*)) FROM DR$index_name$I
      GROUP BY TOKEN_TEXT HAVING COUNT(*) > 1;
```

注意： 索引表に 1 行のみ持つ単語は、すべて無視してください。

この問合せで値が 10 より大きい場合は、索引の最適化が必要な場合がありますが、実験では、どのような特殊な状況においても最善の値が出ます。非常に大きな表には必然的に多数の行があり、`TOKEN_INFO` データが 4K の内部制限を超えるので、大きなシステムでは平均はもっと大きくなる場合があります。

詳細情報の参照先：

<http://technet.oracle.com/products/text/> にある「interMedia Text Performance FAQ」（英文）

6.5 interMedia Text 検索の設定

Oracle Portal での interMedia Text の設定は、大きく分けて次の 4 つの手順から構成されます。

- [手順 1: グローバル・ページの設定](#)
- [手順 2: interMedia Text 検索の有効化](#)
- [手順 3: interMedia Text 索引の作成](#)
- [手順 4: interMedia Text 索引の管理](#)

6.5.1 手順 1: グローバル・ページの設定

最初の手順では、次の方法でグローバル・ページの設定を行う必要があります。

1. 「サービス」ポートレットで、「グローバル設定」をクリックします。デフォルトでは、「サービス」ポートレットは Oracle Portal ホーム・ページの「管理」タブにあります。

図 6-3 グローバル・ページの設定 - プロキシ・サーバー

プロキシ・サーバー

プロキシ・サーバーの設定を入力します。プロキシ・サーバーは、ファイアウォールの外部への接続に使用されます。

HTTPサーバー	<input type="text"/>
HTTPサーバー・ポート	<input type="text"/>
この文字で始まるドメインにプロキシ・サーバーを使用しない	<input type="text"/>
URL接続のタイムアウト(秒)	<input type="text"/>

2. 「プロキシ・サーバー」セクションで、次の処理を行います。
 - a. HTTP サーバーのプロキシ・サーバーのホスト名を入力します。

注意：プロキシ・サーバー名に接頭辞 `http://` を付けないでください。

- b. プロキシ・サーバーを使用しないドメインを入力します。
 - c. タイムアウトまでの最大接続時間（秒）を入力します。
3. 「OK」をクリックします。

6.5.2 手順 2: *interMedia Text* 検索の有効化

interMedia Text 索引の作成前に、次の方法で Oracle Portal の *interMedia Text* の設定を行います。

1. 「サービス」ポートレットで、「検索設定」をクリックします。デフォルトでは、「サービス」ポートレットは Oracle Portal ホーム・ページの「管理」タブにあります。

図 6-4 「サービス」ポートレット - *interMedia Text* のプロパティ

interMedia Text のプロパティの指定

コンテンツ領域で、*interMedia Text* 検索および要旨とテーマ検索を使用可能にするかどうかを選択します。*interMedia Text* 検索では、アイテムの内容だけではなく、そのタイトル、説明およびキーワードも検索できます。要旨とテーマ検索では、検索によって返されたアイテムについてさらに背景情報が提供されます。返されたアイテムで検索語を強調するための色とスタイルも選択できます。*interMedia Text* 検索が機能するには、データベースで *interMedia Text* がサポートされ、インストールされている必要があります。また、「索引を作成」をクリックして索引を作成している必要があります。ボタンに「索引の削除」と表示される場合は、索引が既にあり、必要に応じて削除できます。

索引を作成

☒ *interMedia Text* 検索を使用可能にする

☒ テーマと要旨を使用可能にする

テキストの色を強調: default ▼

テキストのスタイルを強調: plain ▼

注意：「*interMedia Text* はインストールされていません。」というメッセージが表示された場合は、*interMedia Text* がこのデータベースと一緒にインストールされなかったため、コンテンツ領域で利用できません。*interMedia Text* をインストールするようデータベース管理者に依頼してください。インストールしてから、SQL*Plus で次のコマンドを実行する必要があります。

inctxgrn.sql

このファイルは、<ORACLE_HOME>/portal30/admin/plsql/www ディレクトリにあります。

Oracle Portal のコンテンツ領域を所有するスキーマのユーザー名とパスワードを使用してログインします。たとえば、スキーマ名が「SCOTT」の場合、ユーザー名「SCOTT」と適切なパスワードでログインします。

2. 「*interMedia Text* 検索を使用可能にする」を選択して、*interMedia Text* 検索をコンテンツ領域で利用できるようにします。
3. 「テーマと要旨を使用可能にする」を選択して、検索によってアイテムが返されるたびにテーマと要旨を作成します。
 - テーマは、アイテム内で最も頻繁に使用される名詞と動詞を示します。
 - 要旨は、それらの名詞と動詞の使用頻度に基づいて生成されるアイテムの概要を示します。

注意： テーマと要旨は、利用できない言語があります。

4. 「テキストの色を強調」リストで、検索によって返される HTML 表現のアイテム内の検索語を強調するための色を選択します。
5. 「テキストのスタイルを強調」リストで、検索によって返される HTML 表現のアイテム内の検索語に適用するスタイルを選択します。
6. 「OK」をクリックします。

これで、*interMedia Text* が使用できるようになりました。次に、*interMedia Text* 索引を新たに作成する必要があります。

6.5.3 手順 3: *interMedia Text* 索引の作成

interMedia Text 索引を作成するには、次の手順に従います。

1. 前の項、[6.5.2 項「手順 2: *interMedia Text* 検索の有効化」](#)で説明したように、Oracle Portal の *interMedia Text* の設定が完了していることを確認します。
2. 前のページで説明した「*interMedia Text* のプロパティの指定」セクションで、「索引を作成」をクリックします。
 - 正しく実行された場合は、「索引が作成されました」というメッセージが表示され、*interMedia Text* 索引がサーバー上に作成されます。
 - 索引の作成に失敗した場合は、[6.2 項「前提条件」](#)に記述されているシステム要件がすべて満たされているかどうかを確認してください。

注意： また、SQL*Plus で次のコマンドを実行することもできます。

ctxcrind.sql

このファイルは、<ORACLE_HOME>/portal30/admin/plsql/www ディレクトリにあります。

Oracle Portal のコンテンツ領域を所有するスキーマのユーザー名とパスワードを使用してログインします。たとえば、スキーマ名が「SCOTT」の場合、ユーザー名「SCOTT」と適切なパスワードでログインします。

次の *interMedia Text* 索引が作成されます。

表 6-2 作成された *interMedia Text* 索引

索引名	説明
WWSBR_CORNER_CTX_INDX	フォルダをベースとする索引
WWSBR_DOC_CTX_INDX	アップロードされた文書の内容をベースとする索引
WWSBR_PERSP_CTX_INDX	パースペクティブをベースとする索引
WWSBR_THING_CTX_INDX	アイテムをベースとする索引
WWSBR_TOPIC_CTX_INDX	カテゴリをベースとする索引
WWSBR_URL_CTX_INDX	オブジェクトの URL (Uniform Resource Locator) をベースとする索引

注意： 索引の作成に要する時間は、コンテンツ領域に含まれているアイテムの数によって異なります。

6.5.3.1 SQL*Plus での索引の作成

SQL*Plus で次のようにして索引を作成することもできます。

1. Oracle Portal がインストールされているデータベースで、ポータル・スキーマの適切なユーザー名とパスワードを使用して SQL*Plus にログインします。たとえば、次のようになります。

```
sqlplus portal30/portal30
```

2. 次のコマンドを入力します。

```
set serverout on
declare
  l_message varchar2(2000);
begin
  wwv_context.createindex(p_language => 'us', p_message => l_message);
  dbms_output.put_line(l_message);
end;
/
```

索引が作成されると、「*interMedia Text* 索引が正常に作成されました」というメッセージが表示されます。

関連項目： *interMedia Text* 索引の作成時に問題が発生した場合は、[第 8 章「トラブルシューティング」](#)の「[問題：interMedia Text 索引が作成できません。](#)」を参照してください。

6.5.4 手順 4: *interMedia Text* 索引の管理

interMedia Text を使用すると、データベースに格納されている文書に関するテキスト索引（逆索引）を作成できます。逆索引の更新には重い処理が必要となるため、テキスト列に対する変更はキューに入れられ、バッチで処理されます。キューに基づいて逆索引を更新するプロセスは、索引の「同期化」と呼ばれています。

作成した *interMedia Text* 索引を管理するもう 1 つの方法は最適化です。作成した索引は、同期化に伴って、必要以上に多くのディスク容量を消費するほどまでに増加し、問合せの効率を低下させます。

索引の最適化は、選択したモードによって様々に機能します。FAST MODE による最適化は、索引全体に作用し、断片化された行を圧縮しますが、古いデータは削除しません。FULL MODE では、索引全体を最適化することも、索引の一部のみを最適化することもできます。そして、断片化された行を圧縮し、なおかつ古いデータを削除します。詳細は、『Oracle8i *interMedia Text* リファレンス』の ALTER INDEX コマンドの部分を参照してください。

interMedia Text を使用すると、各テキスト索引が同期化される頻度を完全に制御できます。たとえば、ご使用のアプリケーションでテキスト変更をすぐに索引に反映させる必要がある場合は、5 秒ごとに同期化するように選択できます。コンピュータの処理資源をより効率的に利用しながら、最適な索引を目指す場合は、1 日に 1 度同期化するように選択できます。

interMedia Text 索引を作成した後は、索引を効率的に管理する方法を考える必要があります。たとえば、1 日中大量データの挿入、更新、または削除を処理している場合は、毎日 *interMedia Text* 索引を同期化することを検討してください。

6.5.4.1 *interMedia Text* 索引の同期化

次の例では、ctx_schedule がインストールされているものと想定します。

注意： ctx_schedule は例として提供されています。*interMedia Text* または Oracle9iAS Portal のコンポーネントとしてはサポートされていません。詳細は、<http://metalink.oracle.com> にある Oracle MetaLink の Note 132689.1 を参照してください。（英文）

1. 適切なユーザー名とパスワードを使用して、SQL*Plus にログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
exec ctx_schedule.startup ( 'ex1_index', 'SYNC', 1 );
exec ctx_schedule.startup ( 'ex1_index', 'OPTIMIZE FAST', 120 );
```

この例では、ex1_index という索引が毎分同期化され、2 時間ごとに最適化されます。これは、データベースを一度シャットダウンしてから再起動した場合でも有効です。

6.5.4.2 索引管理の停止

次の例では、ctx_schedule がインストールされているものと想定します。

注意： ctx_schedule は例として提供されています。interMedia Text または Oracle9iAS Portal のコンポーネントとしてはサポートされていません。詳細は、<http://metalink.oracle.com> にある Oracle MetaLink の Note 132689.1 を参照してください。(英文)

1. 適切なユーザー名とパスワードを使用して、SQL*Plus にログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
exec ctx_schedule.stop ( 'ex1_index' ) ;  
exec ctx_schedule.stop ( 'ex1_index', 'OPTIMIZE FAST' ) ;
```

特に指示がない限り、ctx_schedule.stop は停止される操作「SYNC」であることを前提としています。

注意： 新しいテキストがすぐ（5 秒ごと）に検索されるようにするには、次の場所にある drbgdml.sql スクリプトの使用を検討してください。

```
<ORACLE_HOME>/ctx/sample/script/drbgdml.sql
```

6.6 interMedia テキスト索引の設定

トラブルシューティングの際は、*interMedia Text* を再インストールするか、*ctxsys* スキーマを再作成する必要がある場合があります。いずれの場合も、*SQL*Plus* で次のスクリプトを実行して Oracle Portal *interMedia Text* 環境をリセットする必要があります。

```
inctxgrn.sql
```

このファイルは、<ORACLE_HOME>/portal30/admin/plsql/www ディレクトリにあります。

Oracle Portal のコンテンツ領域を所有するスキーマのユーザー名とパスワードを使用してログインします。たとえば、スキーマ名が「SCOTT」の場合、ユーザー名「SCOTT」と適切なパスワードでログインします。

6.7 interMedia Text 索引の削除

索引の削除は大量の時間とリソースを消費する操作であるため、業務時間中を避けてこの作業を計画するようにしてください。

次のような場合に、*interMedia Text* 索引を削除します。

- *interMedia Text* を使用禁止にし、基本検索と拡張検索のみに戻す必要がある場合
- コンテンツ領域に大量のコンテンツが新たに追加されたことがわかっている場合、まず索引を削除し、次に索引を再作成します。

次の方法で、*interMedia Text* 索引を削除できます。

1. 「サービス」ポートレットで、「検索設定」をクリックします。デフォルトでは、「サービス」ポートレットは Oracle Portal ホーム・ページの「管理」タブにあります。
2. 「*interMedia Text Properties*」セクションで、「索引の削除」をクリックします。

interMedia Text 索引がサーバーから削除されます。

注意：

- Oracle *SQL*Plus* で次のスクリプトを実行し、Oracle Portal のスキーマ所有者としてログインする方法でも、*interMedia Text* 索引を削除できます。

```
ctxdrind.sql
```

6.8 *interMedia Text* の環境設定

UNIX で Oracle8i リリース 8.1.6.2 を使用している場合は、Oracle8i のホーム・ディレクトリにある `listener.ora` と `tnsnames.ora` の各ファイルを設定して、これらの外部プロシージャをサポートする必要があります。Windows NT/2000 では、*interMedia Text* を Oracle Portal で使用する場合は、Oracle 8.1.7 データベースが必要となります。

注意： Oracle8i リリース 8.1.7 を実行している場合は、この項を無視してください。このデータベースでは、外部プロシージャを使用して文書のフィルタリングを行わないためです。

ご使用のコンピュータでは、`listener.ora` と `tnsnames.ora` の各ファイルは次の例のように表示されます。

6.8.1 `listener.ora`

次の行は、`listener.ora` ファイルでの完全なリスナー定義を示しています。

```
LISTENER =
  (DESCRIPTION_LIST =
    (DESCRIPTION =
      (ADDRESS_LIST =
        (ADDRESS = (PROTOCOL = IPC) (KEY = EXTPROC0))
      )
      (ADDRESS_LIST =
        (ADDRESS = (PROTOCOL = TCP) (HOST = oracle) (PORT=1521))
      )
    )
  )
```

6.8.1.1 システム ID

PLSExtProc というシステム識別子 (SID) 名と EXTPROC というプログラム名をサーバーの `listener.ora` ファイルに追加する場合は、`SID_LIST_LISTENER` 定義に次の行を挿入します。

```
SID_LIST_LISTENER =
  (SID_LIST =
    (SID_DESC = ...

    (SID_DESC =
      (SID_NAME=PLSExtProc) (ORACLE_HOME=/oracle/db/dev118)
      (PROGRAM=extproc)
```

注意：

- EXTPROCO と PRESENTATION=RO は、数字のゼロではなく文字「o」で終わります。
 - SID=PLSExtProc は、ネゴシエート不可です。
-

6.8.2 tnsnames.ora

次の行を tnsnames.ora ファイルの最後に追加し、CONNECT_DATA セクションで SERVICE_NAME ではなく SID を使用して、EXTPROCO のネット・サービス名の記述エントリをサーバーの tnsnames.ora ファイルに追加します。たとえば、次のようになります。

```
extproc_connection_data =
  (DESCRIPTION=
    (ADDRESS_LIST =
      (ADDRESS=(PROTOCOL=IPC) (KEY=EXTPROCO))
    )
    (CONNECT_DATA=
      (SID=PLSExtProc)
      (PRESENTATION = RO)
    )
  )
```

注意：

- 自分の SID を任意の場所で代用しないでください。
 - テキストの大文字と小文字を変更しないでください。
 - EXTPROCO は、数字のゼロではなく文字「o」で終わります。
 - tnsnames.ora の設定に役立つ Net8 Assistant を起動します。
 - これらの構成ファイルの作成については、『Net8 管理者ガイド』を参照してください。
-

6.9 多言語機能（マルチレクサー）

注意： マルチレクサーをサポートするには、表領域を最低でも 20MB まで増やす必要があります。

Oracle8i (8.1.6 以降) にはマルチレクサーが用意されており、同じ表に格納されている各種言語の文書に対して言語固有の機能を使用できます。マルチレクサーは索引機能の 1 つであり、索引を作成するときに設定します。マルチレクサーは、表の列を 1 つ余分に必要とし、その列を使用して各文書の言語を識別します。

問合せ時に、マルチレクサーは言語固有のレクサーを選択して問合せトークンの字句解析を行います。この操作は、問合せセッションの NLS_LANG 設定をベースにしています。このため、フランス語による問合せセッションでは、フランス語のためのレクサーが使用されます。

Oracle Portal のインストール時に、sbrimtlx.sql スクリプトによって言語固有のレクサー・プリファレンスが作成され、それらが 1 つのマルチレクサー・プリファレンスにまとめられます。

6.10 Oracle Portal で作成される *interMedia Text* 関連のプロシージャ

Oracle Portal をインストールすると、次のプロシージャが ctxsys スキーマに作成されます。これらのプロシージャは、*interMedia Text* の索引付けの際に Oracle Portal コンテンツ領域で使用するユーザーのデータストアをサポートするために作成されます。

- WWSBR_CORNER_CTX_<n>
- WWSBR_DOC_CTX_<n>
- WWSBR_PERSP_CTX_<n>
- WWSBR_THING_CTX_<n>
- WWSBR_TOPIC_CTX_<n>

ここでの <n> は、Oracle Portal スキーマの user_id であり、データベースごとに異なる場合があります。この値は、all_users から得られる user_id 列値です。

リッチ・コンテンツが含まれる Oracle Portal のレポートとフォームの作成

Oracle Portal を使用すると、*interMedia* リッチ・コンテンツを Oracle Portal のレポートやフォームに取り込むことができます。この処理は、*interMedia* のリッチ・コンテンツ・サービスが活用されている Oracle Portal のフレームワークを介して行うことができます。

interMedia リッチ・コンテンツには、グラフィック、オーディオ、イメージ、ビデオなどのオブジェクトがあります。これらのオブジェクトは **Oracle8i** データベースに格納されているため、ファイル・システムをコンテンツ・リポジトリとして使用する場合と同様に、オブジェクトが消失するおそれはありません。

さらに、データベース上のどこに格納されているマルチメディア・コンテンツでも任意のスキーマに格納できます。記憶域は1つのスキーマのみに制限されているわけでないため、既存のコンテンツを移動する必要はありません。既存のコンテンツは別のスキーマに残しておくことができます。

この章の内容：

- [interMedia オブジェクト・タイプ](#)
- [Oracle Portal レポートのリッチ・コンテンツ](#)
- [Oracle Portal フォームのリッチ・コンテンツ](#)
- [Oracle Portal ナビゲータを使用した表のブラウズ](#)
- [現在わかっている問題](#)

7.1 interMedia オブジェクト・タイプ

次の *interMedia* 固有のオブジェクト・タイプ（ORDSYS スキーマに定義されている）は、データベース表に格納されており、Oracle Portal のレポートやフォームに表示できます。

表 7-1 *interMedia* オブジェクト・タイプ

オブジェクト・タイプ	説明
ORDAUDIO	MP3、AU、WAV、MPEG などのオーディオ・データの格納と管理をサポートします。
ORDIMAGE	GIF、JPEG、BMP などのイメージ・データの格納、管理および操作をサポートします。
ORDVIDEO	REAL、QuickTime 3/4、AVI、MPEG などのビデオ・データの格納と管理をサポートします。

現時点では、*interMedia* リッチ・コンテンツは *interMedia* のイメージ、オーディオおよびビデオのみに対応しています。*interMedia* Locator や *interMedia* Text には適用できません。

これらのオブジェクト・タイプの詳細は、Oracle データベースのドキュメント・セットに含まれている『Oracle8i *interMedia* Audio, Image, Video ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』を参照してください。

7.2 Oracle Portal レポートのリッチ・コンテンツ

次のどちらかのウィザードを使用して、*interMedia* リッチ・コンテンツが含まれるレポートを作成できます。

表 7-2 Oracle Portal のレポート・ウィザード

レポート	説明
問合せウィザードからのレポート	このウィザードは、レポートに表示するデータを選択するための SQL 問合せの作成など、レポートを作成する手順をガイドします。SQL に精通していないユーザーや Oracle Portal に不慣れなユーザーは、このウィザードを使用してレポートを作成することをお勧めします。
例による問合せ（QBE）レポート	このウィザードを使用すると、レポートのベースとなっている表またはビューからデータの問合せ、挿入、更新または削除を行うためのレポートを作成できます。QBE レポート作成ウィザードでは、レポートに表示するデータを選択します。あるいは、エンド・ユーザーが QBE レポートのカスタマイズ・フォームで独自の問合せを行えるようにします。

レポート・ウィザードを使用して Oracle Portal レポートを作成するときは、表（デフォルト）、フォームおよびカスタムという 3 つのレイアウトから選択します。

重要：

interMedia ベースの表に基づいて Oracle Portal のレポートやフォームを作成する場合は、リッチ・コンテンツのアップロードに使用できる ORDIMAGE、ORDAUDIO または ORDVIDEO タイプの列を含む表を必ず作成しておいてください。この処理は、Oracle Portal を使用しないで行います。このような表をデータベースに作成する必要がある場合は、DBA に問い合わせてください。

interMedia Text の技術論文、研修用の教材、サンプル・コードなどについては、次のサイトを参照してください。

<http://technet.oracle.com/products/intermedia>

7.2.1 オブジェクト属性の表示

Oracle Portal のレポートやフォームには、前述の *interMedia* オブジェクト・タイプの列を表示するほかに、オブジェクト属性を結合条件、書式条件、列条件などで表示することもできます。たとえば、ビデオ・クリップのサイズまたは期間を Oracle Portal のレポートに表示し、特定の日付以降に変更されたオブジェクトのみがレポートに表示されるという条件を設定します。

7.2.2 表示オプション

前述のオーディオ、イメージ、ビデオの各オブジェクト・タイプは、次の方法で Oracle Portal レポートに描画できます。

- レポートへの埋込み（インライン）。
- コンテンツを指すリンク付きのアイコン（デフォルト）。ユーザーがリンクをクリックすると、コンテンツが新しい Web ページに表示されるか、別のウィンドウで RealPlayer などの関連ソース・アプリケーションによって実行されます。

注意：

- これらの表示オプションは、Oracle Portal レポートの *interMedia* コンテンツを含むすべての列に適用され、Oracle Portal のレポート・ウィザードの「表示オプション」タブをクリックして選択できます。
 - *interMedia* は様々なコンテンツ・タイプや書式をサポートしていますが、使用しているブラウザが最初から MIME タイプをサポートしているか、一般には Web 上でサポートされていないリッチ・コンテンツを表示するためのプラグインがインストールされている必要があります。たとえば、ほとんどのブラウザで最初から GIF や JPEG のイメージを表示できますが、TIFF イメージを表示する場合は、プラグインをインストールする必要があります。
-
-

7.2.3 レポートの作成

次の手順に従って、リッチ・コンテンツが含まれる Oracle Portal レポートを作成します。

1. 「Oracle Portal ナビゲータ」で、「アプリケーション」タブをクリックします。
2. 「名前」列に、権限が付与されているすべてのアプリケーションの名前が表示されます。
新しいコンポーネントの作成の対象となるアプリケーションの名前をクリックします。
3. 「新規作成」の横で、作成するコンポーネント・タイプをクリックします。この場合は、「レポート」リンクをクリックします。

図 7-1 ナビゲータに表示されるアプリケーション・コンポーネントのリンク

使用可能なアプリケーション・コンポーネントをブラウズし、許可された操作を実行します。

新規作成... [フォーム](#), [レポート](#), [チャート](#), [カレンダー](#), [動的ページ](#),
[XML Component](#), [階層](#), [メニュー](#), [URL](#), [フレーム](#),
[ドライバ](#), [リンク](#), [値リスト](#)

4. 作成するレポートのタイプとして、「例による問合せ (QBE) レポート」または「問合せウィザードからのレポート」のどちらかを選択します。
5. レポート・ウィザードの各ページで要求される情報を正しく入力します。
「次へ」をクリックして、次のウィザード・ページに進みます。
6. Oracle Portal のレポート・ウィザードを使用してレポートを作成するときは、デフォルトにより、*interMedia* リッチ・コンテンツがいくつかのアイコンによって表現されます。これらのアイコンをクリックすると、実際のコンテンツが表示されます。ただし、

コンテンツをレポート・ページに埋め込む場合は、「レポートに *interMedia* リッチ・コンテンツを埋め込む」チェック・ボックスを選択します。

このオプションは、手順 6 のレポート・ウィザードの「表示オプション」セクションの下にあります。

図 7-2 Oracle Portal のレポート・ウィザード - 共通オプション







共通オプション

ポートレットおよびフルWebページに表示されるQBEレポートの外観に影響する共通オプションを選択します。

- ☐ 総行数の表示 NULL値を置き換えて表示
- ☐ レポート出力の更新リンクを有効にする ☐ レポート出力の削除リンクを有効にする
- ☒ レポートに*interMedia*リッチ・コンテンツを埋め込む

7. 作業が終了したら、「完了」をクリックします。

図 7-3 *interMedia* リッチ・コンテンツが含まれる Oracle Portal レポートの例

Audio	Video	Id	Name	Photo	Photo.Height
		22	Bartman		71
		1	test		122

ユーザーがオーディオ、ビデオまたは写真のオブジェクトを表すアイコンをクリックすると、実際のリッチ・コンテンツが表示されます。

8. *interMedia* リッチ・コンテンツが含まれるレポートなどの Oracle Portal レポートを Oracle Portal で使用できるようにする（これによって、他のアプリケーション・プロバイダがそれを使用できるようになります）場合は、レポート・ウィザードを閉じた後に表示されるレポートの管理画面で「アクセス」タブに表示される「ポータルに公開」チェック・ボックスを選択します。このタブは、レポート・ウィザードで必要な情報をすべて入力した後に表示されます。

図 7-4 「ポータル・アクセス」タブ - 「ポータルに公開」

ポータル・アクセス

このコンポーネントのポートレット・バージョンをポータルで使用できるようにするには、次のオプションをチェックします。

☒ ポータルに公開

注意：「ポータルに公開」オプションが表示されない場合は、そのアプリケーションがプロバイダとして公開されているかどうかを確認してください。この設定は、アプリケーションの「アクセス」タブから行います。詳細は、「Oracle Portal オンライン・ヘルプ」の「Making an application a portlet provider」トピックを参照してください。

7.2.4 QBE レポート - パラメータ入力フォーム

レポートのパラメータ入力フォームを使用して QBE レポートを作成すると、様々なユーザーがその同じレポートを特定化できます。ただし、レポートが *interMedia* ベースの列を含む表に基づいている場合は、QBE レポートから表に対する挿入、更新、削除の各操作を実行することはできません。また、オブジェクト・タイプ属性もレポートに表示されません。パラメータ・フォームの *interMedia* ベース列に値を入力しようとすると、エラーが発生します。つまり、オブジェクト・タイプ列を使用してレポートを特定化することはできません。

7.3 Oracle Portal フォームのリッチ・コンテンツ

Oracle Portal を使用すると、Oracle Portal のフォームを介してイメージ、オーディオ、ビデオ・クリップをデスクトップからデータベースの任意の表に直接アップロードできます。

リッチ・コンテンツを *interMedia* ベースの列にアップロードすることがコンテンツを BLOB 列にアップロードすることに比べて有利な点は、データが自動的に解析されて、MIME タイプ、長さ、ユーザー定義のメタ・データなど、元のメディア・ファイルに含まれている可能性のある属性がいくつか取り出されることです。

たとえば、QuickTime ファイルに詳細な説明文が含まれていたり、RealVideo ファイルに著作権情報が含まれている可能性があり、索引付けや問合せのためにそれらを自動的に取り出し、*interMedia* オブジェクトに格納できます。

interMedia ベース列を含む表に基づいたフォームの作成方法は、他の表に基づいたフォームと同様です。データベースの表にアップロードされるコンテンツは、ダウンロードすること、前述の表に基づいたフォームを作成してポータル・フレームワークで使えるようにすることも簡単にできます。

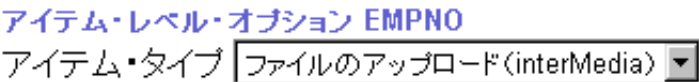
また、*interMedia* では、ストリーム・サーバーでデータベースのコンテンツにアクセスし、それを Thin クライアントに配布できるようにするためのプラグインや、リッチ・コンテンツのアップロードやダウンロードを簡単にするための Thick、Thin ユーティリティもいくつか提供します。

7.3.1 フォームの作成

次の手順に従って、リッチ・コンテンツが含まれる Oracle Portal フォームを作成します。

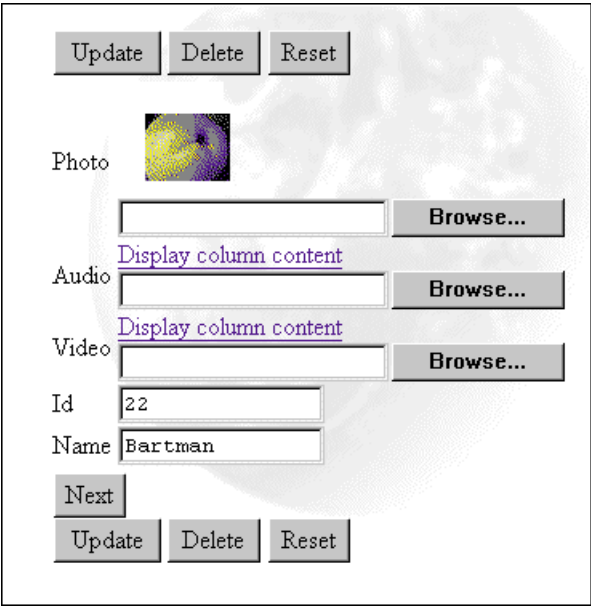
1. 「Oracle Portal ナビゲータ」で、「アプリケーション」タブをクリックします。
2. 「名前」列に、権限が付与されているすべてのアプリケーションの名前が表示されます。
新しいコンポーネントの作成の対象となるアプリケーションの名前をクリックします。
3. 「新規作成」の横で、作成するコンポーネント・タイプをクリックします。この場合は、「フォーム」リンクをクリックします。
4. 作成するフォームのタイプとして、「表またはビューをベースとするフォーム」または「マスター・ディテール・フォーム」のどちらかを選択します。
5. フォーム・ウィザードの各ページで要求される情報を正しく入力します。
「次へ」をクリックして、次のウィザード・ページに進みます。
6. ウィザードのステップ 4 で、左フレームから *interMedia* ベースとする列の名前をクリックします。
7. 右フレームの「アイテム・タイプ」リストで、「ファイルのアップロード (*interMedia*)」オプションを選択します。

図 7-5 Oracle Portal フォーム - アイテム・レベル・オプション



8. 作業が終了したら、「完了」をクリックします。

図 7-6 interMedia リッチ・コンテンツが含まれる Oracle Portal フォームの例



9. *interMedia* リッチ・コンテンツが含まれるフォームなどの Oracle Portal フォームを Oracle Portal で使用できるようにする（これによって、他のアプリケーション・プロバイダがそれを使用できるようになります）場合は、フォーム・ウィザードの「アクセス」タブに表示される「ポータルに公開」チェック・ボックスが選択されていることを確認します。このタブは、フォーム・ウィザードで必要な情報をすべて入力した後に表示されます。

注意：「ポータルに公開」オプションが表示されない場合は、そのアプリケーションがプロバイダとして公開されているかどうかを確認してください。この設定は、アプリケーションの「アクセス」タブから行います。詳細は、「Oracle Portal オンライン・ヘルプ」の「Making an application a portlet provider」トピックを参照してください。

関連項目： *interMedia* の詳細や、Oracle Portal を *interMedia* と併用する際に役立つスクリプトとヒントについては、Oracle Technology Network (URL: <http://technet.oracle.com/products/intermedia/>) を参照してください。(英文)

7.4 Oracle Portal ナビゲータを使用した表のブラウズ

「Oracle Portal ナビゲータ」を使用して、*interMedia* コンテンツが含まれる表をブラウズできます。ただし、「ナビゲータ」からリッチ・コンテンツをアップロードすることはできません。

次に、「ナビゲータ」を使用してリッチ・コンテンツが含まれる Oracle Portal のレポートやフォームにアクセスするときに検討すべき問題をいくつか記述します。

- *interMedia* リッチ・コンテンツが含まれる列に対して、「ナビゲータ」はリンク付きのアイコンを表示します。同じページにコンテンツが埋め込まれることはありません。
- *interMedia* ベースの列が含まれるレポートやフォームに対して「ナビゲータ」から挿入、更新、削除の各操作を実行することはできません。また、オブジェクト・タイプ属性も表示されません。
- オブジェクトの列からイメージをダウンロードしたり、表示することができます。
- *interMedia* ベース列のテキスト・フィールドにテキストを入力しないでください。
- 「ナビゲータ」や QBE フォームでは更新機能がサポートされていないので、かわりに Oracle Portal のフォームを使用します。

参照：「Oracle Portal オンライン・ヘルプ」の「Using the Navigator」および「Accessing the Navigator」の各トピック

7.5 現在わかっている問題

次に、Oracle Portal のレポートやフォームに含まれている *interMedia* ベース表のリッチ・コンテンツのサポートに関して、現在わかっている問題を記述します。

- ある特定のビューに基づいた Oracle Portal のレポートに、*interMedia* リッチ・コンテンツを表示できない場合があります。これは、暗黙的な ROWID 列が指定されていない複数表のビューに基づいたレポートで発生します。この注意は、最低 1 つの表に *interMedia* ベースの列が含まれている表のビューにのみ当てはまるもので、Oracle Portal のレポート全般にわたる制約ではありません。この場合は、次のエラー・メッセージが表示されます。

```
ORA-01445 cannot select ROWID from a join view without a key-preserved table.
```

原因：

SELECT 文が結合操作によって生成されたビューから ROWID を選択しようとした。このビューで選択される行は基になる物理レコードに対応していないため、返される ROWID が 1 つもありません。

対処方法：

レポート・ウィザードを使用し、関連した表を結合して、基になる表から直接メディア・コンテンツにアクセスしてみることができます。

- このような組込みは、テキスト列（通常は VARCHAR、CLOB、BLOB または空間データ）には適用できません。

関連項目： *interMedia* Text と *interMedia* Locator の詳細は、Oracle8i に付属の *interMedia* のドキュメント・セットを参照してください。

トラブルシューティング

この章では、**Oracle Portal** のインストールまたは使用時に発生する可能性があるエラーの解決方法の一覧を示します。

この章の内容：

- システム要件の検証
- 問題の原因となっているコンポーネントの識別
- 診断ツールを使用した接続問題のトラブルシューティング
- 構成制御ポイントとファイルの場所
- **Oracle Portal** のトラブルシューティング
 - インストールと構成上の問題
 - **Oracle Portal** へのログイン時に発生する問題
 - **Oracle Portal** の実行時に発生する問題
 - **Oracle Portal** の使用時に発生するその他の問題

8.1 システム要件の検証

Oracle Portal のインストール時に何らかの問題が発生した場合は、[第 1 章「要件の確認」](#)のシステム要件が満たされているかどうかを確認します。

8.1.1 インストール・ログの確認

インストール時に実行された操作と作成されたコンポーネントが記述されているインストール・セッション・ログを必ず確認します。

このログ・ファイルは次の場所にあります。

<ORACLE_HOME>/assistants/opca/install.log

注意： ログ・ファイルには、診断ツールから得られた結果も含まれます。

8.2 問題の原因となっているコンポーネントの識別

問題に対処するには、まずその問題の原因と思われる Oracle Portal のコンポーネントを識別します。問題が発生していると思われるコンポーネントを識別するためのクイック・チェックリストを次に示します。

- ご使用の Web ブラウザで、<http://host.domain:port> にアクセスしてみます。アクセスできない場合は、Oracle HTTP サーバー・リスナーに問題があることを示しています。詳細は、[A.1.1 項「Oracle HTTP サーバー構成ファイル \(httpd.conf\)」](#)を参照してください。
- Oracle HTTP サーバーが起動していることを確認します。詳細は、リスナー・ログ・ファイルを調べてください。特に、`httpd_error.log` ファイルをよく調べてください。サーバーのデフォルトのポートは 80 が一般的ですが、OS によりポート 7777 に設定される場合もあります。詳細は、Oracle9i Application Server のドキュメント・セットの一部として提供される『PL/SQL ゲートウェイの使用』を参照してください。
- ご使用の Web ブラウザで、<http://host.domain:port/pls/admin/> にアクセスしてみます。アクセスできない場合は、PL/SQL ゲートウェイ (Apache mod_plsql) またはその構成に問題があることを示しています。mod_plsql の DAD 設定を調べて、Oracle Portal DAD と Login Server (SSO) DAD の両方のユーザー名、パスワードおよび接続文字列を確認します。[A.1.3 項「Database Access Descriptor \(DAD\) 設定ファイル \(wdbsvr.app\)」](#)を参照してください。
- ご使用の Web ブラウザで、<http://host.domain:port/servlet/IsItWorking> にアクセスします。アクセスできない場合は、Apache JServ に問題があることを示しています。内部サーバーのエラーのほとんどは、ポートの競合が原因で Apache JServ を起動できないことに関連しています。詳細は、Apache JServ のログ・ファイルを調べてください。これらのログ・ファイルは、<ORACLE_HOME>/Apache/Jserv/logs にあります。

8.2.1 Apache ログ・ファイルの場所

Apache ログ・ファイルは、次のディレクトリに入っています。

表 8-1 Apache ログ・ファイルの場所

Apache リスナー・ログ・ファイル	<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/logs
Apache JServ ログ・ファイル	<ORACLE_HOME>/Apache/Jserv/logs

ここでの <ORACLE_HOME> は、Oracle9i Application Server の場所を表します。

2.4 項「ブラウザでの Oracle Portal へのアクセス」の説明に従って、Oracle Portal にアクセスしてみます。依然として Oracle Portal に接続できず、そのインストールのみは完了している場合は、診断ツールを使用するか、8.5 項「Oracle Portal のトラブルシューティング」を参照してください。

8.3 診断ツールを使用した接続問題のトラブルシューティング

診断ツールを使用すると、単独のインストールに関する Oracle Portal の構成上の問題を見つけ出すことができます。このため、複数のノードを備えた Oracle Portal の分散環境では、このツールは役に立ちません。

Portal の接続問題の多くは、ssodatan スクリプトの実行時に設定情報が Login Server に渡されなかったことが原因で発生します。

このツールを使用するには、次の条件が満たされていることを確認します。

- Oracle Portal のインストールが正常に完了し、TCP/IP や SQL*Net などの基本的なネットワーク接続が正しく設定されています。SQL*Plus から Oracle Portal スキーマへの接続テストを実施します。診断ツールを実行する前に、接続障害をすべて修復します。
- Oracle Portal スキーマと Login Server スキーマは、同じデータベース・インスタンスまたはマシンに入っています。
- Oracle Portal は HTTP プロトコルを使用しています。
- Oracle Portal スキーマの所有者は、Oracle Portal がインストールされている場所に接続できます。その場所は、portal30/admin/plsql（バージョン 3.0.6 以降）です。この所有者は、診断ツールが入っているディレクトリのファイル作成権限も持っている必要があります。

8.3.1 診断ツールによって検出される問題

Oracle Portal の接続問題の多くは、Login Server の間違った設定が原因で発生します。

Oracle Portal のインストール時に、ssodatan スクリプトは、Oracle Portal がインストールされているノードを適切な Login Server に関連付け、有効な表を生成する役割を持っています。ただし、このスクリプトが失敗した場合は、診断ツールを使用して Oracle Portal スキーマと Login Server スキーマの両方に入っている設定情報を読み取ることができます。診断レポートには、これらの表に不足している情報がすべて表示されます。さらに、このツールでは Login Server からパートナ・アプリケーションの設定情報も読み取ります。

パートナの有効な設定情報とパートナ・アプリケーションの設定情報の両方に格納されている URL については、次のチェックが行われます。

- 正しいプロトコルが設定されていることを確認します。現時点では、この診断ツールは HTTP でしか動作しません。
- Oracle Portal との接続を確立して、ホスト名とポート番号を確認します。
- PL/SQL ゲートウェイ (modplsqli) が実行していることを確認します。
- JServ が機能していることを確認します。
- Database Access Descriptor (DAD) 情報を読み取り、この Oracle Portal のコードによって使用されたスキーマ名、接続文字列および認証モードを取り出します。DAD 情報の読み取り時に発生した問題はすべて報告されます。
- 格納された作業環境から DAD 名を読み取り、それを Oracle Portal URL から取得した DAD 名と比較して、それらの違いをすべて報告します。

8.3.2 診断ツールによって検出されない問題

次に、診断ツールによって検出されない問題の一覧を示します。

- インストール上の問題。表、索引、パッケージ、Java クラスといった各種データベース・オブジェクトのロード時に発生する問題など。
- データベースの問題。
- Oracle HTTP サーバーの構成上の問題。
- Oracle Portal と Login Server が異なるデータベース・インスタンスにインストールされる場合に発生する問題。
- HTTPS を使用する Oracle Portal のインストール時に発生する問題。

8.3.3 診断ツールの実行

Oracle Portal 3.0.8.5.3 以降では、診断ツールを実行していると、Java クラス `Diagnose.class` と PL/SQL パッケージ `wwsec_diagnostics` がデータベースにロードされます。

それ以前のバージョンの Oracle Portal を実行している場合は、Oracle Technology Network から Java アーカイブ・ファイル `diag.jar` を Oracle Portal のインストール場所 (`portal30/admin/plsql`) にダウンロードし、次のコマンドを実行してファイルを展開します (WinZip を使用して展開することもできます)。

```
jar -xvf diag.jar
```

`wwc` ディレクトリが存在しない場合は、作成されます。

注意： UNIX ユーザーは、`chmod +x diag.csh` を実行してから、診断ツールを実行してください。

コマンドラインからこのツールを実行します。

UNIX: `diag.csh`

Windows NT/2000: `diag.cmd`

例

```
diag.csh -s portal30_schema -p portal30_schema_password -c connect_string
```

各項目の説明

表 8-2 診断ツールの diag のパラメータ

パラメータ	説明
<code>portal30_schema</code>	Oracle Portal 製品が入っているデータベース・スキーマの名前。デフォルトのスキーマ名は <code>portal30</code> です。
<code>portal30_schema_password</code>	Oracle Portal スキーマのパスワード。
<code>connect_string</code>	Oracle Portal がインストールされているデータベースの接続文字列。デフォルト値は <code>orcl</code> です。

診断ツールでは、これらのテストに基づいてユーザーに適切なアドバイスも行います。

8.3.4 診断レポートの例

診断コマンドが実行されると、診断レポート `diag.txt` が作成されます。次に、このレポートの出力例を示します。

```
Diagnostics Report v 1.0: Oracle Portal v 3.0.8.6.5  
As of 14-Dec-2000 15:33:01 Schema Name: SM1 SSO Schema Name: sm1_SSO
```

```
SM1.wwsec_enabler_config_info$  
Login Server URL : http://host.domain.com:3000/pls/sm1_sso/sm1_SSO.wwsso_app_  
admin.ls_login  
DAD : sm1_sso  
Host connection : successful.  
mod_plsql : working.  
JServ : working.  
Schema name : sm1_sso  
Connect string : orcl  
Authentication mode : Single Sign-On
```

```
sm1_sso.wwsec_enabler_config_info$  
Login Server URL : http://host.domain.com:3000/pls/sm1_sso/sm1_SSO.wwsso_app_  
admin.ls_login  
DAD : sm1_sso  
Host connection : successful.  
mod_plsql : working.  
JServ : working.  
Schema name : sm1_sso  
Connect string : orcl  
Authentication mode : Single Sign-On
```

```
*****
```

```
Partner Application Information
```

```
**** Oracle Portal (sm1) ****  
Home URL : http://host.domain.com:3000/pls/sm1/sm1.home  
Success URL : http://host.domain.com:3000/pls/sm1/sm1.wwsec_app_priv.process_signon  
DAD : sm1  
Host connection : successful.  
mod_plsql : working.  
JServ : working.  
Schema name : sm1  
Connect string : orcl  
Authentication mode : Single Sign-On
```

```

**** The Login Server (sm1_SSO) ****
Home URL : http://host.domain.com:3000/pls/sm1_sso/sm1_SSO.home
Success URL : http://host.domain.com:3000/pls/sm1_sso/sm1_SSO.wvssso_home.process_
signon
DAD : sm1_sso
Host connection : successful.
mod_plsql : working.
JServ : working.
Schema name : sm1_sso
Connect string : orcl
Authentication mode : Single Sign-On

*****

Diagnostics completed successfully!

```

8.4 構成制御ポイントとファイルの場所

インストールを計画しているときや Oracle Portal の構成上の問題に対処しているときは、各種の構成制御ポイントがあることを認識しておいてください。これについては、[付録 A「Oracle9i Application Server 構成ファイル」](#)に説明されています。便宜上、次の表を示します。

構成ファイル/表	場所または説明
Oracle HTTP サーバー	<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/conf/httpd.conf
Apache JServ	<ORACLE_HOME>/Apache/Jserv/etc/zone.properties
PL/SQL ゲートウェイ	<ORACLE_HOME>/Apache/modplsql/cfg/wdbsvr.app
データベース接続	<ORACLE_HOME>/network/admin/tnsnames.ora
Login Server の有効な表	Oracle Portal と Login Server の設定表 WWSEC_ENABLER_CONFIG_INFO\$
Login Server の設定表	Login Server のパートナ・アプリケーションの設定表 WVSSO_PAPP_CONFIGURATION_INFO\$
ローカルの HOSTS ファイル	このファイルによって、IP アドレスに対応する IP 名を解決します。Windows NT では、このファイルは ¥Winnt¥system32¥drivers¥etc¥hosts にあります。 UNIX では、/etc/hosts にあります。
winstall、linstall、 ssodatan、ssodatax の各 スクリプト	<ORACLE_HOME>/portal30/admin/plsql/ 詳細は、 付録 B「Oracle Portal のインストールと設定のスクリプト」 を参照してください。

ここでの <ORACLE_HOME> は、Oracle9i Application Server がインストールされている場所を表します。

8.4.1 Oracle Portal インストール・ディレクトリ名の変更

Oracle Portal のバージョンに応じて、インストール・ファイルのデフォルトの場所は次のように変わります。

表 8-3 Oracle Portal のインストール・ディレクトリ構造

Oracle Portal 3.0.6	<ORACLE_HOME>/webdb30
Oracle Portal 3.0.7 以降	<ORACLE_HOME>/portal30

8.5 Oracle Portal のトラブルシューティング

次に、構成上のエラーと問題のリストを示します。

インストールと構成上の問題

表 8-4 インストールと構成上の問題のリスト

問題またはエラー
1. 問題 : Oracle Portal Configuration Assistant によってエラーが 1 つ以上表示され、SYS パスワードとデータベース接続情報を入力するよう指示されます。
2. エラー : データベースで割り当てられている SHARED_POOL_SIZE パラメータが Oracle Portal のインストールに不足しています。
3. エラー : データベースで割り当てられている JAVA_POOL_SIZE パラメータが Oracle Portal のインストールに不足しています。
4. エラー : Oracle Portal をインストールするには、選択したデフォルト表領域に 150 MB の空き領域が必要です。インストールを進めるには、表領域のサイズを増やしてください。
5. 問題 : init.ora の設定を訂正した後も、Oracle Portal Configuration Assistant によって引き続き前述のエラーが 1 つ以上表示されています。
6. 問題 : Oracle Portal Configuration Assistant で、Oracle Portal スキーマまたは Login Server スキーマの「一時表領域」ドロップダウン・リストが選択できません。
7. 問題 : Oracle Portal の設定が完了した後で、Oracle Portal Configuration Assistant によって、次のエラーが 1 つ以上表示されています。
8. エラー : 設定表「WWSEC_ENABLER_CONFIG_INFO\$」にエントリが見つかりません。
9. エラー : Oracle Portal スキーマ・ユーザーは作成されませんでした。

表 8-4 インストールと構成上の問題のリスト（続き）

問題またはエラー
10. エラー : Login Server ユーザーは作成されませんでした。
11. エラー : Oracle Portal スキーマに無効なパッケージがあります。

Oracle Portal へのログイン時に発生する問題

表 8-5 Oracle Portal へのログイン時に発生する問題のリスト

問題またはエラー
1. エラー : Login Server スキーマに無効なパッケージがあります。
2. エラー : Oracle Portal に接続しようとするときに、「Database Login Failure」が表示されます。
3. エラー : 作業環境パスが見つかりませんでした。
4. 問題 : Oracle Portal にログインしようとするときに、エラー「設定情報が有効な設定表に格納されていないため、ログインできません。(WWC-41439)」が表示されます。
5. 問題 : Oracle Portal に接続するか、ログインしようとするときに、エラー「Proxy log on failed」とメッセージ「TNS could not resolve service name」が表示されます。
6. 問題 : エラー「HTTP 400 - Bad Request /Malformed Host Header」が表示されました。
7. 問題 : プロキシ設定が間違っているために、Oracle Portal にログインできません。

Oracle Portal の実行時に発生する問題

表 8-6 Oracle Portal の実行時に発生する問題のリスト

問題またはエラー
1. 問題 : Windows NT/2000 で Oracle Portal を実行しているときに、データベースまたは TNS リスナー（あるいはその両方）がクラッシュします。
2. 問題 : Apache リスナーが頻繁にクラッシュします。
3. 問題 : 適切な位置に描画されている URL アイテム・リンクをクリックするときに、エラー「utl_http のコールに失敗しました」が表示されます。
4. 問題 : 1 つまたは複数のポートレットでときどきエラー「Timeout for content={0}」が表示されます。
5. 問題 : Oracle Portal の実行時に、エラー「The listener returned the following message: 503 Service Temporarily Unavailable」が断続的に表示されます。

表 8-6 Oracle Portal の実行時に発生する問題のリスト（続き）

問題またはエラー
6. 問題 : Oracle Portal のページにアクセスしようとするときに、一貫してエラー「Internal Server Error」が表示されます。
7. 問題 : Oracle Portal のページにアクセスしようとするときに、断続的にエラー「Internal Server Error」が表示されます。
8. 問題 : Oracle Portal にアクセスしようとするときに、エラー「400 bad request」が表示されるか、Web ブラウザが停止します。
9. エラー : コンテンツへの要求がタイムアウトしました。または、エラーが発生しました。

Oracle Portal の使用時に発生するその他の問題

表 8-7 Oracle Portal の使用時に発生するその他の問題のリスト

問題またはエラー
1. 問題 : interMedia Text 索引が作成できません。
2. 問題 : Apache の起動時にエラー「The procedure entry point snlpcgtsrvbynm could not be located in the dynamic link library oranl8.dll」が発生します。
3. エラー : missing string (login link text) language(e) domain(wwc) sub_domain(sec) Missing string(pages) language(e) domain(wwc) sub_domain(pob).
4. エラー : PLS-00306: wrong number or types of arguments.

8.5.1 インストールと構成上の問題

問題: Oracle Portal Configuration Assistant によってエラーが 1 つ以上表示され、SYS パスワードとデータベース接続情報を入力するよう指示されます。

エラー	Java オプションがデータベースで有効になっていません。Oracle Portal をインストールするには、データベースの Java オプションが有効になっている必要があります。
原因	<p>Oracle Portal では、Oracle8i の JVM (Java Virtual Machine) データベース・オプションが、Oracle Portal をインストールしているデータベースにインストールされ、使用可能になっている必要があります。このエラーは、インストーラが Oracle8i JVM を見つけられないときに表示されます。インストーラでは、次の問合せを使用して、Oracle8i JVM オプションが存在するかどうかをチェックします。</p> <pre>select count(object_name) from all_objects where object_type like 'JAVA%' and status='VALID'</pre>
解決方法	Oracle8i Database Configuration Assistant を実行して Oracle8i JVM オプションをインストールするか、別の Oracle8i データベースを指定して Oracle Portal をインストールします。

エラー: データベースで割り当てられている SHARED_POOL_SIZE パラメータが Oracle Portal のインストールに不足しています。

原因	<p>Oracle Portal では、SHARED_POOL_SIZE パラメータが 31457280 よりも大きい必要があります。インストーラによって、そのデータベースの SHARED_POOL_SIZE パラメータが 31457280 未満の値に設定されていることが判明しました。インストーラでは、次の問合せを使用して、この要件をチェックします。</p> <pre>select value from v\$parameter where name like 'shared_pool_size'</pre>
解決方法	使用しているデータベースの init.ora ファイルで SHARED_POOL_SIZE の割当てを増やして、インストール処理を継続します。データベースを一度シャットダウンしてから再起動して、変更内容を有効にします。

エラー : データベースで割り当てられている JAVA_POOL_SIZE パラメータが Oracle Portal のインストールに不足しています。

原因	Oracle Portal では、JAVA_POOL_SIZE パラメータが 20971520 よりも大きい必要があります。インストーラによって、データベースの JAVA_POOL_SIZE パラメータが 20971520 未満の値に設定されていることが判明しました。インストーラでは、次の問合せを使用して、この要件をチェックします。 <pre>select value from v\$parameter where name like 'java_pool_size'</pre>
解決方法	使用しているデータベースの init.ora ファイルで JAVA_POOL_SIZE の割当てを増やして、インストール処理を継続します。 JAVA_POOL_SIZE の設定は、20971520 よりも大きい値にする必要があります。データベースを一度シャットダウンしてから再起動して、変更内容を有効にします。

エラー : Oracle Portal をインストールするには、選択したデフォルト表領域に 150 MB の空き領域が必要です。インストールを進めるには、表領域のサイズを増やしてください。

原因	Oracle Portal では、Oracle Portal スキーマに指定されている DEFAULT 表領域に最低でも 150MB の空き領域が確保されている必要があります。Configuration Assistant によって、選択された DEFAULT 表領域には利用可能な空き領域が 150MB 未満しか確保されていないことがわかりました。インストーラでは、次の問合せを使用して、この要件をチェックします。 <pre>select sum(bytes)/1024 from DBA_FREE_SPACE where tablespace_name like '"' + <UserSelectedTablespace> + '"'</pre>
解決方法	Oracle Portal スキーマに別の DEFAULT 表領域を指定するか、選択した表領域の空き容量を増加します。 これを行うには、alter database datafile コマンドを使用します。表領域のサイズを変更するときは、autoextend オプションを設定する必要があります。 詳細は、Oracle データベースのマニュアルを参照してください。

ヒント

Windows NT/2000 では、Oracle8i データベースと Oracle9i Application Server のデフォルトのインストールの際に、次の方法で表領域のサイズを変更して、Oracle Portal のインストールにかかる時間を短縮することができます。

- 1) デフォルトの Oracle8i データベースをインストールします。
 - a) その表領域のサイズを測定します。
- 2) デフォルトの Oracle9i Application Server (HTTP 専用のインストール・オプション) をインストールします。
 - a) その表領域のサイズを測定します。
- 3) 2a から 1a を引きます。

注意 : datafile の変更のみを使用してください。表領域や索引を変更しないでください。

```
alter database datafile  
'C:\oracle\oradata\orcl\system01.dbf' resize  
510M;  
  
alter database datafile  
'C:\oracle\oradata\orcl\users01.dbf' resize 140M;
```

問題 : init.ora の設定を訂正した後も、Oracle Portal Configuration Assistant によって引き続き前述のエラーが 1 つ以上表示されています。

原因

Configuration Assistant によって使用される問合せに基づいて判断すると、これらの設定は依然として正しくないようです。

解決方法

省略形 (60000000 の省略形として 60M を使用するなど) を使用せずに有効なバイト数で init.ora ファイルに新しい値が入力しているかどうかを確認します。Configuration Assistant ではそれらの設定を数値として照合するため、省略形を使用しないですべての数字を入力する必要があります。また、init.ora の設定を変更したときは、必ずそのデータベースを一度シャットダウンしてから再起動する必要があります。

問題 : Oracle Portal Configuration Assistant で、Oracle Portal スキーマまたは Login Server スキーマの「一時表領域」ドロップダウン・リストが選択できません。

原因	Oracle Portal のバージョン 3.0.6 では、Configuration Assistant が「TEMPORARY」タイプの表領域を使用して「一時表領域」リストを生成します。使用しているデータベースにこれらの表領域がまったくない場合、このドロップダウン・リストから選択できません。 バージョン 3.0.7 以降では、この問題は修正されました。
解決方法	この問題を修正してから、インストールを進める必要があります。「TEMPORARY」タイプの表領域を 1 つ以上そのデータベースに定義します。

問題 : Oracle Portal の設定が完了した後で、Oracle Portal Configuration Assistant によって、次のエラーが 1 つ以上表示されています。

エラー	SSOHash クラスがこのデータベースにロードされていません。
原因	設定が完了した後で、Oracle Portal Configuration Assistant によってこのクラスが見つかりませんでした。シングル・サインオンを有効にするために、Oracle Portal では設定プロセス時に SSOHash Java クラスをインストールします。このクラスは、Oracle Portal へのログインに必要です。
解決方法	Oracle Portal のインストール / 設定ログ・ファイルをチェックして、他にエラーがないかどうか調べます。ログ・ファイルで他にもエラーが見つかった場合は、データベースの設定方法にかなり根本的な問題があることを示しています。 他にエラーがない場合は、手動で SSOHash クラスをインストールします。<ORACLE_HOME>/portal30/admin/plsql/wwc ディレクトリから次のコマンドを入力してください。 loadjava -resolve -user <PORTAL_SCHEMA> /<PORTAL_SCHEMA>@<CONNECT> SSOHash.class ここでの <PORTAL_SCHEMA> は Oracle Portal がインストールされているデータベース・スキーマ名であり、<CONNECT> は使用しているデータベースの TNS 接続文字列です。

エラー : 設定表「WWSEC_ENABLER_CONFIG_INFO\$」にエントリが見つかりません。

原因	設定が完了した後で、Oracle Portal Configuration Assistant によって、WWSEC_ENABLER_CONFIG_INFO\$ 表のエントリがまったく検出されませんでした。Oracle Portal では、Login Server にアクセスするときに WWSEC_ENABLER_CONFIG_INFO\$ 表を使用します。Oracle Portal を正しく機能させるためには、この表にエントリが 1 つ以上入っている必要があります。
解決方法	<p>Oracle Portal のインストール / 設定ログ・ファイルをチェックして、他にエラーがないかどうか調べます。ログ・ファイルで他にもエラーが見つかった場合は、データベースの設定方法にかなり根本的な問題があることを示しています。</p> <p>他にエラーがない場合は、ssodatan スクリプトを実行してこの問題を修正します。B.4 項「ssodatan スクリプトを使用した新しい Oracle Portal インスタンスと Login Server の設定」を参照してください。</p>

エラー : Oracle Portal スキーマ・ユーザーは作成されませんでした。

原因	設定が完了した後で、Oracle Portal Configuration Assistant によって Portal スキーマがデータベース内に見つかりませんでした。
解決方法	<p>Oracle Portal のインストール / 設定ログ・ファイルをチェックして、他にエラーがないかどうか調べます。ログ・ファイルで他にもエラーが見つかった場合は、データベースの設定方法にかなり根本的な問題があることを示しています。このログ・ファイルは、<ORACLE_HOME>/assistants/opca/install.log にあります。Portal スキーマが作成されないと、設定プロセスで膨大なエラーが発生します。Portal スキーマが作成されない理由は、ログ・ファイルの先頭付近に表示されます。問題が明らかになり、修正した後、Oracle Portal を一度削除し、Configuration Assistant を再実行します。</p>

エラー : Login Server ユーザーは作成されませんでした。

原因	設定が完了した後で、Oracle Portal Configuration Assistant によって Login Server スキーマがデータベース内に見つかりませんでした。
解決方法	<p>Oracle Portal のインストール / 設定ログ・ファイルをチェックして、他にエラーがないかどうか調べます。ログ・ファイルで他にもエラーが見つかった場合は、データベースの設定方法にかなり根本的な問題があることを示しています。</p> <p>Login Server スキーマが作成されないと、設定プロセスでかなりの多くのエラーが発生し、通常それらのエラーはログ・ファイルの先頭に表示されます。</p> <p>問題が明らかになり、修正した後、Oracle Portal を一度削除し、Configuration Assistant を再実行します。2.7 項「Oracle Portal の削除」を参照してください。</p>

エラー : Oracle Portal スキーマに無効なパッケージがあります。

原因	<p>Oracle Portal の設定時にエラーが 1 つ以上発生したため、一部の PL/SQL パッケージが無効になりました。一部の Oracle Portal データベース・オブジェクトの作成に失敗すると、パッケージが無効になることがあります。</p> <p>また、必須依存ツールがデータベースにインストールされない場合にも、パッケージが無効になることがあります。必須依存ツールには、PL/SQL Web Toolkit (OWA パッケージ) や、SYS スキーマで利用できる標準の PL/SQL パッケージなどがあります。</p>
解決方法	<p>Oracle Portal のインストール / 設定ログ・ファイルをチェックして、他にエラーがないかどうか調べます。ログ・ファイルで他にもエラーが見つかった場合は、データベースの設定方法にかなり根本的な問題があることを示しています。</p> <p>ご使用のバージョンの Oracle Portal に付属の PL/SQL Web Toolkit がインストールされていることを確認します。Oracle Portal では PL/SQL Web Toolkit を多用するため、最新のバージョンをインストールしておく必要があります。</p>

エラー : Login Server スキーマに無効なパッケージがあります。

原因

Oracle Portal の設定時にエラーが 1 つ以上発生したため、一部の PL/SQL パッケージが無効になりました。一部の Login Server オブジェクトの作成に失敗すると、パッケージが無効になる場合があります。

また、必須依存ツールがデータベースにインストールされない場合にも、パッケージが無効になることがあります。必須依存ツールには、PL/SQL Web Toolkit (OWA パッケージ) や、SYS スキーマで利用できる標準の PL/SQL パッケージなどがあります。

解決方法

Oracle Portal のインストール / 設定ログ・ファイルをチェックして、他にエラーがないかどうか調べます。ログ・ファイルで他にもエラーが見つかった場合は、データベースの設定方法にかなり根本的な問題があることを示しています。

ご使用のバージョンの Oracle Portal に付属の PL/SQL Web Toolkit がインストールされていることを確認します。Oracle Portal では PL/SQL Web Toolkit を多用するため、最新のバージョンをインストールしておくことが重要です。

エラー : Oracle Portal に接続しようとするときに、「Database Login Failure」が表示されます。

原因

Oracle Portal の Database Access Descriptor (DAD) が間違っているか、DAD に使用されている TNS 名エントリが、Oracle9i Application Server ファイル (Oracle Portal を含む) が入っている ORACLE_HOME 位置にある tnsnames.ora ファイルに定義されていない可能性があります。また、インストール / 設定プロセスによってエラーが発生した可能性もあります。

解決方法

次の URL を入力して、DAD 構成を検証します。

```
http://host.domain:port/pls/admin_/gateway.htm
```

詳細は、Oracle9i Application Server のドキュメント・セットの一部として提供される『PL/SQL ゲートウェイの使用』を参照してください。

データベースの接続文字列情報が正しいことと、SQL*Plus を介して接続するときも同様であることを確認します。

Oracle ホームが複数ある場合は、適切な接続文字列が <ORACLE_HOME>/network/admin/tnsnames.ora に追加されていることを確認します。よくわからない場合は、その接続文字列をすべての Oracle ホームの tnsnames.ora ファイルに追加します。

また、UNIX の場合は、次のファイルをチェックして、適切な ORACLE_HOME が使用されているかどうかを確認します。

```
<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/bin/apachectl
```

Oracle Portal のインストール / 設定ログ・ファイルをチェックして、他にエラーがないかどうか調べます。ログ・ファイルで他にもエラーが見つかった場合は、データベースの設定方法にかなり根本的な問題があることを示しています。

エラー：作業環境パスが見つかりませんでした。

原因

作業環境パスは、シード・データの一部です。このエラーは、1 つ以上のポータル・オブジェクトがインストールされなかったなど、インストールが不完全だったことを示します。

データベースで割り当てられている SHARED_POOL_SIZE パラメータが、Oracle9iAS Portal に十分ではありません。

Oracle Portal では、SHARED_POOL_SIZE パラメータが 15728640 よりも大きい必要があります。インストーラによって、そのデータベースの SHARED_POOL_SIZE パラメータが 15728640 未満の値に設定されていることが判明しました。

次の問合せを発行してサイズを確認できます。

```
select value from v$parameter where name like  
'shared_pool_size'
```


解決方法

Oracle8i データベースのホームの場所から、init.ora を編集します。SHARED_POOL_SIZE の割当てを増やして、インストール処理を継続します。データベースを一度シャットダウンしてから再起動して、この値を有効にします。

SHARED_POOL_SIZE には必ず、数字の全桁（たとえば、1000000000）指定するようにし、省略形（1000M）は使用しないでください。

8.5.2 Oracle Portal へのログイン時に発生する問題

問題 : Oracle Portal にログインしようとするときに、エラー「設定情報が有効な設定表に格納されていないため、ログインできません。(WWC-41439)」が表示されます。

このエラー・メッセージには、考えられる原因がいくつかあります。次に、各原因とその解決方法の一覧を示します。

原因 1

httpd.conf ファイルに指定されているホスト名が大文字で入力されました。このため、SSO サブシステムでは有効な設定表から一致するエントリを見つけることができません。

解決方法

ホスト名がすべて小文字になるように、httpd.conf ファイルの「servername」設定を修正します。

原因 2

SSOHash クラスがこのデータベースにロードされていません。これをチェックするには、SQL Plus で次の問合せを実行します。

```
select * from all_objects where object_type is like 'JAVA CLASS'
```

解決方法

次のコマンドを使用して、手動で SSOHash クラスをロードします。

```
loadjava -resolve -user <PORTAL_SCHEMA> /<PORTAL_SCHEMA>@<CONNECT> SSOHash.class
```

ここでの <PORTAL_SCHEMA> は Oracle Portal がインストールされているデータベース・スキーマ名であり、<CONNECT> は使用しているデータベースの TNS 接続文字列です。

原因 3

使用しているデータベースの JAVA_POOL_SIZE パラメータの値が小さすぎます。Oracle Portal では、JAVA_POOL_SIZE は 20971520 よりも大きい値に設定されている必要があります。

解決方法	<p>JAVA_POOL_SIZE の割当てを増やして、インストール処理を継続します。JAVA_POOL_SIZE 値は、使用しているデータベースの init.ora ファイルで設定します。</p> <p>また、init.ora の設定を変更したときは、必ずデータベースを一度シャットダウンしてから再起動します。</p>
原因 4	Oracle Portal を手動でインストールまたは設定している場合は、ssodatan スクリプトの実行時に URL の入力ミスを行っている可能性があります。
解決方法	正しいデータを指定して、ssodatan スクリプトを再実行します。 B.5 項「ssodatan スクリプトを使用した既存の Portal インスタンスの更新」 を参照してください。
原因 5	Apache 構成に別名が定義されているために、Apache が host.domain.com をホストのみに変換します。この場合、ログイン・リンクには host:port のみが表示されます（ドメインが抜けています）。
解決方法	Apache 構成ファイル http.conf から、このような別名をすべて削除します。
原因 6	デフォルトのドメインが Apache 構成に設定されていません。この状態が発生すると、ログイン・リンクにはホスト名のみが表示され、その中にドメインは含まれません。
解決方法	Apache 構成ファイル http.conf に、デフォルトのドメインを定義します。
原因 7	<p>インストール時、設定時、または ssodatan スクリプトの実行時に、デフォルトの HTTP ポート（ポート 80）が指定されました。</p> <p>Apache と一部のブラウザでは :80 が削除されます。</p>
解決方法	<p>ポート :80 を指定しないで ssodatan スクリプトを実行します。</p> <p>また、ブラウザを介して Oracle Portal にアクセスするときに、このポートを指定しないようにします。B.4 項「ssodatan スクリプトを使用した新しい Oracle Portal インスタンスと Login Server の設定」および 2.4 項「ブラウザでの Oracle Portal へのアクセス」を参照してください。</p>
原因 8	Oracle Portal と Apache のホスト名の太文字と小文字が一致していません。
解決方法	<p>次の場所でホスト名をすべて小文字に変更します。</p> <p>Oracle9iAS_Home/Apache/Apache/conf/httpd.conf</p>

問題 : Oracle Portal に接続するか、ログインしようとするときに、エラー「Proxy log on failed」とメッセージ「TNS could not resolve service name」が表示されます。

原因	これは、Net8 の構成上の問題が原因となっている可能性があります。
解決方法	このリスナーが起動された ORACLE_HOME が、Oracle9i Application Server tnsnames.ora ファイルの入っているホームと同じであることを確認します。その tnsnames.ora ファイルが有効であることを確認し、DAD に関連付けられたサービス名が含まれていることを確認します。Oracle8i データベースのドキュメントのライブラリに付いている Net8 のマニュアルを参照してください。

問題 : エラー「HTTP 400 - Bad Request /Malformed Host Header」が表示されました。

原因	この状況は、Apache が実行しているマシンのホスト名にアンダースコア '_' が含まれているときに生じる可能性があります。URL ではアンダースコアは無効です。
解決方法	ホストの名前からアンダースコアをすべて削除するか、IP アドレスによってマシンにアクセスします。

問題：プロキシ設定が間違っているために、Oracle Portal にログインできません。

原因

プロキシ設定が間違っていたり、無効である場合、Oracle Portal ではログインを処理できません。

解決方法

SQL*Plus を使用して、Oracle Portal のスキーマ所有者（デフォルトでは PORTAL30）としてログインし、次の文を発行します。

```
begin
  wwpre_api_value.set_value_as_varchar2(
    p_path=> 'oracle.portal.proxy',
    p_name=> 'name',
    p_level_type =>wwpre_api_value.SYSTEM_LEVEL_TYPE,
    p_level_name => null,
    p_value => NULL);
  wwpre_api_value.set_value_as_number(
    p_path=> 'oracle.portal.proxy',
    p_name=> 'port',
    p_level_type =>
      wwpre_api_value.SYSTEM_LEVEL_TYPE,
    p_level_name => null,
    p_value=> NULL);
end;
/
```

これらの文の発行後、プロキシ設定の値は NULL となります。

8.5.3 Oracle Portal の実行時に発生する問題

問題 : Windows NT/2000 で Oracle Portal を実行しているときに、データベースまたは TNS リスナー（あるいはその両方）がクラッシュします。

原因	Windows NT/2000 で Oracle 8.1.6 の初期のバージョンに添付されている UTL_HTTP パッケージを実行していると推測されます。
解決方法	<p>次の場所の Metalink から Oracle8i データベース 8.1.6.2 パッチをダウンロードして、インストールします。</p> <p>http://metalink.oracle.com</p> <p>パッチをクリックしてから、「product: Oracle Server - Enterprise Edition」、「platform: MS Windows NT/2000」を選択します。Metalink を使用できるように登録しておく必要があります。</p>

問題 : Apache リスナーが頻繁にクラッシュします。

原因	Apache の安定性に関する最も一般的な問題は、Oracle Portal が 8.1.6 データベースに対して新しい 8.1.7 クライアント・ライブラリを使用していることがその根底にあります。データベース・チームは、mod_plsql の Windows NT/2000 版のようなスレッド化されたクライアント・アプリケーションで、あるプロトコル問題が発生することを発見しました。mod_plsql と Apache はプロセス・ベースであるため、UNIX ではこの問題は発生しません。Windows NT/2000 または UNIX のどちらかのデータベースに対して Windows NT/2000 の中間層を実行している場合に、このパッチを適用する必要があります。
解決方法	<p>次の場所の Metalink から Oracle8i データベース 8.1.6.2 パッチをダウンロードして、インストールします。</p> <p>http://metalink.oracle.com</p> <p>パッチをクリックしてから、「product: Oracle Server - Enterprise Edition」、「platform: MS Windows NT」を選択します。Metalink を使用できるように登録しておく必要があります。</p>

問題：適切な位置に描画されている URL アイテム・リンクをクリックするときに、エラー「utl_http のコールに失敗しました」が表示されます。

原因	ファイアウォール内で実行している場合は、不正なプロキシ値が指定されている可能性があります。
解決方法	<p>Oracle Portal の「グローバル設定」ページでプロキシが正しく設定されていることを確認します。このページには、「管理」タブの「サービス」ポートレットからアクセスできます。Portal ホームページの「管理」タブをクリックします。「プロキシ・サーバー」セクションで、「HTTP サーバー」、「HTTP サーバー・ポート」、「この文字で始まるドメインにプロキシ・サーバーを使用しない」の各フィールドに適切な値を入力します。</p> <p>6.5.1 項「手順 1: グローバル・ページの設定」を参照してください。</p>

問題：1 つまたは複数のポートレットでときどきエラー「Timeout for content={0}」が表示されます。

原因	ポートレットが応答する前に、パラレル・ページ・エンジンがタイムアウトになっています。{0} は、実際には Oracle Portal の初期のバージョンで修正されずに残っているバグです。Oracle Portal の新しいバージョンでこのエラーが発生した場合は、超過したタイムアウト値が表示されます。
解決方法	<p>使用しているリスナーの zone.properties ファイルで、次の値を設定して、デフォルトのタイムアウト周期を変更します。この値には、ポートレットが応答できるだけの十分な時間を設定する必要があります。</p> <pre>servlet.page.initArgs=requesttime=40</pre> <p>必要に応じて、値「40」を高い数値にも低い数値にも置き換えられます。</p> <p>データベースの個々のポートレットに対して、ポートレット・レコードのタイムアウトを設定することもできます。Web ポートレットでは、provider.xml のタイムアウトを増加します。</p>

問題 : Oracle Portal の実行時に、エラー「The listener returned the following message: 503 Service Temporarily Unavailable」が断続的に表示されます。

原因

この問題は、データベース・セッションが最大数に到達したために、mod_plsql がデータベースに接続できない場合に発生します。mod_plsql のデータベース接続プールは、Apache プロセス間で共有されていないため、各プロセスで専用のプールを保持しています。Apache mod_plsql にプールされたデータベース接続の総数は、発生する Apache プロセスの数と、様々な PL/SQL アプリケーションへのアクセスに使用される DAD の数に直接関連しています。PL/SQL ゲートウェイ (mod_plsql) では、各 Apache プロセスの DAD ごとにデータベース・セッションを 1 つプールします。簡単に説明すると、mod_plsql によってプールされるデータベース・セッションの最大数は次のように計算されます。

$$\text{NumberOfApacheProcesses} * \text{NumberOfDADs}$$

現在、Windows NT/2000 では、Apache はマルチスレッドで動作するため、同じデータベース接続プールをすべてのスレッドで共有しています。Windows NT/2000 の mod_plsql によってプールされるデータベース・セッションの最大数は、次のように計算されます。

$$\text{MaximumNumberOfApacheThreadsEverActiveForEachDAD}$$

原則的には、どのスレッドも別のスレッドによって作成されたデータベース・セッションを利用できます。このため、Apache がマルチスレッドで動作していないプラットフォームでは、慎重に調整することが重要です。

解決方法

Apache プロセスの設定は、プロセスの起動やシャットダウンが重くならないように調整する必要があります（各プロセスがその接続プールを解放し、新しいプロセスがそのプールを補充する必要があります）。この調整は、Web サーバーの負荷によって管理されます。

データベース・セッションの最大数は、予想される Apache プロセスの最大数に従って設定する必要があります。http.conf ファイルの次のパラメータを編集します。

- Set MaxRequests = MaxSpareServers
- MaxRequestsPerChild=HighNumber
- MinSpareServers=0
- KeepAlive off
- KeepAliveTimeOut

この設定によって、Apache プロセスがシャットダウンすることは非常にまれになり、Apache プロセス / 新しいデータベース接続の作成にかかるオーバーヘッドが大幅に減少します。

解決方法

データベース構成ファイルの processes パラメータをチェックします（init\$SID.ora => processes=NNN）。この数値は、httpd.conf ファイルに設定されている Apache プロセスの最大数と同じかそれ以上である必要があります。

StartServers+MaxSpareServers

この問題が発生しているかどうかを確認するには、SQL*Plus を介して SYS として接続し、問合せ「select username from v\$session」を発行することも 1 つの方法です。行数のカウントが processes パラメータの値とほぼ同じである場合は、プロセスの最大数を上回っている可能性が高くなります。

解決方法

PL/SQL 要求のみを処理するように個別の Oracle HTTP サーバー・リスナーを設定します。メインの Apache リスナーを使用して、PL/SQL 要求をすべてその新しいリスナーにリダイレクトすることができます。新しい Oracle9i Application Server リスナーに対しては、PL/SQL 要求しか処理しないため、Apache の processes パラメータに低い値を指定します。したがって、データベース・セッション数は最小限に抑えられます。

[5.6 項「Oracle HTTP サーバーの調整」](#)を参照してください。

問題 : Oracle Portal のページにアクセスしようとするときに、一貫してエラー「Internal Server Error」が表示されます。

原因	この問題が発生しているのは、パラレル・ページ・エンジンまたは Apache JServ エンジンが停止しているか、その設定が誤っていると推測されます。
解決方法	<p>Apache JServ プロセスが起動され、正しく設定されていることを確認します。ブラウザから次の URL にアクセスしてみてください。</p> <p><code>http://host.domain:port/servlet/IsItWorking</code></p> <p>この URL が機能しない場合は、Apache JServ に問題が発生しています。詳細は、Apache JServ のログ・ファイルを調べてください。これらのログ・ファイルは、<code><ORACLE_HOME>/Apache/Jserv/logs</code> にあります。</p>

問題 : Oracle Portal のページにアクセスしようとするときに、断続的にエラー「Internal Server Error」が表示されます。

原因	この問題が発生するのは、Apache JServ が周期的にクラッシュし、Apache によって再起動されているためであると推測されます。
解決方法	JServ と Apache の各ログ・ファイルを調べて、JServ プロセスがクラッシュする原因を突き止めます。これらのログ・ファイルは、 <code><ORACLE_HOME>/Apache/Jserv/logs</code> にあります。

問題 : Oracle Portal にアクセスしようとするときに、エラー「400 bad request」が表示されるか、Web ブラウザが停止します。

原因	SSL (Secure Socket Layer) が設定されている場合、このエラーが発生するのは、パラレル・ページ・エンジンが HTTPS ポートを介して HTTP と通信しようとしているためであると推測されます。
解決方法	<p>次の設定行を <code>zone.properties</code> ファイルに追加して、このポートにアクセスするときは必ず <code>https</code> を使用するようパラレル・ページ・エンジンに指示します。</p> <p><code>servlet.page.initArgs=httpsports=<HTTPS port></code></p>

エラー：コンテンツへの要求がタイムアウトしました。または、エラーが発生しました。

原因

これは、要求に対して返されるコンテンツのタイムアウトではありません。このメッセージは、次のいずれかが原因で接続上の問題が発生しているか、その可能性があるときに表示されます。

サーバーが停止またはオーバーロードしているか、マシンが見つからないなどの理由で接続が拒否されています。

マシン、ネットワークまたはリスナーに関するある種の不安定さが原因で、通信時に接続が閉じてしまいます。

DNS 検索、低速ネットワーク、低速リスナーなどが原因で、接続に時間がかかりすぎて確立できません。

通常は、後者がこのエラーの原因です。ただし、Web プロバイダが自分のリスナーを起動しておかない場合に、最初の原因が生じることがあります。

解決方法

JServ 構成ファイル `zone.properties` で、3 番目の問題を解決できるパラメータを設定できます。必要に応じて、次の `zone.properties` パラメータを編集します。

```
servlet.page.initArgs=stall=<time in sec>
```

秒単位の時間は、接続のストール・メカニズムの役割を果たします。このコードのデフォルトは 10 秒であり、DNS に時間がかかりすぎる場合には不十分なこともあります。通常、接続はほとんど瞬時に確立されます。ただし、接続を確立するのにもう少し時間がかかる場合は、この値を大きくすることもできます。たとえば、20 秒以上の値を入力すると、うまくいくことがあります。ただし、ストール時間を大きく設定すると、それだけパフォーマンスが低下します。

どうしても問題が解決しない場合は、接続障害の根底にある原因を突き止めます。DNS については、DNS サーバーを高速にしたり、マシンのキャッシュを大きくできます。ポートの問題（ファンクションに利用できるポートが不足している）も考えられます。この問題は、UNIX の「File Descriptors」に関連している可能性があります。

関連項目 [A.1.2 項「JServ 構成ファイル \(zone.properties\)」](#)。

8.5.4 Oracle Portal の使用時に発生するその他の問題

問題 : *interMedia Text* 索引が作成できません。

interMedia Text 索引の作成時に何らかのエラーが発生した場合は、まず次のことをチェックします。

- 1.1.8 項「[interMedia Text の要件](#)」に記述されているシステム要件がすべて満たされている必要があります。ご使用のシステムには、*interMedia Text* オプションを備えた Oracle8i データベースがインストールされている必要があります。Windows NT/2000 では、Oracle8i データベースのリリース 8.1.7 が必要です。
- また、*interMedia Text* はデータベースと同じ Oracle ホームにインストールする必要があります。Oracle8i データベースの最小限のインストールしか行わない場合、この機能はインストールされません。
- Windows NT/2000 で Oracle Portal の *interMedia Text* を使用可能にする場合は、次の要件が適用されます。
 - Oracle Portal は、Oracle 8.1.7 データベースにインストールされている必要があります。
 - 「Database Access Descriptor」 ページから接続プーリングを使用禁止にします。詳細は、Oracle9i Application Server のドキュメント・セットの一部として提供される『PL/SQL ゲートウェイの使用』を参照してください。

関連項目 : [第 6 章「Oracle Portal コンテンツ領域の検索機能の設定」](#)

原因

次のいずれかのエラーがインストール・ログに表示されている場合は、*interMedia Text* 索引の作成時に問題が発生しています。

- Cannot grant CTXAPP Role to PORTAL30.
- ERROR: Creating datastore procedures in CTXSYS
- ERROR: Setting up *interMedia Text* data stores
- 予期しないエラーが発生 (WWS-32100)

解決方法

この問題を解決するには、次の方法の1つを選択します。

- データベース・サーバーにアクセスし、Oracle Portal のコンテンツ領域を所有するスキーマのユーザー名とパスワードを使用してログインします。たとえば、スキーマ名が "SCOTT" の場合、ユーザー名 "SCOTT" と適切なパスワードでログインします。

SQL*Plus を起動して `inctxgrn.sql` スクリプトを実行します。このスクリプトは、

`<ORACLE_HOME>\portal30\admin\plssql\wws` にあります。このスクリプトを実行すると、Oracle Portal に必要な *interMedia* の作業環境が作成されます。

- データベース・サーバーへのアクセス権がなくても、`sbrimtlx` スクリプトのコピーがあれば、SQL*Plus を使用してスキーマ所有者としてデータベースに接続し、次のコマンドを実行できます。

```
set serveroutput on size 10000
begin
  wwv_context_util.grantCtxRole(user);
end;
@@sbrimtlx
```

(user) を Oracle Portal のスキーマ所有者 (portal30 など) に置き換えます。

問題 : Apache の起動時にエラー「The procedure entry point snlpcgtsrvbynm could not be located in the dynamic link library oranl8.dll」が発生します。

原因

プライマリ ORACLE_HOME には、Oracle 8.1.6 クライアント・ライブラリが入っています。この問題が発生するのは、Oracle9i Application Server のインストール後に 8.1.6 ベースの Oracle 製品がインストールされ、インストール時にプライマリ ORACLE_HOME が変更されたためであると推測されます。この問題は、Oracle Internet Directory (OID) のインストール時に確認されています。

解決方法

OID ホームの前に Oracle9i Application Server の Oracle ホームを指すように PATH 変数の値を変更します。それらの DLL に上位互換性がある場合は、Oracle9i Application Server と OID の両方がこの変更を取り入れます。別の方法として、Oracle Home Selector ユーティリティを使用して異なる Oracle ホーム間で切り換ええます。このユーティリティを使用すると、非互換性が解消されて、異なる Oracle ホーム間での切換えが行えるようになります。詳細は、使用している Oracle8i データベースのインストール・ガイドを参照してください。

エラー : missing string (login link text) language(e) domain(wwc) sub_domain(sec) Missing string(pages) language(e) domain(wwc) sub_domain(pob).

原因

このエラーは、Oracle Portal のホーム・ページにアクセスしようとして、各国語サポート (NLS) ファイルが見つからないときに表示されることがあります。

解決方法

次のいずれかの方法で解決できます。

- ブラウザの言語が Oracle Portal と一緒にインストールした言語に設定されていることを確認します。Oracle Portal は 24ヶ国語でサポートされており、デフォルトの言語は英語です。[2.6 項「Oracle Portal の言語サポートのインストール」](#)を参照してください。
 - ブラウザが Java と JavaScript を受け入れるよう設定されていることを確認します。
 - インストール・ログ・ファイルをチェックして、wwwcbusctl と wwccusctl が Oracle Portal の NLS 表 wwnls_strings\$ にロードされたかどうかを確認します。
-

エラー : PLS-00306: wrong number or types of arguments.

原因

このエラーは、既存の WebDB 2.2 がインストールされているマシンで Oracle Portal をインストールしているときに発生します。インストール済みの Oracle Portal シノニム (webdb30.www_utl_api_types) によって WebDB 2.2 のコンポーネントが無効になり、WebDB 2.2 内の既存のコンポーネントと新たに作成しているコンポーネントに問題が発生します。

解決方法

次のように、WebDB 2.2 のシノニムを削除する必要があります。

1. 適切なパスワードを使用して、SYS ユーザーとして SQL*Plus にログインします。

2. 次のコマンドを入力します。

```
drop public synonym www_utl_api_types;  
  
create public synonym www_utl_api_types for  
<webdb22schema>.www_utl_api_types
```

Oracle9i Application Server 構成ファイル

この章では、Oracle9i Application Server や中間層にあるそのコンポーネントの接続や動作に影響を及ぼす可能性のある構成ファイル、およびその接続先にある他のマシンについて説明します。

この章の内容：

- 制御ポイントとファイルの場所
 - Oracle HTTP サーバー構成ファイル ([httpd.conf](#))
 - JServ 構成ファイル ([zone.properties](#))
 - Database Access Descriptor (DAD) 設定ファイル ([wdbsvr.app](#))
 - Oracle データベース接続ファイル ([tnsnames.ora](#))
 - Login Server の設定表
 - Login Server のパートナ・アプリケーション表
 - ローカルの HOSTS ファイル

A.1 制御ポイントとファイルの場所

表 A-1 は、Oracle9i Application Server の重要な構成制御ポイントとその場所のリストです。

表 A-1 Oracle Portal の制御ポイントのリスト

構成ファイル / 表	場所または説明
Oracle HTTP サーバー	<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/conf/httpd.conf
Apache JServ	<ORACLE_HOME>/Apache/Jserv/servlets/zone.properties
PL/SQL ゲートウェイ	<ORACLE_HOME>/Apache/modplsql/cfg/wdbsvr.app
データベース接続	<ORACLE_HOME>/network/admin/tnsnames.ora
Login Server の有効な表	Oracle Portal と Login Server の設定表 WWSEC_ENABLER_CONFIG_INFO\$
Login Server の設定表	Login Server のパートナ・アプリケーションの設定表 WWSO_PAPP_CONFIGURATION_INFO\$
ローカルの HOSTS ファイル	このファイルによって、IP アドレスに対応する IP 名を解決します。 Windows NT では、このファイルは ¥Winnt¥system32¥drivers¥etc¥hosts にあります。 UNIX では、/etc/hosts にあります。

<ORACLE_HOME> は、Oracle9i Application Server がインストールされている場所を表します。

A.1.1 Oracle HTTP サーバー構成ファイル (httpd.conf)

Oracle HTTP サーバー構成ファイル httpd.conf には、Oracle HTTP サーバーを実行するための設定情報が入っています。このファイルの内容は、リスニング・ポート、サーバー名、仮想ホスト、プロキシ構成などに関する情報です。また、SSL (Secure Sockets Layer) サポートの設定もこのファイルで行います。その場合は、証明書や他の HTTPS 設定ディレクティブなどの情報を定義します。

<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/conf/httpd.conf

参照： 2.11 項「SSL (Secure Socket Layer) の有効化」

A.1.2 JServ 構成ファイル (zone.properties)

zone.properties ファイルには、Apache JServ 環境のもとで実行されるサーブレットに固有の情報が入っています。これは、パラレル・ページ・エンジンが実行される環境です。このファイルには、初期化の際にサーブレットが使用する特定のパラメータを設定します。

このファイルは、初期化のときにサーブレットによって使用されます。パラレル・ページ・エンジンでは、このファイルから特定の必須情報を取り出して、それが正しく実行されるようにします。Portal が SSL モードで実行されるように設定する場合は、どのポートが安全であるかをパラレル・ページ・エンジンに通知するための項目をこのファイルに指定しておく必要があります。このようにして、パラレル・ページ・エンジンはそれぞれのポートでどのプロトコルを使用すべきかを判断できます。ポート番号をコロン (:) で区切って、通信を保護するのに必要な数だけポートを追加できます。

関連項目： [2.10.2 項「証明書と HTTPS を使用するためのポートの保護」](#)

A.1.3 Database Access Descriptor (DAD) 設定ファイル (wdbsvr.app)

wdbsvr.app ファイルには、接続情報を定義する Database Access Descriptors (DAD) の定義が入っています。PL/SQL ゲートウェイ (mod_plsql) は、この接続情報を使用して、特定のデータベース・スキーマに接続します。

DAD は、接続先のデータベースや、そのデータベースに接続するためのユーザー名とパスワードを中間層に通知するエンティティです。適切な接続文字列を指定することにより、中間層はリモート・ホストのデータベースに接続することも、ローカル・マシンのデータベースに接続することもできます。

関連項目： Oracle9i Application Server のドキュメント・セットの一部として提供される『PL/SQL ゲートウェイの使用』

表 A-2 は、Login Server または Oracle Portal と一緒に使用する DAD を設定するための設定パラメータのリストです。

表 A-2 Database Access Descriptor (DAD) の設定パラメータ

パラメータ	説明
ユーザー名	<p>Oracle Portal の製品スキーマの名前。</p> <p>デフォルト = PORTAL30</p> <p>ユーザー名とパスワードは、ポータル・インスタンス全体にわたるトラステッド・ユーザーを示しています。Oracle9i Application Server の中間層が Oracle Portal に接続するときは、まず DAD に指定されているトラステッド・ユーザーとして接続を行います。接続が確立されると、トラステッド・ユーザーはポータル・ユーザーの実際のデータベース・ユーザー（つまり portal30_public）になり、データベースでサポートされている接続機能を使用します。このため、ポータル・ユーザーのマップの対象となるデータベース・ユーザー全員に、トラステッド・ユーザーを介して接続権限を付与する必要があります。</p> <p>Oracle Portal でスキーマを新たに作成する場合は、「スキーマの作成」ダイアログ・ボックスの「このスキーマをポータル・ユーザーに使用する」チェック・ボックスを選択します。Oracle Portal では、この権限付与が自動的に行われます。</p>
パスワード	<p>Oracle Portal の製品スキーマのパスワード。</p> <p>注意：データベースからこのパスワードに何らかの変更を加えた（alter user を使用するなどして）場合は、DAD でも同様の更新を行う必要があります。そうしない場合は、「Proxy Logon Failed」エラーが発生することがあります。</p>
Connect String	<p>接続文字列は、User name に指定したスキーマが格納されている場所を定義します。</p> <p>接続文字列は、次のように指定できます。</p> <p><hostname>:<port>:<sid></p> <p>各項目の説明：hostname はデータベースがインストールされる場所、port はデータベース・ポート、sid はデータベース・インスタンスです。</p> <p>接続文字列は、Oracle9i Application Server がインストールされている <ORACLE_HOME> に関連付けられた tnsnames.ora ファイルでも指定できます。</p>
Authentication Mode	<p>Oracle Portal と Login Server では、このモードを「シングル・サインオン」に設定します。</p> <p>このモードは、セッションの確立に対する備えであり、n 層認証を使用してデータベースにアクセスします。</p>

表 A-2 Database Access Descriptor (DAD) の設定パラメータ (続き)

パラメータ	説明
Default Page	デフォルトのページは、Oracle Portal の製品スキーマに入っているホーム・プロシージャに設定します。 デフォルト = PORTAL30.home

関連項目： Oracle9i Application Server のドキュメント・セットの一部として提供される『PL/SQL ゲートウェイの使用』

A.1.4 Oracle データベース接続ファイル (tnsnames.ora)

tnsnames.ora ファイルでは、DAD で接続文字列として使用されるエントリを定義します。

また、Oracle9i Application Server がインストールされている Oracle ホームの tnsnames.ora ファイルには、Oracle Portal のインストール・コードが格納されているデータベースを指す接続文字列を指定しておく必要があります。

たとえば、C シェルでは、コマンドライン・プロンプトで次のように入力します。

```
setenv TNS_ADMIN path
```

path は、tnsnames.ora ファイルを指します。このコマンドはシェルによって異なります。

関連項目： Oracle8i データベースのドキュメント・ライブラリに入っている『Net8 管理者ガイド』

A.1.5 Login Server の設定表

WWSEC_ENABLER_CONFIG_INFO\$ 表は、シングル・サインオンの有効なスタックの設定表です。

Login Server に関連付けられている各パートナ・アプリケーションには、設定情報を格納するためにこのような表があります。そのため、このような表は Oracle Portal のスキーマのみでなく Login Server のスキーマにもあります。Login Server アプリケーションもパートナ・アプリケーションの 1 つであるためです。この表では、このパートナ・アプリケーションが関連付けられている Login Server のログイン URL を定義します。

作成した構成に応じてどのエントリが必要になるかを計画するためには、有効な設定表での LSNR_TOKEN の使用法を理解しておくことが重要です。

この表には、複数のエントリを入力できます。アプリケーションのサーバーがアドレス指定される各方法に対してエントリを 1 つ指定します。この仕組みを理解するには、認証順序を再確認する必要があります。認証処理は、次の 4 つの流れに大きく分けられます。

- 要求された URL に最初の要求を送ります。
- 認証のため、Login Server にリダイレクトします。
- Oracle Portal の成功 URL (wwsec_app_priv.process_signon) にリダイレクトします。
- 要求された URL に戻ります。

Login Server (SSO) のパートナの有効な API では、WWSEC_ENABLER_CONFIG_INFO\$ 表を読み取って設定情報を入手します。同様に、Login Server では、Login Server のプライベート API で WWSSO_PAPP_CONFIGURATION_INFO\$ 表を読み取ります。後者の表には、各パートナ・アプリケーションにリダイレクトされる URL が指定されています。

各パートナ・アプリケーションの成功 URL は、Login Server のパートナ・アプリケーション設定表に格納されるため、パートナ・アプリケーションのホスト名を複数サポートするには、Login Server で各ホスト名に専用の「パートナ・アプリケーション」エントリを作成して、それぞれのエントリにパートナ・アプリケーションと同じホスト名を持つ成功 URL を指定できるようにする必要があります。それによって、セッション Cookie の適用範囲を正しく設定できます。さらに、Cookie が適用されるドメインには、サーバー名 (ServerName) やポートも含まれるため、server.domain.com:80 と server.domain.com:8080 は別々の Cookie ドメインと見なされます。

有効な設定表の各エントリは、パートナ・アプリケーションによって使用されたホスト名とポートに基づいて選択されます。

たとえば、Oracle Portal を <http://www.xyz.com> および <http://www.abc.com> からアクセスできるようにするとします。この場合は、2 つのパートナ・アプリケーションを Login Server に登録しておく必要があります。一方を www.xyz.com ホスト用に、もう一方を www.abc.com ホスト用に定義します。それぞれのパートナ・アプリケーションで適切な成功 URL を指定します。

- `http://www.xyz.com/pls/portal30/portal30.wwsec_app_priv.process_signon` (`www.xyz.com` パートナ・アプリケーション用)
- `http://www.abc.com/pls/portal30/portal30.wwsec_app_priv.process_signon` (`www.abc.com` パートナ・アプリケーション用)

Login Server で指定されたこれらのパートナ・アプリケーションの各エントリには、個別のサイト ID、トークンおよび暗号化キーがあります。Oracle Portal の有効な設定表には、パートナ・アプリケーションごとに行が 1 つ用意されています。たとえば、次のようになっています。

LSNR_TOKEN	SITE_ID	LS_LOGIN_URL...
<code>www.xyz.com</code>	<code>1321</code>	<code>https://www.login.com/pls/2</code>
<code>www.abc.com</code>	<code>1322</code>	<code>https://www.login.com/pls/2</code>

関連項目： 詳細は、Oracle9i Application Server のドキュメント・ライブラリに入っている『Oracle9iAS Single Sign-On Application Developer's Guide』を参照してください。

A.1.6 Login Server のパートナ・アプリケーション表

Login Server 側にある設定表は、パートナ・アプリケーション表 `WSSO_PAPP_CONFIGURATION_INFO$` です。この表の管理は通常、Login Server アプリケーションのユーザー・インタフェース（パートナ・アプリケーションの追加または編集用）を使用して行います。

単一データベース・インスタンスでの最初のインストールでは、`ssodatan` スクリプトによって、Login Server のパートナ設定表と Oracle Portal の有効な設定表の両方が生成されます。

`linstall` スクリプトを実行してスタンドアロンの Login Server をインストールする場合は、このスクリプトによって、Login Server の有効な設定表とパートナ・アプリケーション設定表がインストールの一環として生成されます。[B.3 項「linstall スクリプトを使用した Login Server の手動インストール」](#)を参照してください。

A.1.7 ローカルの HOSTS ファイル

ネットワーク・ホストにある HOSTS ファイルでは、IP 名と IP アドレスとのマッピングを定義します。通常、IP 名と IP アドレスとの関連付けは、ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) によって行われます。[第 3 章「Oracle Portal の基本構成」](#)に説明されている一部の構成では、内部のネットワーク内に定義されていないドメイン名を使用して、内部のネットワークでホストをアドレス指定することが必要な場合もあります。このような場合は、サーバーの HOSTS ファイルを使用して必要な名前解決を行うことができます。

Oracle Portal のインストールと設定のスクリプト

Oracle9i Application Server のコードと一緒に Oracle Portal をインストールした後は、いくつかのスクリプトがインストール後の設定に使用できるようになります。たとえば、構成をカスタマイズして、スタンドアロンの Login Server や他の Oracle Portal ノードなどの追加コンポーネントをインストールしたり、別の言語翻訳を Oracle Portal にロードできます。

この章の内容：

- 概要
- [winstall](#) スクリプトを使用した Oracle Portal の手動インストール
- [linstall](#) スクリプトを使用した Login Server の手動インストール
- [ssodatan](#) スクリプトを使用した新しい Oracle Portal インスタンスと Login Server の設定
- [ssodatax](#) スクリプトを使用した既存の Portal インスタンスの更新
- [Portal セッション Cookie](#) の適用範囲の変更
- [セッション・クリーンアップ・ジョブ](#)の管理

参照：

- Oracle Portal のインポートとエクスポートのスクリプトについては、「Oracle Portal オンライン・ヘルプ」の「Exporting and importing in Oracle Portal」トピックを参照してください。
-

B.1 概要

Oracle Portal の設定には、次のスクリプトが役立ちます。この付録では、それらのスクリプトについて説明します。

表 B-1 Oracle Portal のインストール・スクリプト

スクリプト	説明
winstall	<p>このスクリプトを使用すると、Oracle Portal を手動でインストールできます。Login Server をすでにインストールしてある場合は、別の Login Server をインストールしないで、Portal ノードのみをインストールします。</p> <p>B.2 項「winstall スクリプトを使用した Oracle Portal の手動インストール」を参照してください。</p>
linstall	<p>このスクリプトを使用すると、対応する Oracle Portal のインストールを行わないで、スタンドアロンの Login Server のみを手動でインストールできます。</p> <p>B.3 項「linstall スクリプトを使用した Login Server の手動インストール」を参照してください。</p>
ssodatan	<p>このスクリプトは、Login Server と一緒に新たにインストールした Oracle Portal ノードに関する設定情報を作成する役割を持っています。</p> <p>このスクリプトは、Login Server と Oracle Portal が同一のデータベース・インスタンスに格納されている環境で、初めてセットアップを行なう際に、インストールを行なっているホストで実行します。</p> <p>B.4 項「ssodatan スクリプトを使用した新しい Oracle Portal インスタンスと Login Server の設定」を参照してください。</p>
ssodatax	<p>このスクリプトは、Login Server を備えた Oracle Portal ノードに関わる設定情報を作成する役割を持っています。</p> <p>このスクリプトは、サーバーの別名や仮想ホスト名をサポートするための設定エントリを追加するときにも使用します。使用される別名ごとに別のパートナ設定エントリが必要となります。また、Oracle Portal ノードが Login Server と異なるデータベース・インスタンスに格納されているときには、すべてのインスタンスでこのスクリプトを使用する必要があります。</p> <p>B.5 項「ssodatax スクリプトを使用した既存の Portal インスタンスの更新」</p>

注意： インストール時に、これらのスクリプトは次のディレクトリに格納されます。
<ORACLE_HOME>/portal30/admin/plsql/

B.2 winstall スクリプトを使用した Oracle Portal の手動インストール

winstall スクリプトを実行して、Oracle Portal を手動でインストールしたり、Oracle Portal の Login Server を作成できます。初めて手動インストールする場合は、「マニュアル・インストレーション・ガイド」を参照してください。

winstall スクリプトを使用して Oracle Portal を手動でインストールするには、次の手順に従います。

- [手順 1: Oracle Portal の手動インストール](#)
- [手順 2: 手動インストールの確認](#)
- [手順 3: ssodatan スクリプトの実行](#)
- [手順 4: wdbsvr.app の編集](#)
- [手順 5: Oracle HTTP サーバーの停止と再起動](#)

注意： Oracle Portal の手動インストールの所要時間は、1 時間半～3 時間です。

手順 1: Oracle Portal の手動インストール

次の手順に従って、Oracle Portal を手動でインストールします。

1. Oracle8i データベースが起動していることを確認します。
2. 次のコマンドを発行して、Net8 リスナーが実行していることを確認します。

```
lsnrctl start listener
```

3. すべての ORCL データベース環境変数がそれに従って設定されていることを確認します。[第 1 章「要件の確認」](#)を参照してください。

ORCL <ORACLE_HOME>/bin が PATH 変数内で他の ORACLE_HOME の前に設定されていることを確認します。そうでない場合は、LoadJava または JDBC タイプのエラーが発生することがあります。

4. 使用している ORCL データベースを指す作業用の TNS の別名が作成されていることを確認します。SQL*Plus を使用して接続テストを行ってください。
5. ORCL <ORACLE_HOME>/bin/loadjava が正しく機能していることを確認します。loadjava -help と入力してその機能をテストし、ヘルプの使用状況を示すメッセージを表示します。
6. (オプション) OUI を使用するか手動により、前の Oracle Portal スキーマをこのデータベースに正常にインストールできた場合は、この手順を省略します。

それ以外の場合は、ディレクトリを次のように変更して、onetime スクリプトを実行します。

```
<ORACLE_HOME>/portal30/admin/plsql
```

コマンド・ボックスで、次のように onetime スクリプト・ファイルを実行して、必要な Oracle Portal のパッケージをインストールします。

```
onetime [-p sys_password] [-l logfile] [-c connect_string]
```

例 onetime -p change_on_install -l onetime.log -c orcl

注意： このコマンドは、Oracle Portal をインストールするデータベースごとに 1 回実行します。存在しないオブジェクトの削除に関する ORA メッセージはすべて無視してください。

7. コマンド・ボックスで、次の場所から Oracle Portal のインストール・スクリプト winstall を実行して、Oracle Portal 製品をインストールします。

```
<ORACLE_HOME>/portal30/admin/plsql
```

次のように、Oracle Portal のインストール・スクリプトのパラメータを実行します。

構文 - 使用法 1

```
winstall <-s portal_schema> <-p sys_password> <-u default_tablespace>  
<-t temporary_tablespace> <-d document_tablespace> <-l logging_tablespace>  
<-w workflow_schema> <-o sso_schema> <-i pstore_password> <-r random_seed>  
<-c connect_string>
```

構文 - 使用法 2

```
winstall list_tablespaces [sys_password] [connect_string]
```

構文 - 使用法 3

```
winstall uninstall sys_password portal_schema [sso_schema] [connect_string]
```

例

```
winstall -s portal30 -p change_on_install -u users -t temp -d users -l users -o  
portal30_sso -i portal30_sso_ps -r 12345 -c orcl > winstall.log
```

各パラメータの説明は、winstall ファイルに入っています。このファイルは、テキスト・エディタで開きます。インストールを開始する前に、すべての引数の妥当性チェックが行われます。

デフォルトでは、portal30、portal30_sso、portal30_sso_public、portal30_public、portal30_demo という 5 つのスキーマが作成されます。デフォルトのベース・スキーマ

名とパスワードは portal30 であり、この名前はインストール時に変更できます。詳細は、[2.1 項「Oracle Portal のデフォルト・スキーマ」](#)を参照してください。

次のように winstall を起動することにより、対応する Login Server をインストールしないで Oracle Portal ノードのみをインストールします。

```
winstall -s newportalnode -nosso
```

前述の例では、このコマンドを実行すると、対応する Login Server スキーマはロードされず、Oracle Portal ノードのみが newportalnode というスキーマにインストールされます。このコマンドの使用方法は、[第 4 章「Oracle Portal の分散型インストール」](#)に説明されている Oracle Portal の分散型インストール用のノードをインストールするときに役立ちます。

手順 2: 手動インストールの確認

インストール時に実行された操作と作成されたコンポーネントが記述されているインストール・セッション・ログを必ず確認します。このログ・ファイルを検索 (Grep) して、インストール時に「ORA-」、「PLS-」、「ERROR:」が発生しなかったかどうかを確認します。このログ・ファイルは次の場所にあります。

```
<ORACLE_HOME>/assistants/opca/install.log
```

注意： 問題が発生して winstall スクリプトを中止するか再実行する必要がある場合は、まず SQL*Plus を使用して作成された Oracle Portal スキーマをすべて削除します。たとえば、次のように入力します。

```
SQLPLUS > drop user <schema> cascade;
```

場合によっては、winstall を再実行する前に、データベースを一度停止してから再起動し、機能が停止していたり失敗しているデータベース処理をすべて解放する必要があります。これらの処理は、Oracle Portal スキーマのロックを解除するために行います。

winstall スクリプトが正常に実行され、Oracle Portal が正しくインストールされたら、次の手順に進みます。

手順 3: ssodatan スクリプトの実行

winstall スクリプトを使用して Oracle Portal ノードをインストールする場合は、その後で ssodatan スクリプトを実行して、Portal ノードと Login Server とのリンケージを確立する必要があります。

ただし、Oracle Portal ノードのインストール時に Login Server を含めなかったり、既存の Login Server にリンクしている場合は、ssodatx スクリプトを実行してリンケージを確立します。[B.5 項「ssodatx スクリプトを使用した既存の Portal インスタンスの更新」](#)を参照してください。

コマンド・ボックスで、次の場所から `ssodatan` スクリプトを実行します。

```
<ORACLE_HOME>/portal30/admin/plsql
```

このスクリプトでは、**Login Server** を介してシングル・サインオン (SSO) ログインを設定します。この機能は、**Oracle Portal** の一部としてインストールされます。

たとえば、設定を次のようにした場合：

```
DAD                      = simpledad
; (from <ORACLE_HOME>/Apache/modplsql/cfg/wdbsvr.app )
SSO DAD                  = ssodad
; (from <ORACLE_HOME>/Apache/modplsql/cfg/wdbsvr.app )
Portal schema            = portal30
Host name                 = myhost
IAS/Apache port          = 7777
TNS Alias                 = ORCL
```

次のように、`ssodatan` スクリプト (1 つの連続した行) を実行します。ポート 80 を使用する場合は、コロン ':' とポート番号をまとめて省略します。

また、ホスト名は `<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/conf/httpd.conf` ファイルの `ServerName` パラメータと一致している必要があります。

```
./ssodatan -w http://hostname:7777/pls/simpledad/ -l
http://hostname:7777/pls/ssodad/ -s portal30 -o portal30_sso -c orcl >
ssodatan.log
```

このスクリプトは数秒間で完了します。`ssodatan.log` ファイルに「ORA-」または「PLS-」タイプのエラーが記録されていないことを確認します。このようなエラーが記録されていた場合は、それらを訂正してから、`ssodatan` スクリプトを再実行します。

関連項目：

- 付録 A 「Oracle9i Application Server 構成ファイル」
 - B.4 項 「`ssodatan` スクリプトを使用した新しい Oracle Portal インスタンスと Login Server の設定」
-

手順 4: `wdbsvr.app` の編集

1. `<ORACLE_HOME>/Apache/modplsql/cfg` ディレクトリに移動します。
2. PL/SQL ゲートウェイ構成ファイル `wdbsvr.app` のバックアップ・コピーを作成します。
3. `wdbsvr.app` ファイルを編集します。既存のエントリをすべて削除し、次の初期設定 (サンプル値を使用) を追加してください。

```
;
[WVGATEWAY]
defaultDAD = simplifiedad
administrators = all
adminPath = /admin_/
admindad =
;upload_as_long_raw =
;upload_as_blob =
;debugModules =
;
[DAD_simplifiedad]
connect_string = orcl
password = portal30
username = portal30
default_page = portal30.home
document_table = portal30.wwdoc_document
document_path = docs
document_proc = portal30.wwdoc_process.process_download
upload_as_long_raw =
upload_as_blob = *
reuse = Yes
connmax = 10
enablesso = Yes
pathalias = url
pathaliasproc = portal30.wvpth_api_alias.process_download
;name_prefix =
;always_describe =
;after_proc =
;before_proc =
;
[DAD_%sso_DAD%]
connect_string = orcl
password = portal30_sso
username = portal30_sso
default_page = portal30_sso.wvssso_home.home
document_table = portal30_sso.wwdoc_document
document_path = docs
document_proc = portal30_sso.wwdoc_process.process_download
upload_as_long_raw =
upload_as_blob = *
reuse = Yes
connmax = 10
enablesso = Yes
pathalias = url
pathaliasproc = portal30_sso.wvpth_api_alias.process_download
;name_prefix =
;always_describe =
```

```
;after_proc =
;before_proc =
;
[DAD_sample]
connect_string = sample-tcp
password = sample
username = sample
default_page = sample.home
document_table = sample.wwdoc_document
document_path = docs
document_proc = sample.wwdoc_process.process_download
upload_as_long_raw =
upload_as_blob = *
reuse = Yes
connmax = 10
enablesso = Yes
pathalias = url
pathaliasproc = sample.wwpth_api_alias.process_download
;name_prefix =
;always_describe =
;after_proc =
;before_proc =
;
```

手順 5: Oracle HTTP サーバーの停止と再起動

次のコマンドを使用して、Oracle HTTP サーバーをいったん停止してから再起動します。

- <ORACLE_HOME>/Apache/Apache/bin/apachectl stop
- <ORACLE_HOME>/Apache/Apache/bin/apachectl start

SSL (Secure Sockets Layer) を使用している場合、起動コマンドは次のようになります。

- <ORACLE_HOME>/Apache/Apache/bin/apachectl startssl

注意： ご使用のブラウザで次の URL を入力して、「ゲートウェイ構成メニュー」ページにアクセスします。

- http://hostname:7777/pls/simplifiedad/admin_/gateway.htm

詳細は、Oracle9i Application Server のドキュメント・セットの一部として提供される『PL/SQL ゲートウェイの使用』を参照してください。

B.2.1 オンライン・ヘルプの手動インストール

「Oracle Portal オンライン・ヘルプ」コンテンツ領域には、概念、基本操作、手順、トラブルシューティングを示すヘルプ・トピックがあります。手動で Oracle Portal をインストールする場合は、Oracle Portal オンライン・ヘルプも手動でインストールするようにします。

<ORACLE_HOME>/portal30/admin/plsql/wwu ディレクトリで、次のスクリプトを実行します。

構文

```
./contimp.csh -s portal30 -p portal30 -o portal_help -m reuse -u  
database_user -d ../../../../doc/site/hlp30ca.dmp -c orcl
```

注意：

- 「-o」、「-m」、「-u」、「-d」には静的な値を入力します。
 - 「-s」、「-p」、「-c」の各オプションを環境にあわせて変更します。
-
-

この処理の所要時間は約 3 分間です。スクリプトの実行後に表示される次のメッセージは無視します。

```
security.dmp: No such file or directory  
pobpage.dmp: No such file or directory  
Unable to set user acl for:
```

関連項目： 詳細は、マニュアル「マニュアル・インストレーション・ガイド」を参照してください。

<http://technet.oracle.com/products/iportal>

B.3 linstall スクリプトを使用した Login Server の手動インストール

対応する Oracle Portal をインストールせずに、データベース・インスタンスに格納される Login Server のインスタンスをインストールするには、linstall スクリプトを実行します。

このスクリプトを実行すると、Login Server のスキーマがインストールされ、Login Server アプリケーションをパートナ・アプリケーションとして Login Server 自体に登録するための設定情報が自動的に作成されます。

構文

```
linstall <-o sso_schema> <-i pstore_password> <-s login_server_url> <-r random_seed>
<-p sys_password> <-u default_tablespace> <-t temporary_tablespace>
<-d document_tablespace> <-l logging_tablespace> <-c connect_string>
```

例

```
linstall -o portal30_sso -i portal30_sso_ps -s
http://server.oracle.com:3000/pls/portal30_sso/ -r 12345 -p change_on_install
-u users -t temp -d users -l users -c orcl
```

各項目の説明

表 B-2 linstall スクリプトのパラメータ

パラメータ	説明
-o sso_schema	Login Server のコード（データベース・オブジェクト）が格納されている Oracle データベース・スキーマ。 デフォルト= portal30_sso
-i pstore_password	パスワード・ストアのパスワード。 パスワード・ストアのスキーマ名は、<sso_schema>_PS です。
-s login_server_url	Login Server のホストと DAD を指す URL。ホストの完全修飾ドメイン名を入力し、URL に http:// 接頭辞を付け、URL の末尾にスラッシュ (/) を付けます。 注意: デフォルトのポート番号（443 など）を使用していない場合は、それを Login Server の URL に指定します。
-r random_seed	暗号化キーを初期化するために、乱数の生成に使用されるランダムな文字列のオプション仕様。
-p sys_password	SYS スキーマの Oracle データベース・パスワード。 デフォルト= change_on_install
-u default_tablespace	デフォルト= USERS

表 B-2 linstall スクリプトのパラメータ (続き)

パラメータ	説明
-t temporary_tablespace	デフォルト = TEMP
-d document_tablespace	デフォルト = <default_tablespace>
-l logging_tablespace	デフォルト = <default_tablespace>
-c connect_string	リモート・データベースへのオプションの接続文字列。
-casesensitive	パスワードの大文字・小文字の区別を行います。

B.4 ssodatan スクリプトを使用した新しい Oracle Portal インスタンスと Login Server の設定

ssodatan スクリプトを使用すると、最新の Oracle Portal と新規の Login Server をセットアップできます。このスクリプトを実行すると、Login Server 構成に入っている既存の設定情報がすべて完全に削除され、このスクリプトを最後に起動したときに指定した情報に置き換わります。

一方、保存しておく設定情報が含まれている既存の Login Server に Portal ノードを関連付ける場合は、このスクリプトを使用しないでください。かわりに、ssodatax スクリプトを起動してください。このスクリプトについては、次の項 [B.5 項「ssodatax スクリプトを使用した既存の Portal インスタンスの更新」](#) で説明します。

ssodatan スクリプトは、同じデータベース・インスタンスに格納されている Oracle Portal と Login Server に対してのみ使用できます。Portal と Login Server が別々のデータベース・インスタンスに格納されている構成をセットアップする場合は、linstall と ssodatax のスクリプトを組み合わせで使用します。

単一インスタンスで最新の Oracle Portal と Login Server との関連付けを行う場合は、次のように ssodatan スクリプトを起動します。

構文

```
ssodatan <-w portal_url> <-l login_server_url> <-s portal_schema>
<-p portal_password> <-o sso_schema> <-d sso_password> <-e pstore_schema>
<-c portal_connect_string>
```

構文 (Login Server のみ)

```
ssodatan -loginserver <-l login_server_url> <-o sso_schema> <-d sso_password>
<-c portal_connect_string>
```

例

```
ssodatan -w http://webdbsvr.us.oracle.com:3000/pls/portal/ -l
http://webdbsvr.us.oracle.com:3000/pls/portal_sso/ -s portal30 -p portal30 -o
```

```
portal30_sso -d portal30_sso -e portal30_sso_ps -c orcl
```

例（オプション・パラメータのスキップ）

```
ssodatan -w http://webdbsvr.us.oracle.com:3000/pls/portal/ -l  
http://webdbsvr.us.oracle.com:3000/pls/portal_sso/ -s portal30
```

例（スタンドアロンの Login Server）

```
ssodatan -loginserver -l http://webdbsvr.us.oracle.com:3000/pls/portal_sso/ -o  
portal30_sso -d portal30_sso -c orcl
```

注意： このシェル・スクリプトを実行すると、Oracle Portal と新たにインストールされた Login Server との接続を、SQL*Plus で設定するのに適したシード・データがインストールされます。

表 B-3 は、ssodatan スクリプトのパラメータのリストです。

表 B-3 ssodatan スクリプトのパラメータ

パラメータ	説明
-w portal_url	Oracle Portal ノードの DAD を指す URL。ホストの完全修飾ドメイン名を入力し、URL に http:// 接頭辞を付け、URL の末尾にスラッシュ (/) を付けます。 注意： デフォルトのポート番号（80 など）を使用していない場合は、それを Oracle Portal の URL に指定します。
-l login_server_url	Login Server のホストと DAD を指す URL。ホストの完全修飾ドメイン名を入力し、URL に http:// 接頭辞を付け、URL の末尾にスラッシュ (/) を付けます。 注意： デフォルトのポート番号（443 など）を使用していない場合は、それを Login Server の URL に指定します。
-s portal_schema	Oracle Portal のコード（データベース・オブジェクト）が格納されている Oracle データベース・スキーマ。 デフォルト = portal30
-p portal_password	Oracle Portal スキーマの Oracle データベース・パスワード。 デフォルト = <portal_schema>
-o sso_schema	Login Server オブジェクトの Oracle データベース・スキーマ。 デフォルト = <portal_schema>_SSO

表 B-3 ssodatan スクリプトのパラメータ (続き)

パラメータ	説明
-d sso_password	Login Server スキーマの Oracle データベース・パスワード。 デフォルト = <sso_schema>
-e pstore_schema	パスワード・ストアのオブジェクトにアクセスするための Oracle データベース・スキーマ。
<-c portal_connect_string>	Oracle Portal のスキーマがインストールされているデータベースの接続文字列。Oracle Portal スキーマがリモート・データベースにある場合にのみ、この接続文字列を指定する必要があります。 デフォルト = null
-loginserver	スタンドアロンの Login Server のための有効な設定エントリを作成します。このパラメータには、-w、-s、-p、-e の各オプションを使用しないでください。

警告： ポート 80 (デフォルトの HTTP ポート番号) を使用している場合は、そのポート番号を Portal URL の接頭辞や Login Server URL の接頭辞に含めないでください。

また、Web サイトへのアクセスに使用されるポートを URL に指定しないでください。一部のブラウザでは、URL に指定されたポートがデフォルトのポートであると、それを除外してしまうため、該当する有効な設定エントリを選択するときに問題が発生します。

B.5 ssodatx スクリプトを使用した既存の Portal インスタンスの更新

ssodatx スクリプトを使用すると、パートナ・アプリケーションの有効な設定表 `WSSO_PAPP_CONFIGURATION_INFO$` を更新できます。ただし、このスクリプトを実行する前に、まず **Login Server** のパートナ・アプリケーション設定表を更新して、**Login Server** 側のエントリを作成します。次の手順に従ってください。

1. **Oracle Portal** ホーム・ページで、「管理」タブをクリックします。
2. 「サービス」ポートレットで、「**Login Server** の管理」をクリックします。
3. 「パートナ・アプリケーションの管理」をクリックします。
4. 「パートナ・アプリケーションの追加」をクリックします。
5. 「パートナ・アプリケーションへのログイン」セクションで、パートナ・アプリケーションの名前、そのアプリケーションのホーム・ページへの URL、成功 URL を入力します。
6. 「ログイン可能期間」セクションで、ユーザーが **Login Server** を介してこのアプリケーションにログインできる日数を入力します。「終了日」フィールドを空白にしておくと、ユーザーは永久にそのアプリケーションにログインできます。「アプリケーション管理者」セクションで、このアプリケーションの連絡先または管理者の電子メール・アドレスなどの情報を入力します。
7. 「OK」をクリックします。

新しいパートナ・アプリケーションが、「パートナ・アプリケーション」ページの「パートナ・アプリケーションの編集 / 削除」リストに表示されます。**Login Server** でパートナ・アプリケーションのエントリを追加した後、**Login Server** によって新しいパートナ・アプリケーションのサイト ID、サイト・トークンおよび暗号化キーが生成されます。これらは、ssodatx スクリプトの起動時に入力データとして使用されます。

有効な設定表のエントリを追加または更新する場合は、次のように ssodatx スクリプトを起動します。

構文

```
ssodatx <-i portal_site_id> <-t portal_site_token> <-k encryption_key>
<-w portal_url> <-l login_server_url> <-s portal_schema> <-p portal_password>
<-v cookie_version> <-o sso_schema> <-e pstore_schema> <-r pstore_password>
<-b pstore_dblink> <-c connect_string> <-n ps_connect_string>
```

構文（有効な設定エントリの削除）

```
ssodatx <-s portal_schema> <-p portal_password> <-remove portal_host>
<-b pstore_dblink> <-c connect_string>
```

例

```
ssodatx -i 1234 -t A1B2C3 -k X9Y8Z7 -w
```

```
http://webdbsvr.us.oracle.com:3000/pls/portal30/ -l
http://webdbsvr.us.oracle.com:3000/pls/portal30_sso/ -s portal30 -p portal30 -v v1.1
-o portal30_sso -e portal30_sso_ps -r portal30_sso_ps -b portal30_dblink -c orcl -n
orcl01
```

例（オプション・パラメータのスキップ）

```
ssodatax -i 1234 -t A1B2C3 -k X9Y8Z7 -w
http://webdbsvr.us.oracle.com:3000/pls/portal30/ -l
http://webdbsvr.us.oracle.com:3000/pls/portal30_sso/ -s portal30
```

例（削除）

```
ssodatax -s portal30 -remove webdbsvr.us.oracle.com:3000 -b portal30_dblink
```

表 B-4 は、ssodatax スクリプトのパラメータのリストです。

表 B-4 ssodatax スクリプトのパラメータ

パラメータ	説明
-i portal_site_id	この ID は、パートナ・アプリケーション（この場合は、Oracle Portal のコード）が追加されるときに自動的に設定されます。Login Server では、これを使用してこのノードのパートナ・アプリケーションを識別します。
-t portal_site_token	このトークンは、パートナ・アプリケーション（この場合は、Oracle Portal のコード）が追加されるときに自動的に設定されます。Login Server では、これを使用してパートナ・アプリケーションを識別します。 パートナ・アプリケーションは、認証を依頼するときに、アプリケーション・トークンを使用してこのノードの Login Server に自分自身を識別してもらう必要があります。
-k encryption_key	ユーザーがシングル・サインオンを使用してこの Oracle Portal ノードにログインしようすると、ユーザーの ID とそのユーザーが認証されたかどうかを示す Cookie が Login Server によって生成されます。このキーによって、ログイン Cookie が暗号化されます。
-w portal_url	この Oracle Portal ノードとアクセスされる DAD の URL 接頭辞。ホストの完全修飾ドメイン名を入力し、URL に http:// 接頭辞を付け、URL の末尾にスラッシュ (/) を付けます。
-l login_server_url	Login Server のホストと DAD の URL 接頭辞。ホストの完全修飾ドメイン名を入力し、URL に http:// 接頭辞を付け、URL の末尾にスラッシュ (/) を付けます。

表 B-4 ssodatax スクリプトのパラメータ (続き)

パラメータ	説明
-s portal_schema	Oracle Portal のコード (データベース・オブジェクト) が格納されている Oracle データベース・スキーマ。 デフォルト = portal30
-p portal_password	Oracle Portal スキーマの Oracle データベース・パスワード。 デフォルト = <portal_schema>
-v cookie_version	Login Server によって使用される Cookie のバージョン。 デフォルト = v1.1
-o sso_schema	Login Server オブジェクトの Oracle データベース・スキーマ。 デフォルト = <portal_schema>_SSO
-e pstore_schema	パスワード・ストアへのアクセスに使用する Oracle データベース・スキーマ。 デフォルト = <sso_schema>_PS
-r pstore_password	パスワード・ストアのアクセス・スキーマの Oracle データベース・パスワード。 デフォルト = <pstore_schema>
-b pstore_dblink	異なるデータベース・インスタンス間で Oracle Portal のスキーマからパスワード・ストアのアクセス・スキーマに接続するためのデータベース・リンクの名前。 デフォルト = <portal_schema>_DBLINK
-c connect_string	Oracle Portal のスキーマがインストールされているデータベースの接続文字列。Oracle Portal のスキーマがリモート・データベースに格納されている場合にのみ、この接続文字列を指定します。 デフォルト = null
-n ps_connect_string	リモート・データベースにあるパスワード・ストアのアクセス・スキーマに接続するための接続文字列。 デフォルト = null
-remove portal_host	指定された Portal ホストに関連付けられている有効な設定エントリを削除します。

-remove オプションを指定して ssodatax スクリプトを実行すると、有効な表からエントリが削除されます。このオプションを使用するときは、次のパラメータを適用できます。

- -s portal_schema

- -p portal_password
- -remove portal_host

portal_host は、有効な表から削除する lsnr_token の値です。

- -c connect_string

関連項目： Oracle Portal の起動時に何らかの問題が発生した場合は、[第 8 章「トラブルシューティング」](#)を参照するか、診断ツールを実行してください。

B.6 Portal セッション Cookie の適用範囲の変更

Oracle Portal の分散環境をインストールし、明確な名前の付いた中間層サーバーを 1 つ以上構成する必要がある場合は、そのアーキテクチャにかかわるすべての中間層サーバーに送信されるように Oracle Portal セッション Cookie の適用範囲を定義する必要があります。デフォルトでは、セッション Cookie は、その生成元（通常はルート・パス）のホストに適用されます。

たとえば、Cookie が `www.oracle.com` から生成された場合、Cookie ドメインは `www.oracle.com` となります。しかし、別のサーバー `portal.oracle.com` も、そのセッション Cookie にアクセスする必要がある中間層サーバーである場合は、`portal.oracle.com` サーバーもその Cookie を参照できるように、Cookie ドメインの適用範囲を広げる必要があります。

次の手順に従って、Portal セッション Cookie の適用範囲を変更します。

1. 次のディレクトリに移動します。

```
<ORACLE_HOME>/portal30/admin/plsql/wwc
```

2. Login Server スキーマがインストールされているデータベースで、適切なユーザー名とパスワードを使用して SQL*Plus にログインします。たとえば、次のようになります。

```
sqlplus nodea/nodea
```

3. 次のコマンドを入力します。

```
SQL> @ctxckupd
Oracle Portal
Current Settings for Portal Session Cookie:
Cookie Domain : Only send cookie back to originating host:port
Enter the domain for the session cookie: .oracle.com
Settings changed to
Cookie Domain : .oracle.com
SQL>
```

このコマンドを使用すると、セッション Cookie の Cookie ドメインを設定できます。前述の例では、Cookie ドメインは `.oracle.com` に設定されます。

ヒント:

各種のリッスナーを使用したり、複数のドメイン間でセッション Cookie を保持している場合は、Cookie ドメインがホスト名のみになるように指定します。たとえば、次の 2 台のマシンから Oracle Portal にアクセスする場合

- `machine1.us.oracle.com:3000`
- `machine2.us.oracle.com:4000`

`ctxckupd.sql` を実行するときは、Cookie ドメインを `.us.oracle.com` に設定します。

参照: [4.4.2 項「手順 2: 同一の Cookie ドメインの作成」](#)

B.7 セッション・クリーンアップ・ジョブの管理

Oracle Portal と Login Server は、他の Web ベース・アプリケーションと同様のセッション管理を行います。セッションは、Cookie を使用して追跡されます。セッション情報は、Portal および Login Server スキーマの表に格納されます。ユーザーがログアウトすると、セッション情報に非アクティブのマークが付きます。その後、DBMS ジョブによって非アクティブの行が削除されます。

セッション表では、アクティブのフラグが付いている行の数を累積します。ユーザーがログアウトするかわりにブラウザをシャットダウンすると、行は実際には使用されていなくても「アクティブ」になります。クリーンアップ・ジョブによって、指定した期間を超えているアクティブな行が削除されます。

Oracle Portal をインストールすると、DBMS ジョブがインストールされてセッション表 `WWCTX_SSO_SESSION$` のセッション・クリーンアップを実行します。クリーンアップ・ジョブは、24 時間経過するたびに実行するよう設定されます。スケジューリングした最初のクリーンアップは、ジョブのインストールの 24 時間後に実行されます。

ジョブが実行されると、非アクティブのセッションがすべて削除され、7 日より古い (`WWCTX_SSO_SESSION$.SESSION_START_TIME < sysdate - 7`) すべてのセッションにアクティブのマークが付きます (`WWCTX_SSO_SESSION$.ACTIVE = 1`)。

これらのデフォルト設定は、Portal セッションを管理する Portal スキーマ、または Login Server セッションを管理する Login Server スキーマのいくつかのジョブ管理スクリプトを実行することによって変更できます。それらは、同じセッション管理インフラストラクチャを利用します。

現在のクリーンアップ・ジョブ情報を取得するには、次の手順に従います。

1. 次のディレクトリに移動します。

```
<ORACLE_HOME>/portal30/admin/plsql/wwc
```

2. Portal または Login Server スキーマがインストールされているデータベースで、そのスキーマの適切なユーザー名とパスワードを使用して SQL*Plus にログインします。たとえば、次のようになります。

```
sqlplus portal30/portal30
```

3. 次のコマンドを入力して、現在のジョブ情報を取得します。

```
SQL> @ctxjget
The session cleanup job is job ID 7381
dbms_job.isubmit(job=>7381,what=>'begin execute immediate' 'begin
wwctx_sso.cleanup_sessions(p_hours_old => 168); end;''; exception when
others then null; end;','next_date=>to_date('2001-04-17:14:07:20',
'YYYY-MM-DD:HH24:MI:SS'),interval=>'SYSDATE + 24/24',no_parse=>TRUE);

PL/SQL procedure successfully completed.
```

コマンドを実行すると、現在インストールされているジョブ情報が DBMS_JOB パッケージによって返されて表示されます。ジョブ情報には、実行されるプロシージャ、そのプロシージャに渡されるパラメータ、および次回の起動日時が示されます。この例では、1 週間（168 時間）経過したアクティブなセッションがジョブによって削除されます。また、スケジューリングされた次回のジョブは 2001 年 4 月 17 日午後 5 時 14 分に実行され、その後ジョブは 24 時間経過するたびに実行されます。

ジョブの実行を変更して、削除対象となるセッションの持続時間を変更したり、クリーンアップの頻度を増減する必要がある場合は、ctxjsub.sql スクリプトを実行して、変更した実行パラメータを送付することができます。

変更したジョブ実行パラメータを送付するには、次の手順に従います。

1. 次のディレクトリに移動します。

```
<ORACLE_HOME>/portal30/admin/plsql/wwc
```

2. Portal または Login Server スキーマがインストールされているデータベースで、そのスキーマの適切なユーザー名とパスワードを使用して SQL*Plus にログインします。たとえば、次のようになります。

```
sqlplus portal30/portal30
```

3. 次のコマンドを入力して、新しいクリーンアップ・ジョブ情報を送付します。

```
@ctxjsub <hours_old> <start_time> <time_format> <interval_hours>
```

表 B-5 は、ctxjsub パラメータのリストです。

表 B-5 ctxjsub パラメータ

パラメータ	説明
hours_old	削除対象のアクティブ・セッションの持続時間。
start_time	次のジョブを実行する時刻。
time_format	start_time の書式を指定する時刻の書式の文字列。
interval_hours	クリーンアップ・ジョブの実行間隔（単位：時間）。

たとえば、次のようになります。

```
SQL> @ctxjsub 200 '04/17/2001 10:00' 'MM/DD/YYYY HH24:MI' 12
Created path for job id.
DBMS_JOB id = 7381
Cleanup job updated. Job ID = 7381
```

PL/SQL procedure successfully completed.

クリーンアップ・ジョブの送付スクリプトは、何度でも実行して実行パラメータを変更することができます。スクリプトを起動するたびに、クリーンアップ・ジョブのジョブ ID に関連付けられたジョブ情報が更新されます。このジョブ ID は、格納された環境設定で管理され、複数のジョブを送付するかわりにジョブ情報が更新されるようになります。

'START' の start_time を指定することもできます。この場合、time_format パラメータは無視されますが、値を渡す必要があることには変わりはありません ('NOW' など)。結果として、現時点から <interval_hours> 時間、ジョブが実行されます。

```
SQL> @ctxjsub 168 START NOW 24
```

これにより、インストールのときと同じようにジョブが送付されます。

クリーンアップ・ジョブをすぐに実行する場合は、ctxjget.sql をコールしてジョブ ID を取得します。ジョブ ID を取得できたら、製品スキーマで次のコマンドを発行してジョブを実行できます。

```
SQL> exec dbms_job.run(7381);
```

前述の例では、7381 が ctxjget.sql のコールによって返されるジョブ ID です。この方法でジョブを実行すると、この手動起動から interval_hours 時間後に次のジョブが自動的に起動します。元のスケジュールでジョブを実行するには、ctxjsub.sql を使用して目的の start_time を再送付する必要があります。

数字

3 層アーキテクチャ

Oracle Portal の構成, 3-5

503 Service Temporarily Unavailable, 8-25

503 エラー, 1-5

A

Apache, 8-23

Windows NT でのマルチスレッド, 8-25

処理できる要求の数の設定, 5-19

プロセス設定の調整, 8-26

ログ・ファイルの場所, 8-3

apachectl, 8-18

AUTHENTICATED_USERS

作成されるデフォルトのグループ, 2-4

B

BLOB, 7-7, 7-10

C

contimp.csh, B-9

Cookie ドメイン

すべての中間層サーバーに送信するための適用範囲
の変更, B-17

すべてのノードで同じものを作成, 4-8 ~ 4-9

ノード要件, 4-5

ctxckupd.sql, 4-6, 4-9, B-17

ctxcrind.sql, 6-13

ctxdrind.sql, 6-17

ctx_schedule, 6-15, 6-16

ctxsrv, 6-9

ctxsys, 6-20, 8-29

D

Database Access Descriptor (DAD)

すべてのノードで編集, 4-9 ~ 4-10

中間層のサーバーでの設定, 5-17 ~ 5-18

定義, A-3

データベースとの関係, 5-19

データベースのログイン失敗, 8-17

必要とされる共通の Cookie 名, 4-6

ブラウザでの指定, 2-6

DBA

作成されるデフォルトのグループ, 2-4

diag.jar, 8-5

Diagnose.class, 8-5

diag スクリプト, 8-5

drbgdml.sql, 6-16

F

FAST MODE

interMedia Text のモード, 6-15

FULL MODE

interMedia Text のモード, 6-15

G

gateway.htm, 8-18

H

HOSTS ファイル

localhost エントリ, 3-2

定義, A-8

- ドメイン名の解決, 5-16
- 場所, 8-7
- HTTP, 8-3
 - 400 エラー, 8-21
 - デフォルトのポート 80, 8-20
- http.conf, 5-20
 - 仮想ホストの設定, 5-7
- httpd.conf, 2-19, 5-14, 5-20, 8-19
 - 定義, A-2
 - ファイルの場所, 8-7, A-2
- httpd_error.log, 8-2
- HTTPS, 2-18, 2-21, 8-27
 - 証明書との併用, 2-17

I

- init.ora, 6-3, 8-11, 8-12, 8-13
 - 必要な設定, 1-5
- install.log, 8-2
- interMedia Text
 - listner.ora の設定, 6-18
 - Oracle Portal での検索, 6-6
 - tnsnames.ora の設定, 6-19
 - 環境変数の設定, 6-18 ~ 6-19
 - 管理と同期化, 6-15
 - 索引の削除, 6-17
 - 作成, 6-13 ~ 6-14
 - 作成時のエラー, 8-29
 - システム要件, 1-6
 - 前提条件, 6-2
 - 他の情報の入手, 7-3
 - 有効化, 6-11 ~ 6-12
 - リッチ・コンテンツでサポートしていない, 7-2

J

- Java, 8-31
 - JVM オプションがインストールされないときのエラー, 8-11
 - SSOHash クラス, 8-14
- JAVA_POOL_SIZE, 1-5, 8-12, 8-19
- JavaScript, 1-4, 8-31
- JServ, 1-3, 8-2, 8-3, 8-27, 8-28

K

- KeepAlive, 8-26

L

- langinst, 2-7, 2-8
- LDAP, 5-6, 5-18
- LD_LIBRARY_PATH, 6-3
 - interMedia Text の設定, 1-6
- linstall, 3-7, 5-5, A-7
 - 構文, B-10
 - ファイルの場所, 8-7
- listener.ora, 6-18
- Login Server
 - DAD の確認, 8-2
 - Oracle Internet Directory (OID) を使用して構成される, 5-6
 - Oracle Portal の関連付け, 5-3 ~ 5-6
 - WWSO_PAPP_CONFIGURATION_INFO 表の場所, 8-7
 - インストールされるスキーマ, 2-2
 - 管理者権限を持つユーザーの作成, 4-13
 - 個別リスナーの設定, 5-1 ~ 5-6
 - 削除, 2-11
 - 作成されるアカウント, 2-3
 - 手動インストール, B-10
 - シングル・サインオン用の集中型, 4-1
 - スキーマ作成時のエラー, 8-16
 - すべてのノードで共通, 4-6
 - 設定の編集に必要な権限, 4-7
 - パートナ・アプリケーション表, A-7
 - 必要とされる同一の Cookie ドメイン, 4-6
 - 複数のノードと同じものとの関連付け, 4-11 ~ 4-13
 - 別々のインスタンスの構成, 3-6 ~ 3-8
 - 間違った設定, 8-4
 - 無効なパッケージのエラー, 8-17
- LSNR_TOKEN, A-6, B-17

M

- MaxClients, 5-20
- MAX_ENABLED_ROLES, 1-5
- MaxRequestsPerChild, 8-26
- Metalink, 8-23
- Microsoft Internet Explorer, 1-4
 - ブラウザ
 - Internet Explorer での HTTPS の設定, 2-24
- MIME タイプ, 7-7
 - サポート, 7-4
- MinSpareServers, 8-26

mod_jserv, 5-14
mod_plsql, 5-14, 8-2, 8-23, 8-25
mod_ssl, 2-21

N

Net8
 Proxy Log On Failed, 8-21
Netscape, 1-4
-nosso, 4-8, B-5

O

onetime, B-4
ORA-01445, 7-10
Oracle8i データベース
 UTL_HTTP の欠落, 8-23
 システム要件, 1-3
 リッチ・コンテンツが格納されている, 7-1
 ログイン・エラー, 8-17
Oracle9i Application Server
 アーキテクチャ, 1-2
 インストールされるコンポーネント, 1-1
 構成ファイル, A-1 ~ A-8
 構成ポイントとファイルの場所, 8-7
ORACLE_HOME
 Oracle 8.1.6 クライアントのエラー, 8-30
 各種の Oracle HTTP サーバー・ファイルの場所,
 8-8
 このガイドで使用する表記規則, xi
 要件, 1-4
 ラップトップ構成の設定, 3-3
Oracle HTTP サーバー
 1 つのノードまたは複数のノード, 4-5
 Login Server と Oracle Portal の個別リスナーの設
 定, 5-1
 頻繁なクラッシュの解決, 8-23
Oracle Internet Directory (OID), 8-30
 Login Server で構成される, 5-6
Oracle JServer オプション
 システム要件, 1-3
Oracle Portal
 Oracle8i データベース要件, 1-3
 インストールされるコンポーネント, 1-1
 グループのデフォルト, 2-4
 グローバル設定の指定, 6-10
 言語サポートの設定, 2-7, 2-9

異なるバージョン間の ServerName の違い, 5-12
削除, 2-10
システム要件, 1-3
デフォルト・スキーマ, 2-2
デフォルトのホーム・ページ, A-5
トラブルシューティング, 8-1 ~ 8-32
パートナ・アプリケーション, 3-6, ?? ~ 3-8
ブラウザでのアクセス, 2-5
分散環境の設定, 4-7 ~ 4-17
ベータ版の機能の有効化, 2-14
別々のインスタンスの構成, 3-6 ~ 3-8
マニュアル, xii
問題の原因となっているコンポーネントの識別,
 8-2
 リリース間でのディレクトリ構造の変更, 8-8
Oracle Portal Configuration Assistant
 エラー, 8-11, 8-13, 8-14
 デフォルト表領域, 1-4
Oracle Portal Development Kit (PDK), 4-7
Oracle Technology Network, 4-7

P

PLS-00306, 8-32
PL/SQL
 Web Toolkit (OWA) のエラー, 8-17
 データベース要件, 1-3
 パッケージの作成に失敗, 8-17
PL/SQL ゲートウェイ
 503 エラー, 8-25
 中間層のソフトウェアの場所, 3-6
portal30
 Oracle Portal のデフォルト・スキーマ名, 2-2
portal30_sso
 Login Server のデフォルト・スキーマ名, 2-2
PORTAL_ADMINISTRATORS
 作成されるデフォルトのグループ, 2-4
PORTAL_DEVELOPERS
 作成されるデフォルトのグループ, 2-4
PORTLET_PUBLISHERS
 作成されるデフォルトのグループ, 2-4
Proxy log on failed, 8-22

R

-remove, B-16

S

sbrimtlx.sql, 6-20
selfreg, 2-12
ServerName, 2-5, 3-2, 3-4, 5-8, 5-12, A-6, B-6
 Oracle Portal バージョン間の違い, 5-12
Set MaxRequests, 8-26
SHARED_POOL_SIZE, 1-5, 8-11, 8-18
SID
 interMedia Text, 6-18
snlpcgtsrvbynm, 8-30
SQL, 7-2
SQL*Net, 8-3
SSL (Secure Socket Layer)
 「400 bad request」エラー, 8-27
 有効化, 2-21
ssodatan, 2-18, 8-3, 8-4, 8-20, B-6
 構文, B-11
 ファイルの場所, 8-7
ssodatan.log, B-6
ssodatax, 3-7, 4-13, 5-3, 5-4, 5-5, 5-8
 構文, B-14
 ファイルの場所, 8-7
SSOHash, 8-14, 8-19
SYS ユーザー, 1-3, 8-11

T

TCP/IP, 2-25, 3-2, 5-8, 5-16
tnsnames.ora, 6-19, 8-18, A-5
 ファイルの場所, 8-7, A-2

U

UNIX
 interMedia Text 変数, 6-3
 端末の設定, 1-5
URL
 Login Server に格納されているパートナ・アプリケーション, A-6
 Oracle Portal アドレスの簡略化, 2-6
 Oracle Portal ホーム, 3-7
 「utl_http のコールに失敗しました」エラー, 8-24
 パートナの有効な設定表に格納されている, 8-4
 ポート 443 の除外, 2-24
 無効なアンダースコア, 8-21
useCanonicalName on, 5-14

UTL_HTTP, 2-23, 8-23

W

wdbsvr.app, B-6
 定義, A-3
 ファイルの場所, 8-7, A-2
WebDB 2.2, 8-32
webdb30.www_utl_api_types, 8-32
Windows NT
 FAT ファイル・システム, 1-4
wininstall
 Oracle Portal を手動でインストールする手順, B-3
 構文, B-4
 ファイルの場所, 8-7
WWC-41439, 8-19
wwctx_api_vpd, 2-12
WWS-32100, 8-29
wwsec_app_priv.process_signon, 3-7, 5-3, A-6
wwsec_diagnostics, 8-5
WWSEC_ENABLER_CONFIG_INFO\$, 8-7, 8-15,
 A-2, A-6
wwsso_api_user_admin, 2-12
WWSO_PAPP_CONFIGURATION_INFO\$, A-2,
 A-7, B-14
wwwseedus.sql, 2-7

Z

zone.properties, 2-17, 8-24, 8-27, 8-28
 定義, A-3
 ファイルの場所, 8-7, A-2

あ

アカウント
 ユーザーに自分のものを作成させる, 2-12

い

イメージ
 interMedia リッチ・コンテンツの追加, 7-2
インストール
 Oracle Portal のコンポーネント, 1-1
インポート, B-1

え

エクスポート, B-1

エラー

400 bad request, 8-27

503, 1-5

503 Service Temporarily Unavailable, 8-25

Apache リスナーのクラッシュ, 8-23

cannot find package DR_REWRITE, 6-3

Database Login Failure, 8-17

HTTP 400, 8-21

interMedia Text 索引の作成, 8-29

interMedia Text はインストールされていません,
6-12

Internal Server Error, 8-27

JavaScript, 1-4

JVM (Java Virtual Machine) がインストールされ
ない, 8-11

Login Server の作成, 8-16

NLS 言語, 8-31

ORA-01445, 7-10

Oracle Portal Configuration Assistant での, 8-11,
8-13, 8-14

Oracle Portal の実行時に発生する問題のリスト,
8-9

Oracle Portal の使用時に発生するその他の問題のリ
スト, 8-9

Oracle Portal へのログイン, 8-19, 8-22

Oracle Portal へのログイン時に発生する問題のリ
スト, 8-9

ORA と PLS, B-5

PLS-00306, 8-32

PL/SQL Web Toolkit (OWA), 8-17

Proxy Log On Failed, 8-21, A-4

Timeout for content={0}, 8-24

TNS could not resolve service name, 8-21

utl_http のコールに失敗しました, 8-24

WWS-32100, 8-29

インストールと構成上の問題のリスト, 8-8

手動インストール時に受信された, B-5

スキーマの検索, 8-15

データベース・オブジェクトの作成に失敗, 8-16

トラブルシューティング, 8-1 ~ 8-32

表領域, 8-14

無効な Login Server のパッケージ, 8-17

お

オーディオ

interMedia リッチ・コンテンツの追加, 7-2

オペレーティング・システム

要件, 1-3

か

ガイド, x

Net8 Administrator's Guide, 6-19

構成, x

表記規則, xi

拡張性

Oracle Portal の分散環境でのソリューション, 4-3
~ 4-4

仮想ホスト

HTTPS の設定, 2-25

設定, 5-7 ~ 5-8

く

グループ

Oracle Portal のデフォルト, 2-4

け

言語

interMedia Text のマルチレクサー, 6-20

Oracle Portal でサポートされる, 2-7 ~ 2-9

エラー, 8-31

こ

コンテンツ領域

Oracle Portal スキーマの一部, 1-4

作成, 6-2

さ

サーバー

統合された Oracle Portal の構成, 3-4

プロキシ, 5-11

し

システム要件, 1-3, 8-2

- interMedia* Text, 6-2
- 自動登録, 2-12
- 証明書
 - HTTPS との併用, 2-17
- シングル・サインオン (SSO)
 - Login Server の登録, 5-8
 - Oracle Portal の分散環境の設定, 4-1
 - インストールされるコンポーネント, 1-1
 - 失敗, 4-6
 - 認証モードの設定, A-4
- 診断ツール, 8-3 ~ 8-7

す

- スキーマ
 - ctxsys, 6-20
 - Oracle Portal のデフォルト, 2-2, B-5
 - データベース・オブジェクトの作成に失敗, 8-16
 - ポータルで作成されない, 8-15
 - リッチ・コンテンツの格納, 7-1
- スクリプト
 - 場所, B-2

せ

- 成功 URL, 5-3
- セキュリティ
 - パスワードの変更, 2-3
- セッション
 - Cookie, B-18
 - 数の決定, 5-19
- 接続ブーリング, 1-6, 5-1, 6-2, 8-26, 8-29
- 接続文字列, 3-8
 - wdbsvr.app で指定される, A-4

た

- タイムアウト, 8-28
 - KeepAlive パラメータ, 8-26
- エラー, 8-24
- 端末
 - 必要な設定, 1-5

ち

- 中間層
 - Oracle9i Application Server, 3-2, 3-5, 3-6

- ロード・バランシングの設定, 5-17
- 調整
 - Apache プロセスの設定, 8-26

て

- ディレクティブ
 - 複数の別名をサポートする, 5-15
- テーマと要旨
 - interMedia* Text の有効化, 6-12
 - 表示, 6-7

と

- 読者, x
- ドメイン
 - DNS, 8-28
 - HOSTS ファイルでの解決, 5-16
 - HOSTS ファイルに入っている DNS, A-8
- トラブルシューティング, 8-1 ~ 8-32
 - 診断ツール, 8-3
 - 問題の原因となっているコンポーネントの識別, 8-2

な

- ナビゲータ
 - ページやコンテンツ領域の検索に使用, 6-3
 - リッチ・コンテンツのブラウズに使用, 7-9

の

- ノード
 - 作成, 4-8
 - 対称型登録, 4-6
 - 追加作成, 4-16
 - 定義, 4-3
 - 名前の検出, 4-14
 - ノード間での登録, 4-14 ~ 4-15
 - ポートレット・リポジトリのリフレッシュ, 4-16
 - 要件, 4-5

は

- パートナ・アプリケーション
 - Login Server の設定表での, A-6
 - Oracle Portal の設定, 5-2

- 作成, 5-3
- 成功 URL, A-6
- 追加, 4-12, B-14
- 別々の Oracle Portal と Login Server インスタンスの構成, 3-6 ~ 3-8
- パスワード
 - アカウントの変更, 2-3

ひ

- ビデオ
 - interMedia* リッチ・コンテンツの追加, 7-2
- 表領域, 8-12
 - エラー, 8-14
 - サイズ変更に関するヒント, 8-13
 - 最低条件, 1-4
 - マルチレクサーのために増加, 6-20

ふ

- ファイアウォール, 5-11, 5-16, 5-18
- フォーム
 - オブジェクト属性, 7-3
 - 現在わかっている問題, 7-10
 - リッチ・コンテンツの作成, 7-7
 - リッチ・コンテンツの追加, 7-7
- ブラウザ
 - Oracle Portal URL の簡略化, 2-6
 - Oracle Portal でサポートされる, 1-4
 - Oracle Portal のアクセス, 2-5
 - Web サーバーとの通信, 2-21
 - システム要件, 1-4
 - ポートレットに送信される Cookie, 4-5
- プラグイン, 7-7
- プロキシ・サーバー, 5-11, 5-16, 6-10
- 分散環境
 - アーキテクチャ, 4-1
 - 設定, 4-7 ~ 4-17
 - 設定に必要な権限, 4-7
 - 利点, 4-3 ~ 4-4

へ

- 別名, 8-20
 - 複数のサポート, 5-15
- ベリサイン, 2-19
- ヘルプ

- 手動インストール, B-9

ほ

- ポート
 - 443, 2-24
 - 80 を使用している場合に含めない, B-13
 - Apache JSev での競合, 8-2
 - HTTPS, 2-18
 - Oracle Portal のアクセスに使用される, 2-5
 - ポート 80 の削除, 8-20
- ポートレット・プロバイダ
 - ノード間で共有, 4-3
- ポートレット・リポジトリ
 - リフレッシュ, 4-16

ま

- マルチレクサー
 - interMedia Text* でサポートされた, 6-20

ら

- ラップトップ
 - Oracle Portal の構成, 3-2 ~ 3-3

り

- リスナーのクラッシュ, 8-23
- リダイレクト
 - Apache リスナー, 8-26
 - Oracle Portal URL の簡略化, 2-6

る

- ルーター
 - ロード・バランシングの設定, 5-17

れ

- レポート
 - QBE パラメータ入力フォーム, 7-6
 - ウィザード, 7-2
 - オブジェクト属性, 7-3
 - 現在わかっている問題, 7-10
 - 表示オプション, 7-3
 - リッチ・コンテンツを使用した作成, 7-4

ろ

ログ

- Apache の場所, 8-3
- Apache リスナー, 8-2
- ssodatan.log, B-6
- インストール, 8-2
- 問題の兆候, 8-15